1997

大正十三年一月二十九日（第三種郵便物認可）
昭和五年一月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人　編輯

一月號

【第百三十一號】

朝鮮臺灣及滿蒙

誰でも直ぐ使へる

大谷和文タイプライター

が參りました

○和英兼用　○鞄に入れて携行自由　○字數二千四百外換自由

朝鮮中央總代理店

京城明治町一

櫻井秀專商店

電本局三〇〇二番

謹賀新年

何かの御機會に
銘酒『福迎』
きこし召され
御批評賜はり候へば
光榮これに過ぎず候

深き自信を以て
新釀『リットル』を
市に出しました
大方博雅の御方々に
これ亦御高批願上候

本町電車終點

難波酒造場

電話 本一六四一 光一五四一

於全鮮酒類品評會

最高名譽賞受領

鮮産酒中の

絶品と評せらる

特製瓶詰（二リットル入）

貳圓五十錢

朝鮮博覽會　金牌受領

仁川唎酒會　最高名譽賞

仁川　朝日釀造株式會社

謹賀新年

明るい店買よき店をモットウとして百貨店を開設以來萬事不行届にも不拘日に増し御來店を賜はる段誠に感銘の至りに堪へません。

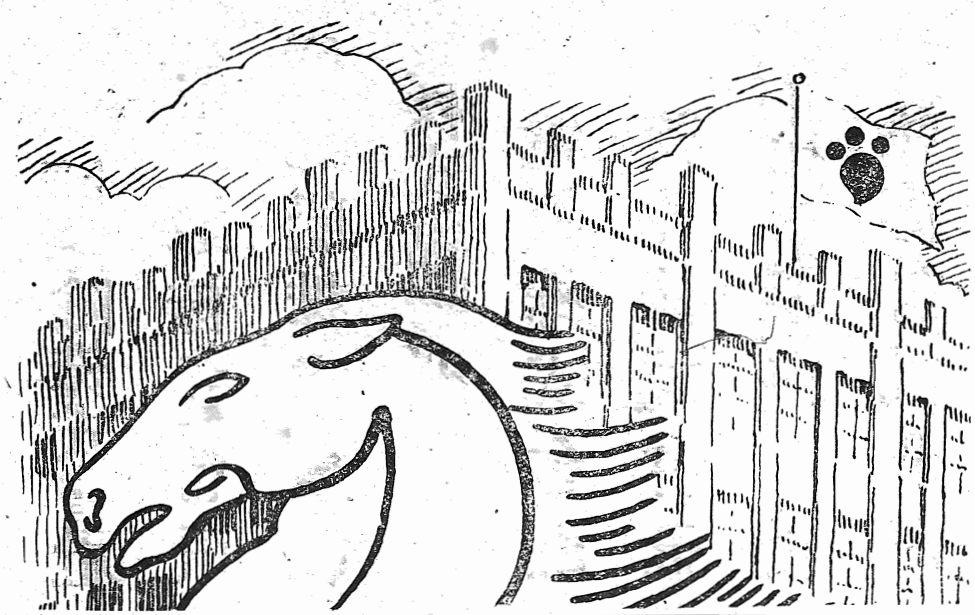
本年は更に内容の充實を計りサービスに大改善を加へ以て平素の御同情に酬ゆる心組で御座います何卒倍舊御引立の程偏に御願ひ申上げます

謹言

昭和五年元旦

京城

丁子屋



謹賀新年

東洋拓殖株式會社
朝鮮土地改良株式會社
朝鮮火災海上保險株式會社
朝鮮鐵道株式會社
朝鮮郵船株式會社
京城株式現物取引市場
京城電氣株式會社
不二興業株式會社
金剛山電氣鐵道株式會社
三井物產株式會社
朝鮮煙草元賣捌會社

謹賀新年

進辰馬

亀屋喫茶店
金剛山
店員一同

京城明治町一丁目
櫻井秀專

謹賀新年

切山篤太郎

萩原彦三

張間源四郎

徳野眞士

山十製紙出張所
伊東槇雄

渡邊晋

横井増治

鈴木竹麿

京城日報社
久松前平

全南咸平郡羅山
森長治

謹賀新年

河内山樂三

工藤武城

保々薫

平山政十

堤永市

鷹松龍種

岩淵精次郎

長郷衛二

嶋屋販賣部

鹽見峰治　咸北雄基港

謹賀新年

住井辰男	加藤常美	權藤四郎介	青柳綱太郎	森六治
野田新吾	松永工	淺川眞砂	早川看板堂	清谷惠眼

謹賀新年

松村松盛

有馬純吉

伊賀誠一

中富計太

大田黒宣三

池部義雄

佐藤作郎

京城府元町一丁目
蒔田秀雄

本間德雄

中村健太郎

謹賀新年

京城日報社

京城醫師會

京城府南大門通五ノ八
㊤ 野田運送店
店主 野田源五郎

謹賀新年

寺尾猛三郎

陣内茂吉

朝鮮京南鐵道
株式會社

謹賀新年

西崎鶴太郎

富田儀作

朝鮮商工株式會社
川添種一郎

謹賀新年

中村郁一

穂積眞六郎

本町青々團
倉田敏助

高武公美

京城內地人
辯護士會

川上十郎

京城府本町二丁目
津留崎一

大浦貫道

南山町二ノ三九
中原守雄

咸北羅南生駒町
植田勳

謹賀新年

田口耕平

澁谷禮治

篠田治策

山口重政

市山盛雄

蓬萊町一ノ一五七
朝明舍
電本一五四七

今本義胤

京城府本町五
難波留次郎

齊豐三郎

東京將棋春秋社
溝呂木光治

謹賀新年

松岡正男

鮫島宗也

笠神志都延

川村喜一

和田一郎

福田有造　木浦府

福島莊平　平壤府

中島司　中央朝鮮協會

石橋滿　朝明舍

今村雲嶺

謹賀新年

東京
渡邊彌幸

中川湊

櫻麥酒京城出張所
濱田正

松原純一

松田義雄

朝鮮土地經營株式會社

木村文三郎

野口耕一

小唄阪
岡村介石

京城南大門横
太平組
電本 二九六番

謹賀新年

牧山耕藏

井上清

益川熊一郎

竹井三郎

小杉謹八

山口均四郎

山根貞一

中央電話局
岡嶋行續

橋本豊太郎

齊藤久太郎

謹賀新年

谷多喜磨

馬野精一

新田留次郎

瀬戸潔

南大門通三丁目
富田徹三

足立丈次郎

廣江澤次郎

近藤安吉

朝鮮教育新聞社
片岡喜三郎

和泉町
岩間元次郎

謹賀新年

貴金屬時計

大澤商會

京城本町一丁目

鳥料理

喜久家

本町二丁目

京取市場所屬仲買人組合員

登錄番號順

(一)大林淺市　(二)成清竹松
(三)白井友之助　(二一)松山主計
(四)洪殷柱　(二六)新田耕市
(五)正崎長之助　(一八)田中道太郎
(六)金應龍　(二〇)立山榮吉
(七)株式會社鐘泰公司京城支店　(二二)金潤秀
(八)山口恒太郎　(二六)白樂三
(一〇)京城證券株式會社

謹賀新年

武者錬三

中屋茂樹

山本犀藏

戸田直溫

中村誠

久保薫一

吉田廉三郎

天日常次郎

新貝肇

金谷要作

謹賀新年

有賀光豐

森悟一

矢鍋永三郎

高久敏男

植野勳

近藤確郎

浦田多喜人

朝鮮土木
建築協會

鍾路一丁目
濱吉太郎

辻繁之助

謹賀新年

秋本豐之進

朝鮮京南鐵道
井上賢太郎

仁川府
桑野健治

仁川府
吉岡久

仁川府
岸巖

赤木萬二郎

キリン麥酒京城支店
八阪卯三郎

仁川府
濱井定

仁川朝日釀造會社
清水新七

旭町一丁目
仲居一同
川長

謹賀新年

松本誠

澤田豐丈

田中三郎

鈴木文次郎

京城府明治町二丁目
田中秀一郎
電本二八七〇

木村和水

井上要二

京城興信所
日下部景勝

南山町
花仙

京城本町二ノ七五
日章堂時計店

關孝和……殖產銀行　高久敏男氏（二）
子供の惡戲……總督府農務課　吉田雄次郎氏（三）

謹賀新年

金剛山電氣鐵道株式會社
安藤又三郎

京城府漢江通七
田川常次郎
電話龍山四六三番

京城
料理屋組合
事務所

一月號目次

關孝和……殖產銀行　高久敏男氏（一）
子供の惡戲……總督府農務課　吉田雄次郎氏（三）
民情視察……京城金融聯合會　山根謙氏（四）
將棋漫談……辯護士　宮崎毅氏（五）
蛤賣と私……不二興業會社　飯泉幹太氏（六）
白馬の節會……總督府農務課　鈴木竹麿氏（七）
飛行記……總督外事課　穗積眞六郎氏（八）
新婦除魔……城大法文學部　秋葉隆氏（九）
花と團子……城大醫學部　小杉虎一氏（一〇）
探碑紀念記……城大法文學部　小田省吾氏（一一）
斬首刀……鍾路警察署　森六治氏（一三）
漫筆「金解禁」……仁川府　桑野健治氏（一四）
多籠獨語……朝鮮銀行　古田廉三郎氏（一五）
甘い話……城大法文學部　泉哲氏（一六）
散歩風景……漢江通　大和與次郎氏（一七）
僧舞を見る……光化門官舍　西岡照枝氏（一八）
エビソーデ……旭町小林病院　平山義雄氏（一九）
父と母（短歌）……櫻井町一丁目　德野鶴子氏（二〇）
夢でなかつた話……京城醫專　佐藤剛藏氏（二一）
折にふれて……朝鮮商業銀行　朴榮喆氏（二二）
爐邊雜記……京城齒科醫專　西山幸男氏（二三）
馬……朝鮮新聞社　野崎眞三氏（二四）
火事幻想……群山法院　山口信正氏（二五）
喜美子……京城女子實業　辻董重氏（二六）
ジョンワナメーカ……朝鮮銀行　澁谷禮治氏（二七）
八ッ當り……三巴酒造合名　浦田多喜人氏（二八）
やまと歌……國風會　京城支部（二九）
川柳點……南山吟社　橫山巷頭子氏（三〇）
野口博士の印象……京城齒科醫專　森哲郎氏（三一）
海邊嚴（漢詩）……朝鮮銀行　木本房太郎氏（三二）
初釜（和歌）……安東病院　安東貞一郎氏（三七）
手澤本の趣味……城大豫科　名越那珂次郎氏（三八）
初春（俳句）……植村病院　植村孝子氏（三九）
小鳥の嫁さん……敎育新聞社　片岡喜三郎氏（四〇）
或る日の新聞から……京城日報社　笠神志都延氏（四一）
緊縮は家庭から……平山牧場　平山政榮子氏（四二）
ヘボ將棋の感……總督府內務局　長鄕衞二氏（四三）
寒雲（短歌）……北米倉町　角田廣司氏（四四）
旅から旅……木浦新聞社　福田有造氏（四五）
別天地小景……西大門刑務所　橫山藤三郎氏（四七）
秋風賦（和歌）……淑明女學校　淺井佐一郎氏（四八）
近詠（俳句）……朝鮮鐵道　新田留次郎氏（四九）
火を焚く趣味……京城新聞社　柄澤四郎氏（五一）
可消幻業長道心……南大門小學校　山本吉久氏（五二）
年の暮……城大醫學部　梶村正義氏（五三）
品川雜記……中央朝鮮協會　中島司氏（五四）
高架索の囚人……朝鮮史編修會　瀨野馬熊氏（五五）
溫泉の話……城大醫學部　棉引朝光氏（五六）
新羅榮華史觀……大和町　廣江澤次郎氏（五七）
明盲亂談……三菱戴寧鐵山　高橋昇氏（六〇）

關孝和

高久敏男（殖産銀行）

昭和四年十一月十一日に僕の鄉土なる群馬縣の藤岡町城山といふ所に一基の記念碑が建立された。それは德川幕府時代に同地から出た一學者關孝和を記念するためである。我鄉土より此學者を出した事は啻に我々同鄉人の誇であるのみならず、世界に對する日本國の大なる誇の一つであると云はれて居る。然るに我鄉土が生んだ歷史的人物に新田義貞、高山彦九郎、壇原太助、國定忠治、近くは新島襄などのあることは世間周知のことであるが、關孝和に就ては之を知る者極めて少いやうである。

然らば關孝和とは如何なる經歷の人物であるか。先生は寛永十九年三月上州藤岡に生れ幼名を新助といひ、孝齊又自由亭と號した。幼にして高原吉種の門人となり算數に巧なるを以て四代將軍に仕へ勘定吟味役を以て三百石を食み後に納戸組頭に進み、寶永五年十二月廿四日六十七歲を以て江戸に沒した。之が其經歷だけ見ては何等誇るに足るものはない。關孝和を以て鄉土の誇、日本國の誇といふ次第は先生が研究發表した數學に基くのである。先生は忙しき職務の傍ら專ら數理の研究に精進して前人未發の術理を發見するもの多く時人之を算聖と稱した。當時最高の數學と考へられて居た支那傳來の天元術を以て容易に解し難い難問題の解法を苦心考案して遂に『發微算法』といふ算書を著し『演段術』及『點竄術』なる算法を發表した

所謂『演段術』及『點竄術』は今日の言葉を以ていへば、筆算式の『代數學』であつて其構成には全然支那若くは西洋の思想を取り入れたる跡なく全く先生獨自の創見に成つて居るといふ事である。加之此先生獨創の日本式代數學は更に一歩を進めて今日の高等數學なる『微分學』『積分學』にまで及んで居るといふ。

世界に於ける此高等なる微積分の數理の發見者は英國に『ニュートン』あり、獨逸に『ライプニッツ』あり、而して、我關孝和亦堂々として世界數學史上に其發見者の一人として特筆大書の榮譽を擔ふ譯である。啻にそれのみではない、此の發見は『ニュートン』に於ては西歷千六百六十五年、『ライプニッツ』に於ては同千六百七十五年であるが、關孝和の發見は正確なる記錄はないが種々の材料より推察して此の二人よりも尙以前であると信ぜられて居るのである。

先生の記念碑は旣に寶永六年時の數學家本田利明に依つて其墓所今の東京牛込區辨天町の淨輪寺に建てられてあるが、今回更に出生地藤岡に建碑を見たことは誠に意義あることである。碑は高さ十五尺巾六尺の仙臺石で德川上院議長の篆額、藤澤理學博士の撰文、坂正臣氏の書であるといふ。

（四、一二、一一）

京城雜筆

【二】

◈明治町閑話

北漢山人

○中島（貞信）病院長は、壯年時代劍道に熱中し、免許皆傳の腕前を持つてゐる。

○今でも、『俺ンとこへ、强盜が二三人來ぬかナー』と述懷し、『つまらぬ事をおつしやいます』と、奥樣から讀責を喰つてゐる。

○壯歲以來は、歌道と書道とに趣味を覺え。現に双絶といふ世評もある。

○就中、歌道は、最も御熱心。現に國風會京城支部を、元締してゐる。

○先生が、歌意、措辭に嚴重なることは、實に驚くべきもので、會員がまづい歌でも出さうものなら、電話で『急々用件が御座る。どうぞ即刻御入來を』、何事ならん驅けつけると、先生經机の向ふへ泰然『さて〳〵、××さん、困つた事で御座るのう』、何かと思ふと、この間提出した歌だ。『これア何とか咏みやうはありませんか』、『へー』、『まアとつくり考へて貰ひませう』、雲嶺今村氏の如きは、この手で、夕刻から午前四時まで彈壓せられて、腦貧血を起して、『ウーン……』

○中島先生、それに手當てしつゝ、『ウム、感心ぢや。道のために、斯くなるとは、足下も定めし滿悅ぢやらう』、院長少しも騷がぬのであります。

子供の惡戯

むときに入れるサックだ、そんな大きいサックで藥が飲めるか』と一喝した所、奥から番頭さんが飛

と考へられて居た支那傳來の天元術を以て容易に解し難い難問題の義あることである。碑は高さ十五尺巾六尺の仙臺石で德川上院議長滿悅ぢやらう』、院長少しも騷がぬのであります。

子供の惡戲

吉田雄次郎
（總督府殖產局）

漸く緩和されたのと一對の話。

茶目の笞刑

私の知人の警察官に惡戲盛りの子供が四人も居つて、夫れが毎日の樣に樣々の悲喜劇が次から次ぎと繰り返されて居るそうだ。が其の內でも時々小茶目君が裏庭で悲鳴を擧げるので奧樣が何事ならんと斷付けて見ると大茶目君が小茶目君の兩手を後手に縛り上げお尻をまくり物差で『コノ、エヌマ、エヌマ』と尻を叩いての制裁。譯を聞けば警察署構內に舍宅があるので時たま子供等が署內をのぞくものだから、小茶目君が惡戲をしたり、小茶目君が大茶目君の命令に服從しなかつたりすれば大茶目君は小茶目君達の兩手を後手に縛り上げお尻を叩いて制裁してもよいものと信じて居る。親爺さん顏をしがめて、『とんだ眞似をしやがつて』で大笑ひ。

膠囊とサック

本町二丁目の某藥種店へ膠囊を買ひに這入つた。小僧さん何を差上げますかと云ふから、膠囊を下さいと云ふけれども膠囊が判らない。膠のサックだよと云ふと、今度は笑ひながら判りました、判りましたと早速持出したのは、これは不思議！大きい柔かいサックの各種類。僕も他の客の手前一寸つまされた形で『馬鹿、苦い藥を飲むときに入れるサックだ、そんな大きいサックで藥が飲めるか』と一喝した所、奧から番頭さんが飛んで出て來て、『そんな品物はよく御聽きした上でなければ出してはならぬと常々云つてるではないか、馬鹿』と小僧に一喝して僕に向ひ、『誠にそそう致して申譯がありません』との言譯。可愛想に小僧さんは氣轉がきゝ過ぎて馬鹿呼はりにされ泣き出し想な顏付。さては店員もお客達も一度にふき出して大笑ひ。

畵ですの虎

子供の惡戲とか頓智と云ふものは自然の發露で中々面白い事がある。過日も知人の子供が遊びに來て騷いで居たがふと床に掛けてあつた岸駒の虎の軸に氣が付いたら俄かに恐れ座敷から溫突に逃げ込んでどうしても出て來ない。そこで家內があれは虎の畵です、畵ですよと繰り返して再三說明すると飜然として現はれ、『ハーアン、畵ですの虎ですか』『畵ですの虎ですか』で大笑ひ。今度は書棚の上にある針鼠の剝製を見付け『アラーお母ちやん、豚が背中に髮を立てゝ居るわ』で又一同大笑ひ。

拵へた鶴

總督府用度の竹內氏がまだ地方に居られた頃であつた。久子孃を伴れて遊びに來られた時、令孃が床にある鶴の剝製を遠方から、ちいと見詰めてどうしても坐らない果ては自分の方につゝきに來るものとでも思つたのか、俄かに足踏みをはじめ『シーシーシー』『シーシーシー』と兩眼には露の樣な涙を溜め、段々聲にも足にも力が這入つて、特に鶴との睨くらべが破裂せんとする悽ましい光景が現出され、流石のお父さんも『オイオイ、オイ、之は拵へた鶴だよ、死んだ鶴だよ、動かぬ鶴だよ』、で久子さん稍納得が出來、場面が

◈圍碁風聞記

北漢山人

○善隣商業の田代校長、碁が好きで、チョイ〳〵樂しむ。

○だが、元町小學校の片岡校長には、まア四目といふところ。但し二目以上は、斷然おかぬ。

○『どうです、今夜こそ、四番手直り、賛成しますか』と、片岡氏いふと、『ウヽ大賛成！、大に張合が御座るノウ』、いふことは勇壯！。但し立てつゞけに、三番負けると『これはシタリ片岡氏』『どうしました』、『スツカリ忘却いたし居つたワイ』、『ヘー』『ヘーどころか、今夜はウチの隣りが婚禮ぢや。これアいかん』、途中で、さつさと御退陣。

○なか〳〵手直りにならぬ。

○その次ぎに、また兩氏出會。片岡氏問うて曰く、『今夜も、御婚禮がありますか』、『何のことだネ』、『どうも切迫すると、婚禮や、還暦が飛び出すので』『ウフッ、片岡氏、御冗談は、拙者大に迷惑いたす』

京城雜筆

民情視察

山根謙
（京畿金融組合聯合會）

私は日曜、休日には必ず狩獵に出かけるのである。從てそれ等の日には在宅しないことを、多くの友人は了解して居る程である。何もそんな殺風景なことに、熱を擧げんでもよいではないか、とも考へられないでもないが、而し終始、机に齧り付いて居るよりは、時々汗を流した方が、どうも心身爽快を覺ゆる樣であり、今一つの理由は、親しく民情を視察すると云へば馬鹿に大きく聞ゆるが、庶民金融を掌る私としては、百姓と接觸する機會を可成度々造りたいと云ふ、惱らしい念願からでもある。

斯く申すと、ハハー、山根は滅多に獲物は無いと見ゆるなど、鋭敏な讀者は斷定されるかも知れぬが、そこはその、必ずしもそうではない。日暮の汽車を京城驛にと急ぐ内にも、三等室に獲物の數々を見入つて、連りに優越感を催すことが、實は時々と云ひ度いが、可也多い譯ではある。

一

其の日の汽車は、大變込み合つて居た。私の前には四十歳恰好の田舍出の婦人と、二十歳位の學生が席を取つて居たが、汽車が京城驛を發車する頃合から、其の婦人は、芥に汚れた林檎を取り出して皮ごみ齧り初めた。私はナイフをと、ポケットに、一度は手を掛けたが、いや待て、胃袋の丈夫な者には少々芥が付いて居てもよかろう、皮と實との間には、養分が多いとかで、近頃皮附の果物を推奬する人もあるから、と合點して、貸すことを見合せたが、御隣の學生は見兼ねた風情で、ナイフを出して、無言の内にその婦人に渡したので、私も多少安心した樣に見て居ると、何ぞ知らん、剝かれた林檎の皮は、次から次へと、婦人の口に運ばれてしまつた。學生は還されたナイフを瓜繰りながら、顏面筋肉を異樣に振動させて居た。

二

田舍の百姓はよく人に物價を聞く樣である。何か品物を買つて歸る人に出會ふと、それが知人であらうがあるまいが、構ふことはない。必らず『いくらで買ひましたか』と尋ねて居る樣に、私の覺束ない朝鮮語で映ずるのである。私は其の都度、中々味ひのある習慣ではある。歩き乍ら物價を知ることは、確に便利であると、何時もながら感心して居た次第である。

そこで此の習慣をば自らに應用して出獵の際、部落々々に就いて此邊には雉は居りませんかを、連發するのである。が答は何時も同じ意味である。曰く『わからん』『知らん』『飛び廻るのに居所が解るものか』と云ふ三つの範圍を出でない。そこで、一生一代の智慧を絞り出して、わからんの出所を考察したが、遂にわからん。エまゝよと、ある部落に腰を下ろして、衣嚢のキャラメルを出して咽喉の渴を霑ほして居ると、部落民が、三々五々集り來て、私を包圍した。私はキャラメルでも珍らしいのであろうからと思ふまゝに二個宛を分配したところ、忽ちにして部落民と百年の知己になつてしまつた。今年の收獲は……反當價格は……副業は……と云ふ風に素より眼指す民情の視察は、充分出來たのは云ふまでもないが、甲曰く昨日あの山に雉の雄が二羽居りました。乙曰く今朝赤く見ゆる程此谷間に雉が澤山居りました。丙曰く先程此の麓に雌が三羽遊んで居りました。曰く何々と云ふ報告が殺到した。

よし來たと計り、私も大も氣勢大いに擧り、射つわ、走るわ、獲物忽ち山積!!。

全く何でも霑がないといけませんなー。（十二月五日記）

【四】

◈本ブラ小景

三木一彦

○本町筋などのカフエの前を通ると、女給といふものが、若い男と一ッ椅子に腰掛けて（男の膝の上に、大きいお尻をのッけて）聲をそろえて、流行の猥歌をやつてゐる。

○田舍で、農事經營をしてゐる權ネモン君、慨然として、『世もハア、末と見受けました』

○さういへば、澤山ある樂器店いくら音響に制限なしといつても近頃のメサバリやう。無茶な流行歌の放送には、全く呆れ返る。

○京城の街も、散々ですな。

將棋漫談

◈おもひ出草

皮ごみ齧り初めた。私はナイフを、ポケットに、一度は手を掛けたが、いや待て、胃袋の丈夫な者には少々芥が付いて居てもよかろ

將棋漫談

宮崎　毅（辯護士）

裁判官の陣容攻防は愼重審議其ものゝ如くである、一手々々熟慮して苟くもせぬと云ふ風がある、辯護士の棋風は攻擊萬能である、高橋御大以下殆んどそうである、故に裁判官と對局すると押し付けられる感じがする、辯護士と對局すると喧嘩をしてゐる氣分である此のあんばいだと賢者と對局すると診斷を受ける樣な氣分になり、鐵道局員には乘せられる樣な氣分になり、政治家と對局すると鼻息で吹きとばされる氣分になるのだらう。

○或るとき辯護士控室で寺田君が『さあ鰻丼だ』と挑戰して來た勿論直ちに應戰した、丁度晝休み時なので周圍には佐久間、大宰、置鮎、吉武なんど云ふ猛者連が控へて居る。

僕は普通だと寺田君には八分の勝目があるのだが此の時は偶然不得手な駒組をしたため形勢險惡となつた、こうなると野次馬連の喧ましいこと何しろ口から先へ生れた連中の上に此の連中は何れも僕より若干弱いものだから僕を目の敵にしてゐる、僕の形勢非なりと見るや喜ぶまいことか總掛りで寺田に應援する。癪にさわつて冒汗を流してやつたがとう〳〵寂滅。

その後で二面僕が勝つたが其の時見物は皆んな散亂してしまつて勝つて張合のないこと。

京城雜筆

○本誌十二月號主筆の『ひとり言』にある選擧を讀んで僕もくすぐつたいことがある。水曜會で時々辻師範に指南を受けるが僕は何時も二枚落で『眞劍勝負ですよ』と斷つてかゝる。

三四ヶ月前迄は僕がいくら頑張つても迚も勝目がなかつた。十面で一面も勝てない位であつたのが十一月末の水曜會では三面で二面勝つた。それがほんとうだか何うだか分からない。

其中の一手に辻師範が僕へ桂馬で飛車取り金取りの兩手を掛けたのに僕が飛車を逃げて王手をしたそれを師範は見落しだと云はれたが少々怪しい。

僕には別に選擧の關係はなかつたが或るとき僕が『交詢社には上らず會と云ふのがあつて二十年間少しも上らない勝田氏が會長、これも十餘年間少しも上らない大橋氏が副會長と云ふことだが水曜會で上らず會を作つたならさしづめ僕が會長だらう』と述懷したことがあつたから師範もそゞろ惻隱の情を催して事茲に及んだのかとも思はれるが又一方には自慾心が擡頭してやつぱり上つたんかなとも思ふ。

○私は職業的性格（用語の當否は知らず）が將棋盤の上に如實に現はれるには實に感心した、それは裁判官と辯護士とである。

◇おもひ出草

漢江漁郎

○今村輌氏の本町署長時代、料理屋の臨檢をやつた話。

○花月、掬翠などいふ大きいところへ、深夜消燈の直ッ最中、署員どッと侵入する。何分地理不案内のこととて、ハシゴ段で、向ふ脛を叩かれて、ウ、ンといつて、其所にヘタ張つてしまふものもある。太柱で、おデコをやられて、ウーンといつて、尻餅をつくもある。

○氣轉の利いた仲居は、そんな時、『あら〳〵旦那！、御案内しますワ』、先きに立つて、御客のゐないところばかり、アッチに引ッ張り、コッチに引ッ張り。『コラッ、居らんぢやないか』といふと、『へー旦那！、おッつけ夜も明けます。大分歩きましたネー』『馬ッ、馬鹿ッ』

○襲擊軍をヘコましたのは、白水の婆サンだ。『電報々々』と戸を叩くと、『ハイ〳〵、靜にしておくれ、うちには、ッンボは居らんよつてな。どれ……やつとこシヨ』、玄關を開けるかと思ふと、左にあらず。横の方の小窓を、少し開き。『ヤレ〳〵この眞夜中に御苦勞ハンどす。電報なら、此處から頂きまつさ』、皺だらけの手を鼻の先に、ニウー。『ついでに其處で、讀んで、おくれやす』

○藝妓臨檢と知つて、忽ち二階廊下の、突き當りの、押入に隱れる。されど、一瞬にして、『コラッ』……哀れや遁げる道中、證據の紅葉を、點々と、疊に、廊下に……『あら〳〵、ワタイ……』

【五】

京城雜筆

蛤賣と私

飯泉幹太
（不二興業會社）

【六】

中島さん

『飯泉さんを聽く』大變面白く一家打ち興じて拜讀致しました。

其の蛤賣りは品川の『ムキミ』屋三チャンと云ッて實は私の再從兄です。出し拔けにコンナ事云つたつて或は信じないかも知れませんから其の大要を再記致します。

昨年か一昨年頃、本誌か鮮銀の『行友』誌上に私が物した『養子雜話』の主人公半平獨眠龍の遺れ片身が其の三チャンです。丁度明治維新前後彼が外國貿易を密營して巨萬の富を獲、横濱村を買占めたり、上野から淺草觀音に到る彼の廣大の地面を買占めたりした當時、彼はよく品川の宿場で旅情を慰めました。其内奇麗な自然の子が出來ました。其の後半平家に引取り東京で勉強さす事になりましたが、豪傑の血を享けた當時十五歳の三チャンはウンと云ひません『何も好んで富豪のドラ息子になつたり、學問などして金箔をつける必要はない。イザと云ふ時コンナ飾り物は物の役に立つものでない。釋伽だつて、クリストだつて皆父なし子ヂヤないか。自然の子で結構だ。形式に捕はれた窮屈な生活よりか、イツソ裸一貫で氣儘に世の中を渡つて行きたい』と豪語してトウ〳〵品川で『ムキミ』屋を初めました。此の可愛らしい三チャンの恰好、思切つた腕曰、別けて其の聲が實によく私に似てると云つて私は大叔父半平怪傑に可愛がられたものでした。

其の後三チャンは具さに世の辛酸を嘗めながらも書生を養ふ事に興味を持ち、今日まで相當の人物を社界各方面に送り出して居りますが、小成に安んせず、今猶『ムキミ』の行商を續けてるのです。

コンナ面白い關係の親戚ですから、私同樣可愛がつて、蛤なり、シャコなり澤山御買上げを願ひます。

私は常陸極田宮の百姓生れで親類と云つては大概コンナ變つた貧乏人ばかりで、人に誇る大政治家大官、富豪など云ふ立派な方はありません。只仕合せの事には、背任、横領、收賄、瀆職、買勳などと云ふ事を屁とも思はぬ輩のない事を私かに喜んでゐます。

中島さんの彼の名文が出てから私の聲と云ふものは兎に角大變な評判になりました。丁度本月二日我が佐藤九二男畫伯夫人靜子さん（有名なピヤニスト一名クッタカ女史）が娘を訪ねて來て、『一體飯泉の聲ッてどんなの？、音樂的なの？』と尋ねられました。娘は何のコダハリもなく、『銀鈴を轉ろがす美聲とまでは參りませんが澁味のある、巾廣い、莊重の音調で惡い聲ではありません』と答へたので、夫人は大變安心して歸られました。

右の樣な譯けで私の家族は彼の名文を見て非常に喜び、名譽とし光榮として中島さんに甚大の謝意を表してゐる次第です。處が四日の朝中島さんから『飯泉さんの尊嚴を冒瀆し云々』との御詫狀を頂戴して一同却て恐縮致しました。ドウか此の隱れた眞の人間三チャンを可愛がッていたゞきたいと存じます。

此機會に皆さんに紹介申上げますが何か御祝の餘興でもあります際は御遠慮なく私を御招き願ひたいと存じます。差支なき限り參上して、近頃流行る民謡なり、戀の行進曲なり、又は三チャンの聲色なり御好みに應じて精々勉強出演致します。（四、一二、五稿）

◈お河童物語

三木一彦

○藤田嗣治畫伯は、朝鮮ホテルに泊まつた。

○二三日して、その部屋は、他に豫約があるので、どうぞ別の部屋へ變つてくれ、何んなら貴賓室を提供してもいゝと、ホテル側で叩頭百拜するが、藝術家は、アノお河童を、横に振つて『アー、いけない〳〵』

○何んと頭を下げても、『叱ッ下り居らうぞ』

○とう〳〵大村鐵道局長まで、仲に這入つて、『まア〳〵』となだめるやうな騷ぎ。

○お父うさんの嗣章氏、滿面困惑、左右を顧みて、『イヤ、伴にの奴にも困つたもんぢや。何んしろ巴里といふとこには、禪寺がないでのう』

白馬の節會

鈴木竹麿
（總督府殖産局）

白馬節會は訓讀して、『アヲウマノセチエ』と云ふ。正月七日に行ふ儀なるを以て又七日節會とも云ふ。古より朝廷に行はれた年中行事の一つである。『公事根源』に、白馬の節會を或は青馬の節會とも申也、其故は馬は陽の獸也、青は春の色也、是に因て正月七日に青馬を見れば年中の邪氣を除くと云ふ本文侍る也云々。『禮記』に、春を東郊にむかへて青馬七匹を用ゆるとあり。七は少陽の數、正月は少陽の月也。又『十節記』に、白馬を馬の性の本とす。天に白龍あり、地に白馬あり、又天の用は龍なり、地の用は馬なり、人の用は龜なり云々とあり。『世諺問答』にも白馬を青馬と申侍るは馬は陽の獸也、青は節の色也、きはめて白きものは青ざめてみゆるものなり。されば青馬とも白馬ともかよひて申すにや、正月七日に青馬を見れば年中の邪氣を拂ふと云ふ本文侍るなり。又『比古婆衣』には『色葉字類抄』に『本朝事始』を引いて、光格天皇寶龜六年正月七日天皇御楊梅院安殿、設宴於五位已上而內聽宴進青御馬、兵部省進五位已上裝馬とあり。『河海抄』にも此文を引いて、是青馬始也と註せり。

試みに之が沿革を史實に徵するに、白馬の節會が御代々々に行はれた事は、『續日本紀』『日本後記』等には載せられずして、『弘仁內裏式』弘仁十二年正月卅日撰上正月七日の會式に、引青馬式を載せられて居る。『水鏡』に弘仁二年正月七日始めて青馬をみそなはし給ひきと見え。『紀運錄』饒峨天皇の御譜に、弘仁二始覽青馬と見えたるを思へば、中間廢られたりつるを、此時再興し給へるをかくは記せるなり云々とあり。

佐藤仁之助氏は其の『白馬節會沿革考』に左の如く述べて居る。

饒峨天皇の弘仁二年始めて儀式を整へて青馬を覽させ給へり。其儀は『水鏡』弘仁二年の條に云く、正月七日『ハジメテ』青馬を御覽しきと見えたり。按するに、此に『ハジメテ』と云へるは熟考すべき所なり。其所以は、舊式に異なる儀式を備へて天覽させ給ひしからに『ハジメテ』とは云ふなるべし。抑上古より毎歲行はるゝ恒例の式は、之を竹帛に垂れて制式とせるものはなかりしを、當天皇の弘仁二年に至り、內裏に於て行はるゝ式は、舊章を採綴し新式を抄撫して之を書册とし、永世の模範とさせ給へり、之を內裏式と云ふ云々と。

以上の文獻を見る時は白馬の節會に關する概念は得られやふと思ふ。本年は『ウマ』の年と云ふので、正月初め馬の古い儀式に就て書いて、これを御目出度ふに代へる。

◈うわさ雜記

北漢山人

○辯護士の宮崎毅さん、某美人から、『コレあたしの寫眞よ。上げますワ』といはれて、その寫眞を頂戴に及び、內々自宅の簞司の底に、しまつて置きました。

○氏には淑子ちやん（十三歲）と昇君（十一歲）との、二人の可愛いゝのがある。

○ところで、最近例の寫眞を取出し、獨り保養をやつた後、フイと氣がつくと、裏面に何か書いてある。ハテナと讀んで見ると『見たぞ〳〵　昇』『隱したつてチヤンと知つてるワ　淑子』

○この時、宮崎さんが、ドンナ顏をしましたらうか。何分歲末多忙……皆樣の御賢察を祈ります。

× ×

○本町四丁目の難波酒造場に、極最近雇はれた一人の店員があります。

○頭も良いし、働きに如才がない。唯だ一つの申分は、どうも使ひ走りの、その速力のノロイことだ。

○主人『君ア別に、脚氣のやうでもないが、どうして足が遲いのだ』、『へー、相濟みません。これが歩く方でなしに、飛ぶ方ならナー』、主人聞き咎めて、『オイ〳〵飛ぶとは、ドウいふ譯だ』、段々問ひ詰めて、この新入店員が實は、問題の淸水三等飛行士の身の果と判つた。

○『ハハーン、まア辛抱しなさい。ウチでも、いづれ飛行機で、ヨーロッパに酒を卸すでノウ』

飛行記

穂積眞六郎
（總督府外事課）

『飛行機つて餘りよい氣持のものでないぢやありませんか』

友人からこんな意味の輕い非難の目を向けられたのは汝矣島で試乘を終えた時でした。實は私がパリロンドン間、ロンドンベルリン間の飛行のことをしきりに吹いたものですから、友人もつい乘せられて一緒に汝矣島迄出かけたのです。けれども下に居てさえ鉢の底樣な京城のことです。其の上空を出來る限り時間を緊縮して、最小限度の圓を畫いて廻るのですから考えた丈でも眼が廻り層です。うつかりすると北岳と南山とが走馬燈の樣に横長の線になつて走りくらを始めるのですから。

然し北歐洲の平地と海を目の下に見て飛ぶのは眞に愉快でした。きつと日本でも北の海を横切つて大連に飛ぶときはこんな壯快な氣持がするだらうと想ひます。……何しろ英國海峽を横切つて遙かにオステンドやあの歐洲大戰の時英艦ビンデクチブが潛行艇などを引連れて旅順口を想出す樣な痛快な强襲的封鎖をやつたジーブルジーなどを右に眺めて丁度オランダの海と陸との境。有名な海の侵入を完全にさゝえる堤防の眞上を北に向つて一時間以上も飛ぶのですから想はずも昔中學時代英語の時間に吃り〳〵讀んだ『ホーランド』のことが頭に浮びます。『到る處水はあれども飲むべき水とては一滴もなし』と云ふ文句や、ドンキホーテが喧嘩でも挑み層な風車や、『オレンヂ侯ウイルレムは終に大事な堤防を切つて圍む敵の大軍を退けようと決心した』と云ふ目の下の堤防や、千尺の上から見ても明に海より低く見える陸地など、ハーグ邊から進路を右に採つてアムステルダムに降る迄、只々物珍らしく下界を眺めて居りました。

ハンノーバーで二時間ばかり風待ちを餘儀なくされて居る間に、私は又ある獨乙の大學の先生に日本語を教えるべく餘儀なくされてしまいました。實は風待ちの退屈さに日獨交換教授と云ふ約束だつたのですが、獨乙流の熱心さと押の强さとに押されて何時の間にか先方が堂々と生徒になりすましてしまつたのです。然し一言一言を手帖に書留める獨乙流の熱心さ。誠に敬服の外ありません。

灯ともし頃漸くハンノーバーを出發。プロペラーはもう音を立てゝ廻り初めました。すると一番前に乘つて居た僕の生徒はクルリと一番後ろの私の方を振向いて出來る丈の大聲で『これからベルリン迄御一緒に飛びましよう』と日本語でタツタ今の授業の應用をやるのです。これがほんとの學校での出來事ならば『ほんとに貴君は御りこうです』と讃めてやる處なのですが、何しろ飛行機の内でしかも乘客の全員が何事かと想つて私の方を見るのですから、先生勘なからず『てれ』てしまいました。

夜のベルリンの奇麗でしたこと書見ると味もなく只整頓して居るこの町も數百萬の電燈を上空から見ると星の世界にでも別け入つた樣な子供らしい神秘を感じます。

テンペラホーブの赤電球に緣取られた大飛行場に光彈を降下させて着陸したとき、例の紳士私の手を握つて『とう〳〵ベルリンに着きました』

勅題 海邊巖

擔雪 工藤武城

巖聳春輝裡。高擊旭日紅。苔衣沾海霧。
松籟和天風。勢壓魚龍氣。威爭豹虎雄。
儼然如國柱。千古逼蒼空。

ゆるきなきわがすめ國に似たるかな
あらふるなみにそゝりたつ巖

新婦除魔

もいつた樣な喜びがある。尤も通譯付で隔靴搔痒の感はあるが。
然らば人々は何故に新婦を惡靈

のことが頭に浮びます。『到る處水はあれども飲むべき水とては一

あらふなみにそゝりたつ

新婦除魔

秋葉隆
（城大法文學部）

お正月は樂しい時、婚禮は嬉しいものと、通常考へられて居るが其は單に樂しいとか、嬉しいとかいふだけでは、云ひ現はせない氣持を伴つて居る。

この間私の家の近くで婚禮があつた。丁度于歸即ち日本の嫁入りで、新婦の轎が入口におろされると、一人の老婆が鍋に粟粒を入れたのを持つて來て、轎の上を三遍ばかり廻した。それから轎の扉をあけて、先づ鏡臺を出すと、姑が之を受取る。次に之も轎の中に入れてあつた紙包を出し、黍餅を取つて四方に撒き、轎に紅布を蔽うと、新婦は轎を出でつゝ此の紅布に蔽はれて、庭に入り、急ぎ室に上つた。

椽端には靈床といふものが供へてある。之は當日の御馳走を色々整へたもので、新婦を追うて來た惡靈に與へるもので、惡靈どもが御馳走に飛びついてる間に、新婦は室にはいつてしまはねばならぬから、『急ぎ室に上つた』のである。

粟粒を鍋に入れて新婦の轎上を廻らすのも、黍餅を四方に撒くのも、惡靈の好むものを與へて之を退散させる意味であるといふから鏡を先づ出すのも鏡の威力を以て惡魔を祓ふ行事であつたのであらう。今では之が鏡の樣に澄んだ心持で、姑が嫁を愛する樣にと意味が變つて來ては居るが。

尤も此の粟粒、黍餅による呪術は、郎婦の四柱のうまく合はぬのに、無理に結婚する場合とか、郎家に夭死者などがあつたのに結婚するといふ樣な場合の行事だといふことであるが、通常の嫁入りでも、新婦は轎中にトカニ（銀わかしの坩堝）と刻煙草少々を握つて行く。之も除魔辟邪の意味だといふことである。アメリカンインヂアンにはTobacco Societyといふ秘密結社があつて、濛々と煙草を煙らして、惡靈をはらふ祭りがある。新婦が紅布に蔽はれるのも勿論惡靈を避ける爲である。

この一寸とした婚禮の一小部分を觀察したゞけでも、如何に新婦といふものが惡魔に襲はれ勝ちなもの、換言すれば極めて危險な狀態に置かれてあるものかといふことが考へられる。朝鮮の婚禮を此方面から眺めると、可なり豐富な行事の連續であることを見出す。中には其の原本の意味が忘れられて後來の解釋の生じたのもあり、又全然意味を失つて、只人々が斯うやつて來たからやるといふ樣な行事もあるが、今でも尚大昔のまゝの生々しい信仰を伴つた行爲も少からず存するので、西洋の學者が一生懸命に探し求めて、複雜な考察の道筋を通つてのみ考へ及ぶといつた樣な問題を、眼の當り直接に見せつけられ、顎屋根ずまゐの老婆から千古の眞理を聞くともいつた樣な喜びがある。尤も通譯付で隔靴搔痒の感はあるが。

然らば人々は何故に新婦を惡靈に襲はれ易きものと考へたかといふことは、極めて興味の多い問題であるが、少々面倒で一寸雜筆の原稿にはなりかねる。只斯くの如く危險に曝された新婦、及び之に對してインテレストを持つ人々の氣持が、單なる嬉しさだけではあり得ないことは分る。實はお正月の目出たさ、婚禮の目出たさの中に、嚴肅味を持つ根基が茲にあるのだと思ふ。

◈名人への志

漢江漁郎

○龍山で、『常の壽』といふ銘酒を釀造してゐる人に、大畠常次郎氏といふがある。

○この人の次男の秀雄君といふのは、小さい時から、碁が大好きだ。もち論『好きこそ物の上手』で、なか〳〵いゝとこを打つ。

○お父さん、『この子は、結局碁打にする外はあるまい』といつてると、先達フイと何處かへ行つてしまつた。いつまで經つても歸らぬ。

○『妙だな、どうしたらう』と本人の机の中などを調べて見ると『内地に赴き、修業いたし、圍碁名人とならねば、生きて再び御面會致さず……』云々といふ一通の置手紙。『ウーン、左樣か〳〵。サテは、伴出來しおつたワイ。ムーン』、お父さん遁げられて、非常に感心してるとの噂。

花と團子と

小杉虎一
（城大醫學部）

時針はもう正午近くを指して居る。實驗に一區劃がつくと急に輕い氣持になる。漫然傍に在る近着雜誌をとりあげて頁を操つて見る。ふと眼に映じた毛色の變つた發表がある。該?方面には全く門外漢だがそれでも一寸面白いと思つた。或は門外漢なればこそさう感じたのかも知れぬし、僕だけが面白いと思ふだけで他の人には一向に興味のない事かも解らぬ。

昆蟲の『ショック』

『ミネソタ』の大學で昆蟲學教室のロビンソンといふ學者、昆蟲の體溫を計る目的で熱電氣裝置の微細な針をその體內に刺し込んでみた。處が此手術に由つて昆蟲體內組織の液壓が忽ち低下する事を認めたが、尙その樣子が人間や溫血動物に經驗される『ショック』時の急激な血壓下降と似寄つた現象を惟はせると。

家鷄の流產

『エヂンバラ』大學動物哺育研究部のハットと呼ぶ人の研究である。

孵化に際して雛の生えて來ない一萬二千以上の鷄卵に就いて根氣よく檢べて見たところが、屢々卵兒の體位不正を見出したと曰ふ。最も多いのは體軸が極度に回轉して頭部が卵の尖端側に向つて居るもので、其他には右に回つて頭が兩脚の間に挾つて居るものとか、頭位は鈍端に在るが體の回轉が正常と逆即ち右に行はれたもの等が在るさうである。そして流產の原因としては多分食道や氣道が捩れて營養の採取とか呼吸作用とかゞ妨げらるゝ爲だらうと云ふ話。

こゝ迄讀んだ時『サイレン』が――街の郊外に近い此處では――微かに然し正に唾液線と胃の消化線とをギュッと締めつける効果を以て響いて來た。

面白いと勝手に銘を打つた僕自身が急に雜誌よりも食堂の方へ興味を奪はれて了つた。

將棋會

師範……辻六段
時日……毎週水曜
會場……美術倶樂部
會費……一個月二圓
御入會を歡迎す

水曜會

◇兩勇決戰記

三木一彦

○城大醫學部の篠崎先生は、豫ねて辻六段に就て、將棋の稽古をしてゐる。

○同じ醫學部の杉原先生は、我流だが、なか〳〵強い。

○兩先生は、互ひに自慢の擧句『文句は、無用ぢや。イザ一戰仕らう』、『ウヽ、心得てござる』朝鮮ホテルで、やつたさうです。

○二番やつて、二番とも、杉原先生の勝。『ウフッ、諸君、どんなもんだ』

○篠崎先生、『これアどうもおかしい』

× ×

○翌くる日が日曜で、杉原先生マダ寢てゐると、『今日は、いよ〳〵勝負に參つたー、さアどうだ』、『ドシンと枕元に座るものがある。見ると、篠崎先生だ。『イヨー、しかし僕のところには、駒も盤もない。マダこの通り寢てるんだ』、『いはれな〳〵、その儀なら、御心配に及ばぬ』、いふかと思ふと、大形の手提鞄から、ヌッととり出す駒と盤。

○杉原先生、ビクッとした。

○さアこの勝負……どうなりましたか。讀者當て、御覽なさい。

探碑記念記

着き、九時十五分の列車に乘じ、夜半城津驛前の日の出屋旅館に投宿した。

翌一日、藤田君と僕とは末松君

探碑記念記

小田省吾
（城大法文學部）

僕が最近に咸南善氏によつて發見せられた咸南の眞興王巡狩碑を調査に往つたことが屢々新聞紙によつて報導せられた。之は博物館の藤田君と、朝鮮史編修會の末松君並に前野君とが調査に往かれると云ふので、僕も同行を申込んだのである。此回の旅行は十月二十七日から僅か七八日間であつたが其の間に右碑の外、咸興郡黃草嶺の眞興王巡狩碑（右碑の兄弟碑）北青郡俗厚の女眞碑と合せて有名な咸南の三碑を見て來ることが出來たのは誠に幸であつた。

新發見の第一碑は咸南利原郡東面龍山里にあると謂ふので、京城を廿七日清津行夜行列車で出發した一行が、城津から九驛手前の谷口驛に下車したのは二十八日の午後二時過であつた。そこから人夫兼案内者三人を雇ひ、徒歩して午後五時過に萬德山福興寺といふお寺に着いた。目的の碑石は此の萬德山にあるので、此の寺を根據とするより外にないのである。刺を通じて旨を告げると、生憎住持は不在であつたが（後に聞けば住持は郡よりの通知に接して予等一行を迎ふべく利原まで出て呉れたのであつた）留守僧は大に一行を歡迎し、早速東廊の一室に導いた。此の部屋は僅か四疊に足らぬ溫突で、内にアンペラを敷き、粗末な長蒲團が一枚置いてあるばかりである。一行誰も口には漏さぬが、聊か驚きの色を顏に見せた。其の隣室も同樣の溫突で眞暗である。僅かに一行の荷物を置くに足るが兩室の間にある襖樣のものは、二尺餘も不足して一部分開け放しである。其の内に、下僧は澤山の柴を持ち來つて、溫突を焚き始めたが驚く勿れ、煙は障子の間隙より遠慮なく室内に入り來るのみか、溫突内のあらゆる隙間より、むく〳〵と出で來り、又煙突附近の謂ひしれぬ穴よりも盛に出で、しかも其の煙は室の附近に低迷して、殆んど煙貫めの有樣で、容易に室内に入ることが出來ぬ。一時は如何なり行くやらむと大に悲觀したが、柴を焚き盡すと共に漸く煙も消沈して、室内に溫度加はり、一行に取り極樂世界となつた。然しこのアンペラの溫突に四人頭を並べて寐たことは、此回探碑記念の第一となるものである。此處にて二日間お寺の厄介になり、急峻なる萬德山の山頂まで（福興寺より一里强）二度も往復し、寒氣烈風と鬪ひつゝ豫定の調査に從事し、最後の三十日には午後六時過に至り漸く歸刹した。すると終日の疲勞を休むる暇もなく同夜の中に是非城津まで出ようとの緊急動議が起り、何れも血氣盛りの士であるから、直ちに一決し、蒼皇として夕食其の他準備を整へ、午後七時半福興寺を辭し、もと來し道を夜の薄明りに逆に谷口驛までたどり着き、九時十五分の列車に乘じ、夜半城津驛前の日の出屋旅館に投宿した。

翌一日、藤田君と僕とは末松君一行と城津文廟にて別袂し十二時過の南行列車に乘じ、北青海岸の女眞碑を見るべく向つた。汽車が新北青を過ぎて俗厚驛に着いたのは午後五時數分前である。夫より兩人が急いで驛より一里弱の東海岸に近づいた頃は、日は將に暮れんとした。海岸には一個の獨立山があつて其下に數個の亙巖が峙立してゐる。其の獨立山が女眞の山城であることが藤田君の說明でかすかに判る位である。愈々海岸に達すると山城の直下の海際に立てる稍小なる方の巖が即ち有名な女眞碑であつて、所語磨崖の碑である。僕等が碑前に立つた時には例の女眞文字は殆んど見得ぬ位である。そこで藤田君は豫て用意した風呂敷包を取出し、水筒の水を口にふくんで、之を碑面にあてがつた唐紙に吹き掛け、大急ぎで此の碑の拓本を取つた。然るに何分海岸で風が强く、水に濕つた拓本は之を一刻も擴げて居ることが出來ぬ。因つて藤田君は直ちに紙をまろめて拓本の大團子を作り、之を己の左手の掌上に載せた。さあ是から海岸の懸崖を攀ぢて女眞山城に登らうとするのである。藤田君は巖角の間を巧みに先導して上り僕は辛うじて之に隨がつた。愈々最後の大巖角に來り中々上りきれぬ。足元は辛うじてわかる位である。一歩を誤れば受合つて命はない。見ると藤田君は大團子を掌上にしたまゝ大巖角の上に立ち、此より外に登るべき所はないといふ是に於て僕は大勇氣を出して之を攀じ上り、やつとの事で山城の最

食堂の方へ興味を奪はれて了つた。

○杉原先生、ビクッとした。
○さアこの勝負……どうなりましたか。讀者當てゝ御覽なさい。

京城雜筆

高角に立つことが出來た。此の時は四方已に暗うして全く調査は出來ぬが、女眞が此の山城に據り、之を一の根據として日本海々岸の諸地方を荒し廻はつたことも有つたであらうとの想像を廻らすには充分であつた。之が今回の第二の記念である。

同夜は藤田君と共に新北青驛に一泊し、翌二日咸興に出で、同日此處の觀光を濟まし、翌三日黃草嶺に向ふ事にした。此嶺は咸興から十五里もあつて極めて不便な所でもあり、又嶺上は標高一二二五米突といふのであるから、萬德山並に俗厚以上の困難があるに相違ないと、前以て大に覺悟をして居つたが、幸に種々の便宜を得て、優に一日の内に充分の調査をなす事が出來たのは、全く豫想外の仕合せであつた。黃草嶺碑と稱するものゝ位置は、今は黃草嶺の頂上より約五里の麓なる眞興里に在るのであるが、此邊でも長津高原から吹來る烈風は非常なもので、平地部とは霄壤の相違がある。此日も碑閣の窓から吹込む烈風の爲めどうしても拓本が取れなかつたが幸に此處で眞興王を祀る爲めに作つた大机があつたので、之を外部から窓にあてゝ風を禦ぎ、やつとの事で拓することが出來た。前二碑と異なり、此日の愉快なる探碑は亦大に記念すべきものである。是は偏に道當局の好意によるもので、大に感謝せねばならぬ。因つて探碑記念記を作る。

大浦貫道師主宰
「心の友」
南米倉町二二六

人蔘類では
一も二もなく
總督府
專賣局
精製の蔘精
に限ります
發賣元
貴生堂藥品店
京城本町二丁目
（電本二三八番
振替七六一番）
總督府精蔘

◇世間はなし

漢江漁郎

○陣内茂吉氏が、友人と朝鮮ホテルで、晝飯を食べてゐると、ツイその向ふで、京南鐵道の秋本氏が、唯だ一人、これも晝飯をやつてゐる。

○元來秋本氏は、近年酒類といふと、ビール以外は飲はまぬ筈なのを、この日は、中形のウイスキーを、一本取り寄せ、獨酌で、チビリ〳〵。

○チビリ〳〵なら、敢て驚かぬのだが、見る〳〵中に、一本キレイに卒業。ボーイを顧みて、『オイ、これアなか〳〵飲めるノウ』もう一本欲しさうな顏色。

○陣内氏、友人をつゝいて『オイ見たか』『イヤ、恐れ入つた』『サテ〳〵、世の中には、剛のものもあるノウ』

○秋本氏が、天安に歸つて二三日すると、小包が一個届く。ハテナと、開けて見ると、ウイスキー半ダース。差出人は、判らぬが、同時に着いた書面に、『我が日本人中、貴下の如き剛のモノありとは、まことに感激、祝着の至りに堪へず……』、秋本氏、首をヒネつて、『ハーテナ』

× ×

○山梨前總督は、何に感じてか隱居の志を起し、その手續を、麻布區役所にしてしまつた。

○これを聞いた城大の某教授、『今年の城大の卒業式に、アノ人の讀んだ祝辭……本文は、まアいゝとして、最後に年月日のところで、一聲高く、大正四年三月……と、平氣でやつてゐました。隱居も、もういゝでせう』

○更に聞くと、山梨さんは、大抵なところで、年月日は、皆んな大正で濟ましてゐたさうだ。

○蓋しタイショウ、その頃からどうかしてゐましたナ。

斬首刀
◇東京風聞記
千駄山房

斬首刀

森六治（鍾路警察署）

始政二十周年記念博覽會開設に當り櫛生警務館に飾り出されたる薪割にしては劍形が違ふが、刀としては餘り不細工にして且つ大なる怪刀あり。傍書に『斬首刀』と書しあるから肯定する迄であるが實は彼の斬首刀の發見保管に就て筆者が深い關係を有するのである時は明治四十一年の頃、警視廳の訊問課に國友課長の後任として東京警視廳第一部一課長として日比谷燒打騷擾事件の時に其の令名を稱へられ引責辭職し其の後松井博士の推薦にて韓國に聘せられて赴任したる渡邊警視（素天氏）は、當時の部下たる筆者に對し警視廳に倣ひ刑事參考品の蒐集を命じた筆者も豫て其の志あるも訊問係と劍道教師と何と何と數々の繁多な事務を擔任せしめられて寸暇なく遺憾乍ら未着手の折柄、職員兩三名增員の事あり訊問と刑事の指揮とに專任する事となり、其處で蒐集に取りかゝり集めた參考品中の一品で、其後警視廳から總監部へ總監部から講習所へ引繼がれて來て居つたのを暫らく振りで見て發見當時の事共を思ひ出したので其の儘を書く事とする。所は鍾路一丁目現在府の所有地として薪市場となり居る所が監獄で、場所は狹いがそれでも在監者は五六百を降つたことはない。當時の監獄は名許りで規律もなく甚しきは男女の別なく狹い所に押し込め、重罪囚には手枷足枷と其の狀全く此の世の地獄であつた。監督權は警視廳に屬し時の中署（鍾路署）顧問補佐官が同所も兼督する事となり其下に看守長、書記以下の職員が配せられて居つた。其の監獄の東南隅に板塀を廻らして五六坪許りの空地があり、草蓬々と塵は山積してゐる。其所が斬首場であつた。顧問が關係してからはさすがに斬らなかつたがそれ以前には可なりやつたらしい。慘血の痕が板塀や土塀に生々しい。其所の雜草の中に恰も捨てられたやうに打遺つてあつたのが薪割大の刀二振で、筆者は夫れが人の首を斬るものとはどうしても受取れぬから永く勤續した看守を呼び說明を求めたるに貴下方のおいで前まで行ふたが顧問着任後實行はせぬが取片付けを怠り其儘となり居るとのことにて良き獲物なりと其一振を貰ひ受け當時の參考室に保管し置いた次第である。御覽になつた方々には說明の要はないが彼の刀の刄はコボれてそれに錆を生じ些の尖形を認めず、薪割にも猶鈍なるを覺ゆる位にて彼れで人の首を斬るとは否斬るといふより叩き斬るのだとは今思ひ出しても身に粟を生ずるを禁ぜぬ。其後星霜を重ね今日の開化を見る。筆者は頭に霜を冠ぶる今日、往時を追懷して誠に感慨無量である。

「心の友」
南米倉町二一六

イ見たか』『イヤ、恐れ入つた』『サテ〳〵、世の中には、剛のものもあるノウ』

○秋本氏が、天安に歸つて二三

◈東京風聞記

千駄山房

○今は時めく安達內相閣下――しかし三十年前は、佐々友房氏の三疊の玄關に、傍輩二三と隣坊主を抱いて、『オイ、今度來たウチのお鍋どんは、房州にしては、チトその、ウフッ……』

○だが、安達さんは、やつぱり政治家でした。いつしかそのウフッを、藥籠中のものにし、『どうだい、こちとらの手腕は、第一晩のお菜の盛り方が違はアな。ウフッ』

○だが、或時安達さんが、『のうお鍋君、俺と一緒に世帶を持つ氣があるか』といふと、ニッコリ笑つて、豐頰を赤らめるかと思ふと、左にあらず。『氣の利いたことをおいひでないヨ。ヘン、ボロ書生の癖に、人を安う見て……クヤシい』、いふかと思ふと、大根のやうな手で、いきなり相手の顏を、ピシヤリ。未來の內務大臣もその暴力の强大には、アッと驚嘆したさうです。

○つまり閣下は、お鍋どんの、一時の快樂的利用物件だつたのです。大抵のものなら、コヽで猫いらずを飲みます。また星や菫を歌ひます。されど、英邁豪毅の閣下は、暴力におどろかず。コヽで敢然風雲の志を起しました。立志傳中の產物となりました。

○だが、當年の佳人、房州うまれの、我が美しき君は、その後どうしましたらうか。一寸マジメ臭つた安達閣下に、お伺ひを立てゝ見たいやうな氣もいたします。

漫筆 金解禁

桑野健治（仁取々引員）

一兩日中に金解禁豫告が出そうだといふ東京電報が新聞紙上に報導されて居た十一月中葉の或る夕某諺文紙の仁川支局から電話があつて、愈々豫告の出るのも今明日に差迫つたやうだ、ついては金解禁豫告の米價に及ぼす影響といふ題で意見を書いて呉れまいかといふ交渉があつた。

應來、とこつちは何の考へも無く二ッ返事で引受けてしまつた。

ところが、筆を執つて机に向ふとハタと行きつかえて仕舞つた。

書付けたのは『現内閣の準備政策着々効を奏し……茲に金解禁豫告の發表を見むとするは御互に同慶の至りである』といふ僅々五行計りのもので……後が出てこぬ。

元來、食糧品の如き需要に彈力性無き物價は……といふと馬鹿に話が堅くなるが、御存じのキングの法則で、年の豊凶に依つて供給に過不足あれば價格が埒外に變動します。故に米の價格など仲々に端倪を許しませむ。

そこで『キングの法則の支配を受けるものなる故供給量の多寡に依つて價格は一般物價と同一傾向を辿らず……從つて其趨勢を豫斷することは到底許さざるところなり』と苦しくも防禦線を張つてしまつた。

斯う一先づ逃げを打つて置いて『豫告といふも亦金解禁の前奏曲に外ならず』で、金解禁の一般物價に及ぼす影響に筆を及ぼしたが我ながら拙い。

『元來、金解禁とは我國の低落せる貨幣價値を回復せむとする目的なるが故に、貨幣の騰貴は當然物價の下落である』なんか、その邊の解禁パンフレットに有りさうな句調である。

然し、何うにか斯うにか、こぢ付けて『故に斯く諸種の攻め道具を使用して物價下落を誘導する時は我國の貨幣は刻々に外國の貨幣と同價値に近付きつゝある譯にして、從つて又物價下落の餘地は徐々に狹められつゝある』だから恐らく今回の豫告を最後として、目先物價の下落は一段落ではあるまいかといふことを書綴つて筆を擱いたが、イヤ全く苦しかつた。

恐らく、支局の方でもこんな御座成りの原稿なら貰ふのでなかつたと思つたろうが、此方でもこんなことなら引受けるんぢやなかつたと思つたが、これも後の祭りで何如ともならなかつた。

然し、これが雜筆社からの請求なら、又何とか書き方もあつたろうと思はれた。

そこで、其奴を書いて見る。

一體、此頃は寄るとさわると金解禁の話で持切り、誰れも彼れもが一つぱし財政家か學者のやうな口吻で、其結果が憂慮に堪えぬなんかと吠えるが、そも〳〵我等は金解禁の影響を蒙るほどの何物を持合はして居るだろうか。

自分のものと名の付くものは、吹けば飛ぶやうな地株がチョッピリと、後は、左樣、斯う見廻した身の廻りの物より外、一物も無いぢやないか。

金解禁の影響が聞いてあきれるよしんばサ、あすが日解禁されて、生絲が半値になろうと助六ぢやないが縮緬の褌を締めやうといふ身分ぢやなし、さればと云つて想はぬ恐慌來で銀行がつぶれやうと、借金こそあれ預金なぞ藥にしたくとも持合せはない。

第一、我等、金解禁を怖がるやうな悪いことは、憚りながら未だ曾て仕てゐない。

それに何だ。何の怨みがあつてか人のところに飛込むで、後先のつじまらぬ原稿を書かせる。

思へば金解禁て、いまいめしい野郎だ。

と、まア、斯うだ。

（十一月廿日於紫明山莊）

◈町内風聞記

北漢山人

○龍山の瀬戸多平さんは、なか〳〵面白いお方であります。

○府議選擧終つて、間もなく、突然道警察部へ御出頭。今度の當選者の中には、他人の得票の、三四倍も、たつた一人で獨占した人もあるが、當局の御意見如何』まつ赤になつて、御質問。その筋でもホト〳〵當惑したとかいふ噂。

○蓋し公憤といふものでせうネ尤も一説には、『フフン、とんだお節介ぢやのう』と笑つてるものもある。

冬籠獨語

の悲壯なる大決心が數多有益の發明とはなつたのである。其効績眞に大ならずや。

まつた。

斯う一先づ逃げを打つて置いて『豫告といふも亦金解禁の前奏曲に外ならず』で、金解禁の一般物

が一つばし財政家か學者のやうな口吻で、其結果が憂慮に堪えぬなんかと吠えるが、そも〳〵我等は金解禁の影響を蒙るほどの何物を

○盡し公憤といふものでせうネ尤も一說には、『フフン、とんだお節介ぢやのう』と笑つてるものもある。

京城雜筆

冬籠獨語

古田廉三郎（朝鮮銀行）

冬ごもり何と云ふやさしい言葉であらう。其昔王仁の歌に

難波津に咲くやこの花冬ごもり
今を春べと咲くやこの花

之は仁德天皇の帝位に昇り給はんことを諷した歌であるとか。

既に其頃から冬ごもりと云ふ言葉があつた。爾來今日に至るまで年々歲々廻り來る冬

農夫は一年の收穫を終へて冬籠し、鳥は巢を營んで之にこもり、蛇は永い冬眠をむさぼる。雪やみぞれの降りしきる冬日曖爐の邊りの一家團欒は大自然が寂寞たる冬の人世に惠む唯一の恩惠である。

茶のみばなしに花が咲き
さりながら文化は進み人口は增し
不景氣は日を追ふて加はり悠々閑々と冬籠をして日を過すことも出來ぬ樣な世の中となつて老も若きも婦女子までも街頭に推し出される樣になつた。之も世想の變遷である。

世想の變遷と云へば實に驚くべきかはり方である。彼の昨年からの大疑獄に徵しても人々が如何に金錢慾に騙られて我利我利亡者となりつゝあるか、武士は喰はねどの氣慨がどこにあらうか。殊に女子の思想風俗の變遷のめまぐるしさ、惡く云へば惡化とも云へる點がある。地下の益軒先生何と見てゐるであらうか。モダンなる言葉も何となく癪に障る。呵々

鶴見祐輔氏の小說『母』の主人公朝子の描寫はなか〳〵うまい、實に近代女性の好模範である。此小說の中に人間の一番大切なものは叡智であると云ふ語がある。余は此叡智と云ふのが非常によいと思ふ。叡智のひらめき、叡智のかがやき。

三越電展を透して見れば世は日一と日と電化せんとしてゐる。之もエヂソン翁の努力の結果が生み出したのである。世を益し人を利するにあらざる發明はなすまじと

の悲壯なる大決心が數多有益の發明とはなつたのである。其効績眞に大ならずや。

本年の新年勅題は『海邊巖』、打ちよする大波小波を脚下に蹴散らして海面を睥睨する巨巖。何と雄々しい男性的ではないか。

冬ごもりからだん〳〵拔け出して海邊にまで進出脫線してしまつた。之も新年のお笑ひ草とならば幸甚。

金箱

金箱白粉
金箱水白粉
金箱クリーム
三越丁子屋その他にて御求めを

◈醫界風聞記

漢江漁郎

○十二月の二日に、元の銀行集會所で、朝日產婆學校の開校披露宴があつた。

○市內一流の醫家連が、いづれも賓客として、招かれた。

○この人達は、二階で御馳走になる。階下では、お燗をしたり、お料理の仕度したり、迎もすきッ腹には、堪らない良い匂ひがする

○國手連の抱へ車夫、『オイ八公、たまらないぢやないか』、『さうよ、我々プロは、情けねえナー』『泣くな。一本分捕つて來やう』、斯くて、車夫溜りでも、大勢が『ウヲッ、こいつァ好いお正月だワイ』『おつと、どつこい。コボレます』

○その散會直後です。シタタカきこし召めした池田院長の車夫、主人を載せて、鮮銀前まで突つ走つた迄は、上出來。ところが、ッイ鼻の先を、電車が通つても、何ッ糞ッ……闇雲に突進したから堪らぬ。忽ち衝突！轉覆！主從ともに、モンドリ打つて、大地に投げ出される。見物『ウワーッ、やつた〳〵。皆來い〳〵』

○院長傷を負ふた。輕からぬ打撲傷だ。でも氣丈な先生だ。起き上るなり、『この馬鹿野郎！、貴樣の眼は、何處についてるのだ』と、車夫をドヤしつけた。スルト車夫公、兩手で、瘤だらけの頭を庇ひ〳〵、『且那！、お靜かに〳〵、折角のお燗がさめてしまひます』

甘い話

泉哲
（城大法文學部）

製糖業は近年製産過剰と價格の下落のために極めて不況に陥つて居る。然し消費量は年々增加して居るのは事實である。石炭は過去十五ヶ年間に四分の消費量を增して居るに不拘、砂糖の消費量は大戰以來年々四分五厘づゝ增加してゐる。

砂糖は二種の異なる植物より製造せられる。一は甘蔗であつて二は甜菜である。前者は熱帶及亞熱帶に産し、後者は溫帶の植物である。二十世記の始め甜菜糖は全世界の砂糖の半以上を占めて居たが一九一三年には半以下となり、今日は三分の一に減じた。其の結果一九一二年以來の消費量の增加は悉く甘蔗糖に依つて補はれた譯である。

大戰は世界の製糖業に革命的影響を及ぼした。一九一三年歐州に於ける甜菜植付反別は約二百二十萬ヘクタールであつたが一九二〇年には約百三十萬ヘクタールに減少した。然るに大戰中及び其の直後の糖價昂騰したので甘蔗栽培に刺激を與へ、一九一三年の産額約千九十萬噸であつたのが一九一九年には千三百萬噸となり、一九二三年には千五百萬噸に增加した。價格は漸次下落したに不拘、甘蔗糖生産の增加は昂進し一九二七年には千七百萬噸、一九二八年には千八百萬噸に增加した。

甘蔗糖生産地は悉く以上の增加に參與して居るが殊にキューバ及びジャバは世界の二大産地であるキューバのみにて一九二三年には四百萬噸、翌年には五百萬噸に增加した。次の三ヶ年間は政府の生産制限方針により産額を減少したが右制限の解除と共に一九二八年には又々五百萬噸以上となつた。ジャバに於いては一九二三年には百九十萬噸、一九二八年には三百二十萬噸に增加し、每年連續的に産出量を增して居る。

甘蔗糖生産の發達は自然的であつたに不拘、甜菜糖業の復活は人爲的であつた。尤もオランダに於いては自由貿易が行はれ、ベルギー、デンマークに於ては課稅僅少であつた爲めに或程度の發達を見るに至つた。かくて甘蔗糖業と甜菜糖業の間に競爭起り、製糖業を益々不況に陷らしめた。大戰後キューバ、テエッコスロバキヤ、ドイツ、オランダ間に一の協定を結び生産量を制限せんと試みたが實現に至らずに終つた。

糖業の不況を救濟する策として考へられた點は、一、重なる輸出國の製造者が國際會議を開いて、數年間に亘る製造額を制限すること。二、輸出國間の國際協定により過剩品販額につき共同の步調をとること。三、積極的に販賣及消費增加の方法を講すること。四、消費稅を輕減して消費量を增加すること、最後に報告の蒐集、配布のため中央事務局を設くる事であつた。此の案の本志は甘蔗糖と甜菜糖との競爭をさけ、生産及び販賣を統制し、消費量の增加を計つて世界の製糖業を安固ならしめんとするにある。

右計畫は國際聯盟の經濟委員に於いて立案せられたものであつて消量者及び生産者、兩者の利益を保護して世界萬民が安き砂糖を自由に使用し得るやうにせんとして居るのである。もし之が實現せらるゝならば甘黨を喜ばせること請合である。

【一六】

社長　高橋章之助
朝鮮　教育新聞
發行所　京城仁寺洞一三六其社

◇列車失敗記

漢江漁郎

○永登浦の前面長神尾さん、有名な左利きで御座ります。

○この間、上機嫌で、永登浦歸りの汽車に乘つたが、フト驛員の呼ぶのを聞くと『往十里々々々』

○神尾さんビックリ敗亡。『あゝ、またやつたバイ』

○汽車から降りると、時方に夜十二時ならんとす。寒さは、寒し夜は深し。意外の失敗をコボシ乍ら、テク〳〵とおひろい。やつと曉天永登浦に辿りつく。面民三四ニコ〳〵して、『お早う御座います。ェヘヘ、面長さん……また元山行ですか』、『ウフッ、どうしてそれが判るかのう』

散步風景

ぢを取つて居るのだらう船は流れのままにゆるやかに下つて行く。

突然汽車がゴーと通る。仁川からだらう。私もそれを機會に『廻

糖生産の増加は昂進し一九二七年には千七百萬噸、一九二八年には千八百萬噸に増加した。

甘蔗糖生産地は悉く以上の増加とること。三、積極的に販賣及消費增加の方法を講すること。四、消費税を輕減して消費量を增加すること、最後に報告の蒐集、配布

京城雜筆

散歩風景

大和與次郎（龍山漢江通）

むやみと暖い日曜日の午後、何の目あてもなく、ただ澄み切つた青空を仰ぎながら身體一ぱいに春のような日の光を浴びて、足の向く儘に漢江の方へと歩いて見る。

新しく出來た橋はコンクリート補裝の堂々たるもので少しも橋らしい感じがしない。町の中にこんな道路を作つたら今のアスファルト道路なんかとは比べものにならぬ程の立派な道路になるだらう。馬鹿に立派なものになつたと思ひながら歩く。

鐵道橋の下に砂を滿載したトロを牽いて行くガソリンカーの姿が一寸見えてすぐかくれた。獨特の妙な警笛が風に乘つて聞えて來る

橋の向ふから自働車が一臺、空車と見えて何の障害もないのを幸ひに、右に曲り、左に曲りしながら走つて來る。その度に車體が右に左に傾く。運轉手は練習にもならうが見て居るこちらは冷々させられる。

河が見える。水はぐつと減つて居る。貨ボートの親船が水の切れた岸に傾いて哀れな殘骸になつてしまつて居る。人は誰も居ないらしい。

風は殆んどないが、河の面には小さな波が立つて居る。向ふの鐵橋のかげは縦の線だけうつつて居る。横の線は波に消されて見えない。

砂利船の三隻着いて居る所で、小さな女の子が三人着物の裾をまくつてピチャ〳〵と打ちよせる小波にたはむれて居る。よく春先きの新聞に『水溫るむ』と題して出て來さうな狀景。

雨が久しく降らぬので水は素晴らしく澄んで居る。大水の濁流の面影なんか更にない。水が減つて居るせいもあらうが、砂に半分埋れた破れバケツやゴム靴などがはつきり見える。歩いても渡れさうに淺い樣に見えるが、ピーヤの下は恐ろしい程青黑く淀んで居た。

すつかりペンキのはげた『一寸お待ち』の立札の側で高工の生徒が小學生と紙で飛行機を折つて飛ばしくらをして居た。小學生のがうまく旋回をして見事に着水したのに高工生のは半分も行かぬ中に錐もみを始め、そのまま墜落してしまつた。崇高なるべき學理が、平凡な經驗の前にペシャンコになるの圖か。フ、、微笑が洩れる。

さつきから悠々と大きな輪を畫いて居た鳶が、何を見つけたかサツと舞ひ下りる。摑みそこねた木片のようなものはゆら〳〵流れて行く。三度やつて三度ともさらひそこねた鳶は、遂々あきらめて、もとの大空に消えて行つた。

俵を山と積んだ船が二隻仲よく並んで下る。船頭らしいのが一人俵の山の上に煙管をくはへて寢轉んで居る。櫓を押して居る船頭も漕いで居るのではないらしい。かちを取つて居るのだらう船は流れのままにゆるやかに下つて行く。

突然汽車がゴーと通る。仁川からだらう。私もそれを機會に『廻れ右』

殆んど葉の落ちた木々の間に寺尾さんのお宅の屋根が見えた。

◈京城驛珍話

三木一彦

○藤田嗣治畫伯が、そのお父うさんの嗣章氏、夫人の雪子さんを伴つて、京城驛へ降り立つたのは十一月も末のことであります。

○お父うさんの嗣章氏は、曾て總督府醫院長として、當地に在住したので、舊知の人も多く、隨つてお出迎に行つた人（夫人同行）も多かつた。

○ところで、待合室は、隨分暖かかつたが、一歩ホームに出ると滅法寒い。『こたえますネー』と人々は、囁き合つた。と、間もなく汽車が着く。出迎への或夫人がサツとコートを脱ぐと、ソレツとばかり婦人連が、一齊にコートを脱ぐ。中には、羽織までとつたお方もある。其處へ降り立つた畫伯夫人は、ぬく〳〵と毛皮の外套を一着し、その儘誰彼に挨拶した。

○お蔭で、婦人連の中には、風邪を引き、翌日から大病人になつた人もあるといふが、何たる馬鹿氣たことであらう。停車場のホームは、家庭のホームとは違ふ。ソコは、往來と見て差支へない。まア襟卷位とつてもよからうが、それ以上勉强、盡力する必要はない尤も下の着物を、衆人に見せるのなら、それア精々お風邪をお引きなさい。

僧舞を見る

西岡照枝
（通義洞官舎）

此の國に來て、もう六年と云ふとしつきを送り、その六年の間に色々の、佳き建築を觀、佳き工藝に接し、又稀らしい種々の美を見る機會はあつたけれど、話に聞く僧舞と云ふ古めかしい、その名からさへ何か此の國の古い時代の匂ひを放散させるやうなその舞踊を見たいと、久しくあこがれて居たものである。

途上行きずりに見る妓生しか知らない吾々の生活では、その願ひもいつ達せられさうにもなく空しいとしつきを重ねてゐたけれど、遂々此の程の朝博で觀るを得た。

然し、あの雜多に騷々しい觀衆に交つて、あの舞踊にしては廣すぎる舞臺、しかもあの乾いたやうな殺風景な舞臺で眺めるには、あまりにも僧舞そのものが、哀艶にすぎ、纖細でありすぎた。

いつの間にか、時と、所を得ない、古めかしい美の、いたましさを考へて涙ぐんでさへ居た。

然し、空想癖のつよい自分は、いつかあの觀衆を忘れ、舞臺を忘れ果ててゐたが、惜しむらくは、折を得て、佳き場所に、あの佳人の舞姿を見たのであつたら、その喜びはどんなに大きかつたらう。

まづ、舞臺の中央に立てられた極彩の太鼓一ッ、その太鼓をはさんで相侍立する二人の佳人。

着付の、黑の僧衣がうすものなので、下着の白を透かせ、紫の袴を見せて、單色乍ら美しいと思つた。肩から斜めに掛けられた赤い切れは、これも何か、由來のあるものであらうけれど、これはなくもがなと考へた。頭の白い三角の頭巾樣のものは、あの單純な色調の着付に點睛をおいたやうでよく利いて居たやうに思ふ。まるで、二つの大きい黑の蛾のやうであるゆるやかな唄と共に、中央の太鼓を廻つて暫し低徊する、ゆるいテムポと、和いだ空氣と、閑雅な美しさである。次第に急調して來ると、あの長袖をひるがへして、太鼓を打つ。その太鼓を打ち、又打つ時の線が實に美しかつた。二羽の黑い蛾が相たはむれ、相遊ぶやうに。

ばちで打つ頃になると、此の曲の最高調に達する所であらうけれど、何と云つても袖で打ちかゝる時が何とも形容の出來ない佳さであつた。

自分はその時、フト謠曲の富士太鼓を想起してゐた。

富士太鼓は悽愴な感じである、これは閑雅で寂しい。

――春のまひる、陽があまりにも美しい、美しい故に、春とは云へど、寂然としたまひるである。」

二人の修道僧が、初めて見る太鼓の姿に心ひかれて、低徊幾度、とうとう思ひきつてころもの袖で輕く打つて見る。何と心をうつ音であらう。

〔一八〕

又打つ、又打つ、遂にはばちで亂打した。――これは、その時、見つゝ感じた私の白日夢である。」

又、僧家にうまれて俗塵にまみれない若い僧が、日と共にとしと共に、懷疑に胸を巢くはれて、何かのフトした機會から、俗世界の汚濁に染んでゆく――その徑路を踊つたのでもあらうか。――然し僧舞の本當の由來は、もつと別なものであらう。私はそれを知らない、又知らなくてもよい。感じるものは自由に色々に感じたらよいと思ふばかりである。然し、此の女學生じみた自分の妄想も僧舞を觀た思出と共に長く此の國へのよき思慕に數へられるであらう。」

◈番茶の匂ひ

漢江漁郎

○鮮銀の古田廉三郎氏は、岡山の產だが、隨分夙成の方で、二十三四の時は、もういつぱし名士の品儒だつた。

○ぢつと國に、辛抱してゐれば代議士、重役は、もち論のこと、もつと上の方へ漕ぎつけたであらう。

○阪本金彌、野間五造、西村丹次郎等々、年こそ向ふが上だが、皆不良友達である。

○途中で、ヘタに役人なんかになるもんだから……。

○この間、岡山人の會合で『古田君もとう〳〵鮮銀で、頭を眞ッ白にしたのは、同情にたへぬ。もつと一生を、大きく踊る男かと思つてゐたのに』と、或る人の嘆惜談。

○古田さん、いかゞですナ。

エピソーデ

る。素より獸醫ならぬ僕だが鐵格子の間から聽診器を入れ心臟の音を聽いた。人間のと少しも變りが

エピソーデ

平山義雄
（旭町小林病院）

達哉君

暫く御無沙汰して居る間に自然の容赦なき轉歩に野分の聲透る多——あの長い馬面の尖端から荒々しく吐出される息が白い二本棒の樣に認められる酷薄の多が迫つて來た。散り殘つた褐色のドン栗の葉が身を慄はして冬の唄を歌つて居るのも侘しい。哲人の如き崇高な秋の玉座を奪ふ多は正に高利貸の如しだね僕の嫌な多は。夜更けてかじかんだ手先をストーブに暖めながら、讀書に疲れた眼を窓にやると、薄白く水蒸氣のヴェール其の隙間に烈霜を思はせる星が冴えて冷い。何處より來り何處へ去るか疾風が通り魔の樣に凄い音をたてゝ過ぎた後の靜寂さ。其の中をハッハッと物の凍る音の鋭さ。それらを聞きながら惡戰苦鬪多事なりし昭和四年よ、早く飛んでつちまへとは思ふものゝ、一つ君に報告すべきエピソーデが殘つて居る。さうだゴリラの話さ。

ゴリラと云へば獰猛な動物を想像する。ゴリラにしてもチムパンジーにしても最も人間に近い動物だ。けれどダーウキンが進化論を發表した時、宗教家から人間樣を猿の類にまで引き下げるとは冒瀆も甚しいものだと猛烈な排撃に遭つたのだつた。だがあれは明かな誤謬だ。人間の先祖は猿でもゴリラでもない、安心したまへ原人から進化したのだ。原人は現存する人間とチムパンヂーとの中間に位し此原人から左右に分れた一つが人間さ。神の造りし人間が決して動物と同列のものから進化したものではないと言つても、確固たる科學の礎上に立つ僕達は平氣だ。何となれば生物は總て細胞の進展統制されたものに過ぎないから。

閑話休題として報告に移らふ。九月も末の或る朝、玄關に息せき切つて馳せつけた人が、人に似て人に非ず、子供のゴリラが病氣して居るから至急診察して欲しいといふのだ。ゴリラなら獸醫の領分だがと思つて居ると內科の先生でないと判らない。極く溫和しく嚙み付きなどしないから是非と言はれて見ると使の人間に對して拒む譯にも行かぬ。それに熱もあつ苦しさうだと聞いては仕方なしに出かけた。俥の上で興業師の米代を稼ぐゴマラを想ふ時、不圖あの佛國のリローの書いた『家なき兒』の一部を憶ひ出したのだつた。

達哉君

君と僕は以前よくあれを讀んだね。あれでは猿であつた。寒い冬狼に襲はれて、大事な猿が肺炎に罹り色々と醫者の手當の効もなく屍を抱いて老人と小供が非常に落贈して今後の興業に暗い思をして居るあの場面を……。

案內されるまゝに行くと檻がある。戸を開くと中に一人の男がゴリラを抱いて靜かに體を撫でて居る。素より獸醫ならぬ僕だが鐵格子の間から聽診器を入れ心臟の音を聽いた。人間のと少しも變りがない。別に肺炎らしい所もない。腹部を觸つて見ると人の子の樣に非常に軟かい。熱と激しい下痢にぐつたりとして苦しさうに呼吸して居る。是迄も度々下痢をしては藥を飲まして癒つて居たと言つて居た。すると僕だけがゴリラの醫者にまでなり下つたのではないのだと窃に苦笑した。兎に角注射することになつて一本の强心劑を右の腕に施した。これも存外人間と異つた感じもなく、死の迫つて居た爲の、ゴリラは靜かにして居た併し其樣が反て訴ふる言葉なきものだけに一層可憐な氣持がした。

『先生、獸目ですかね、何とか助ける法はないものでせうか』

と言はれた時、平然と答へる氣持にはなれなかつた。到底助からない、死は只時間の問題だと思はるゝ人間の場合と何等區別の出來ない暗い氣持に襲れたのだ。僅一頭のゴリラ、僕には路傍の石と何等異なる價値なきゴリラ、然し興業師に取つては一人息子の死生と變り無き心情であらう。絕望の中より哀願する眼ざしはゴリラに非ずして、靜に肢體を撫でて居る人その人の眼であつた。僕は再び心臟を聽いたが哀しい哉少しも起死回生の徵候は現はれず、刻一刻と死が迫つて來るのだ。僕は默つたまゝ蹲り、生氣なく一點を凝視する黑みを湛へた滑稽味のある眞らな眼を見守つて居た。間もなく大きく深い最後の呼吸と共に死んでしまつた。

達哉君

人を診療する僕がゴリラを診るまでに引下げられたと笑つてはい

膏付の、黑の僧衣がうすものなので、下膏の白を透かせ、紫の袴く打つて見る。何と心をうつ音であらう。

談。

○古出さん、いかゞですナ。

京城雜筆

けない。事そのものは蓋し京城の醫師としては空前の滑稽事かも知れない。實際十一月一日の朝鮮新聞のゴシップ欄に寸報されて以來何處へ行つても、ゴリラの診察で笑はされ又笑つて居る。だが再び言ふ、訴ふるに言葉なきゴリラの最後を、一つの動物の單なる最後といふ氣持なくして靜に見終つたと同時に、南洋の自然林の中で終生幸福で居らる可きを、無法にも捕へ大衆に晒し其の上遠く高麗の野に塵芥の如く屍を埋めさせた人を哀しむよ。

だが併しこれも喰はんが爲さねゴリラを診察するのも其の動因は哀む可きゴリラの爲でなくて、ゴリラを米代として居る興業師の爲であつたかも知れない。だから當然の歸結である彼の死を豫覺しながら、ゴリラに取つては結果より觀て何等の價値なき注射は甚だ迷惑であつたかも知れない。にも拘はらず敢て注射をしなければならなかつたのは或る批難を避け、或は習慣的に行ふといふ單純なる觀念と、僕の價値觀念とは自ら別個の論理の上に立つ。判り易く言へば、何れ遲かれ早かれ死ぬ可き者に注射とか藥とかを與へて苦痛の時間を徒に延長させるよりも、寧ろ樂に死を與へる方が大局より觀て大きな愛だといふことは一應尤もに聞こえて正しいことではないといふ事なのだ。

この事に就いては何れ又君に書から。作家である君に取つてはこの考へ方は興味あることだと思ふから。さはれゴリラは人間の先祖でなくとも人が原人から進化せることを思へば、哲人ニイチェの言へる如く『哲人は超人に至る一つの橋だ』とは眞理ではないか。

父と母

徳野鶴子（櫻井町一丁目）

ながとしの母のみとりに老らくの父は病めどもおとろへ見えず

おさなごの如くに母をしたひよるやまひの父を見ればいとしも

やむ人と思はれぬまで肥りたるからだをもちて父はやむなり

ちゝのみの父のやまひのながければ此の頃母のやつれ目に見ゆ

新らしき丹前かさね今日はしも床にすはりて父は笑まへり

× ×

なんといふ淋しさせまる夕べならむたちまち月を覆ふ雨雲

山の手の夜はしづかなり家々のまどのともし火おちつきて見ゆ

◈煙草勇猛傳

漢江漁郎

○京城新聞主筆の柄澤四郎氏、有名な煙草好きで、一日少くも數島十個を召し上る。

○記者も、ズイ分煙草好きを知つてゐるが、これ位吸飲速力の強大な人は、まア見たことがない。」

○昨年の夏ごろ、氏の夫人が、工藤病院に入院。夕方になると、柄澤氏見舞に行く。或る日の晩景工藤院長が、午後の回診に、二階に上ると、一つの部屋から、噴煙濛々として、廊下を罩めてゐる。」ホントに、火事ぢやないかと思つた。

○部屋に這入つて、よく見ると柄澤氏。病人の枕元で、悠然として、スパリ〳〵。例の十個目も、早や盡きんとしてゐる。」

○院長啞然として、『柄澤さん訪問は、三日に一度位でいゝ。それも三十分位で、切り上げて欲しいね』、『オーヤ、院長どうしてです』、『どうしてもあるまい。まアこの煙を見なさい。あんたはワシの患者をふすべ殺すツモリかナ』

冬の一夜

なるんだい』と今迄默つて居た米の弟の安正が突然頓狂な聲で尋ねた。『何、安正か……ハハア安正が若返り法をやつたら、何と無

冬の一夜

鈴木勝海（朝鮮鐵道）

お夕飯がすむと今宵も亦家内九人は爐を取まいてズラリと並んだパチパチとさゝやかな音を立てつゝ燃える火は皆の顏を赤々と輝かしてゐる。爐の傍らで餅を燒いて居た父が白髮交りの頭髮を撫でながら『もう俺のやうに五十の坂を越すと寒さがめつきり身に泌みてナ』と淋しさうに微笑んだ。

『お父さんお茶……』と姉が出す熱い茶をゴクリと呑み乾して又餅をいぢり始めた。と弟が『お父さん……近頃の新聞に出てゐるじやないの……彼の若返法つてこと誰でも一度の注射で二十年位若くなるつてネ』『アツハツハツ、そんな事あてになるものかい』、父の笑顏は相變らず淋しい。

『若しそんな事が事實だつたら結構此の上なしだネ。お父さんは三十四五歲の血氣盛りになるしお母さんは女盛りの三十歲になる……然しこれが姉さんだつたら大變だ。やうやく一ツ二ツの赤ちやんになつて、オギヤーくと泣き出す。だから……』『オホ、、、』と姉は弟の戲談を輕く打消した。

『兄さんさうしたら僕達はどうなるんだい』と今迄默つて居た末の弟の安正が突然頓狂な聲で尋ねた。『何、安正か……ハハア安正が若返り法をやつたら、消えて無くなつてしまふよ』、皆一度に笑ひくづれた。譯の判らぬ乍ら安正も笑つた。圍爐裏で餅の焦げる匂ひが廣くも無い室内に一杯に漂ふて居る。

× ×

それから早や五年目の冬を迎へた。姉は他家へ、弟達二人は東京へ、僕は朝鮮へ、父も隨分老いた事だらう。この間の便りの中に、『俺も近頃めつきり弱くなつた。就ては新聞で見ると朝鮮人蔘が一番俺の身にいゝやうだから少し送つて呉れ』とある。で早速人蔘エキスを送つたがやつぱり父も若返りたいのか知ら？（老父母の身を思ひつゝストーブを圍んで書之）

夢ではなかつた話

佐藤剛藏（京城醫專）

歲月流るゝが如く私の朝鮮に御世話になつてからは本年で二十四年目になつた遡つて二十數年前に私は諸先生や諸先輩の方々と共に話し合ふたことは、朝鮮には將來各道に內地の府縣立病院といつたやうのものが置かるゝだらう、醫專も出來るだらう、齒科醫專も藥專も出來るだらう、終には大學も出來るに相違ないと空想したことであつた。然るに之等は今日悉く實現した。

朝鮮醫學會もとつくの昔に創立せられて其の機關雜誌は始め其の原稿をさがしまはつたやうに記憶して居る。然し今頃は論文揭載を申込んでも數ヶ月後でないと發表が出來ぬ盛況にある。朝鮮藥學會も朝鮮齒科醫學會も朝鮮博物學會も盛況を呈して居る。私の專門に關係する朝鮮化學會といふのも昨年生れた。各方面の化學に興味ある有志者の會合である。更に大邱、平壤の道立醫院にも曲りなりにも醫育機關が設けられた。實に盛なりといふべし。輿論と時勢との力が各種の豫想を實現せしめたのであらう。

二十數年前の空想は實に一片の夢ではなかつた。

折にふれて

朴　榮　喆
（朝鮮商業銀行）

先般『五十年の回顧』と云ふ小著を發行したが、之は別に自己宣傳の意味でもなければ營利の目的でもない。只私の青年時代からの日誌そのものに過ぎなかつたのである。中には多少參考書類より拔萃したものもあるが、その殆んどは私の過去における實際の出來事を册に爲してみたまでのものである。そして今後に於て過去の朝鮮における何かの一端を知る上に些少でも參考になり得れば幸と存じ私が退官を機會に原稿に取掛り約二ケ年程の間隙々に之を纏めて漸く出版はして見たものの何分著述に全く素人の私だから其の內容は極めて拙く出來て居る。然し乍ら之は文士等の飾辭や著述家の創作等を眞似て見よふとしたのではなかつたから、其の邊は讀者の諒解に俟つ外はない。そして此の書は當初賣本にせず只私の親知にだけ配る所存であつたが、或る友人等から切りに之を賣本にして廣く讀ましては何ふかとの勸めもあつたのでつひに之を賣本とした譯で、其の値段の如きも固より實費を以て提供した次第で決して之より利益を獲よふ等は毛頭念はなかつたのである。幸に相當愛讀して下さつた方があつたと見へて此頃は殆んど賣切れた樣である。

それから序に一言辯解して置きたい事は、本書の中に二三不愉快な文句があるとの事を耳にして居るがそれは左記の樣な次第であるから誤解なき樣願ひたいと思ふ。

一、內鮮と日鮮と云ふ言葉である、之は文章にしても言葉にしても內鮮が即ち日鮮だと云ふ事を理解して居る者には勿論能く解るが朝鮮外に居る人には一寸解り難いのである。例へば滿洲或は外國に居る人等には內鮮と書いたら何處から、書物には日鮮と書いて明瞭にした方がよいので此の字句に付ては原稿檢閱の際にも警務局でよく諒解して居る所である。これを內地人方は非常に氣にせられる人が多い樣であるが、別に其程氣に掛ける問題ではないと思ふ。

二、內鮮融和私見と云ふ項目に於て拙者は腹藏なき有りの儘の事を率直に述べてあるが、之は寧ろ私一個の私見とするよりも朝鮮人一般の聲と見て貰ひたいものである。或は多少無遠慮の點があつたかも知れないが、斯樣の事はお互に遠慮して包み隱くし蔭に廻つて不平を鳴らしたり批評する許りでは百年たつても融和は望まれないのであるから、其の邊は見る人の神經に依つて異なるだけのことである。

××××××××××××××××

【三】

××××××××××××××××。

◇飲まれた話

北　漢　山　人

○大浦貫道師、ヒヨツコリ工藤武城氏を訪問して、『先生、恐れ入るが、ちよッとの間、コヽの應接室を借して貰ひたい』、『あゝいゝとも』、『そんなら、早速あつちへ行つて貰ひたい』、『嚴重ぢやのう』、好人物の院長さん、例のパイプを携えて、奧の一室へ消える。

○大浦師、それから今村雲嶺外二三氏に『急々御面談致したし』と電話を懸ける。一同何事ならんと、鼻の頭を赤うしながら、驅けつける。

○大浦師、改まつて、『さて諸君、さうキヨロ〱せんでもよろしい。今日は、どうぞ御ユツクリ實は、忘年慰勞會のつもりぢや。エート、酒は、此處にある。肴は今村さん金谷園に一寸お電話を』

○それから一同、シタタカやりました。實に歡談笑語、湧くが如しです。

○餘り賑やかなので、院長夫妻そーツと覗いて見ると、やつとるく。一同腰掛から、スベリ落ちて、絨氈の上で、大酒盛り。おマケに、その飲んでる酒は、この間外國へ註文して、ツイ二三日前着いたばかりの品。院長驚き入つて『ウーン、うまく擔ぎやがつたな敬服！』

爐邊雜記

らともなく力强い反撥の力が湧き出る。

No struggle no dramaとい

爐邊雜記

西山幸男
（京城齒科醫專）

灰色の雲が低くたれ込めて搜せほゝけたポプラが陰鬱な叫びをあげてゐる。

友よ

何年か前の丁度今日の樣な冬の日、あのB公園の附近の枯草の原にねそべつて半日を過した事を覺えてゐるか。

少しばかりの經驗と、感傷と、そして生はんじやくな理性とを以て、而し、一かどの戀愛批評者の樣な態度で、俺達は得々として戀愛を語つた。

君は涙まで流した。大聲に唄をどなつた。煙草ものむだ。

愛すべき不良兒よ!!。

あの頃俺達は中學四年生だつた友よ!!

昔を思へば甘くなる、未來を考へれば血みどろだ（さる日Yに）

○

友人のTが今度の共產黨事件でやられた。

中學卒業以來別に交通もしなかつたが、どうかするとチョイ〳〵思ひ出された。

中學四年の時、軍國主義トライアングルを研究した彼が、今はこの寒空に市ヶ谷の刑務所でふるへてゐる。

今度Tがやられた時に彼の女房が同じく友人のYの處に金を借りに來た。五圓やつたらこれで差し入れが出來ると、よろこんで歸つたそうだ。

顏色のよくない、强度の近視で眼鏡越しにじつと人を見つめる癖のあつた彼、殊に近來は可なりひどい肺患に惱まされ乍らも、天晴れ一方の闘將として戰いつゝあつた彼の事などを考へると、やられたからではなしに別な意味で一寸暗然とする。

○

平和に飽るれば人間は墮落する苦しい時の方が張り合ひがある。進歩もある。身體の奥底のどこからともなく力强い反撥の力が湧き出る。

No struggle no drama といふブリユヌテイエルの言葉は必ずしも、劇の解釋や、劇の目的のみをいつたものでないと考へてもいゝ。

人生は二つの力の葛藤である。即ち求め樣とする力と求めてはいけないとする力、命ずる力と、命ぜられまいとする力、との斷へざる葛藤である。

寛にあたる氷雨の音をきゝ乍らしみじと冬を感ずる。今宵こそ香り高いコーヒの味にせめて一ときでも心の和やかさを得たいものである。

◈法曹風聞記

北漢山人

○今の世の不景風は、醫者にも辯護士にも、ひどう應えるさうだ。

○或る少壯辯護士さんの曰く、『我れ〳〵若手組の苦境は、君、とてもお話にならんよ。一ヶ月も二ヶ月も、裁判所にのぞく種子のないことが多いんだからネ。辯護士と來ちやア、マサカ歳末大賣出しといふ譯にも行かんし、倉ざらえとも行くまいがな。まア陳ッ坊子を抱いて、貧乏哲學の研究でもするんだが、君、こたえるのう』

○さうかと思ふと、知名の側でも、書生を捉えて、『オイ、もう大分長い間、裁判所に行かんぞ。何、三週間……さうか。檢事さんに氣まりが悪いぞ。何か材料はないかナー』

○ところで、不思議なもので、はやる人間は、妙にはやる。一例が切山、山口等々の流行ッ兒と來ると、テンから筋の悪い訴訟は御免と、遁げてるに拘らず、『是非先生に』、『イヤ、これは、是が非でもあなたに』、景氣も、不景氣も、ありやしない。

○東京などでも、一萬近い辯護士があつて、立派に飯の食つて行けるのが、その中二百人。その二百人の中でも、花井だとか、原嘉道だとか、死んだ江木衷さんだとかいふ連中は、日本ぢうの目ぼしい事件が、潮の如く集まり。ことわる方に、骨が折れる。まア世の中は、こんなもので、あとの何千人は、何年といふて、裁判所の門をくぐらぬのもある。

【二三】

それから序に一言辯解して置きたい事は、本書の中に二三不愉快な文句があるとの事を耳にして居いたばかりの品。院長驚き入つて『ウーン、うまく擔ぎやがつたな敬服！』

馬

野崎眞三
（朝鮮新聞社）

最う二十年近い昔、習志野の騎兵聯隊に居た頃を思ひ出すと身體中がプンと馬臭くなる。四六時中馬と生活してゐると自分には意識出來ないが動物の體臭と馬糞が寢藁に蒸される臭臭とが浸込んでしまふ。今でも騎兵や騎馬巡査なぞに電車内で同車すると堪らない馬の臭が鼻をつく。堪らないほど厭な臭臭が次の瞬間には譯もなく甘い追憶が醱酵されて來る。士官學校でも受驗して未來の陸軍大將を夢見ながらカーキ色の軍服に包まれて居た生活も懷かしい。

◇

數年前、龍山の騎兵第二十八聯隊に召集された時、操典の改正で種々な號令がスッカリ違つてゐるのには弱らされ幾度笑はれた事であろうか。愈々最後の檢閲の日が來て豫後備の兵士には天ッ晴れ教官氣取で馬場馬術の號令。號令だけは間違ふまいと堅くなつた結果ヒョッと舊式な號令を云ひ違つたのだ、御承知の通り騎兵の號令は語尾が永く引く上に私の聲は人一倍大きいのだから間違つたら最後引込がつかない。儘よと捨鉢氣味で舊式號令を連發しながら檢閲を終つたが當時の大野聯隊長を心配させたに違ひない。でも幸に師團長からも太した御叱りを受けず寧ろ盲蛇的の勇氣を褒められたりして一層汗顏に堪へなかつた。

◇

習志志野時代、初めて馬へ乘せられる初年兵だもの落ちてばかり居る。落ちやうが悪いと落ち直しをさせられた。寫地の悪い助教から睨まれ乍ら落直しをする有樣こそ又とない珍圖に違いなかつたろう。それから馬の手入が悪い、馬は高いが新兵は端書一本で幾人でも補充出來る、死ね死ねと責められシュク〳〵泣いてゐる私の姿もいとほしいものであつたろう。最う時代が變つて今日此種の軍隊教育を敢行したら由々しき大問題を惹起するであろう。辛い悲しい思に同年兵が相擁した事はあつても眞逆にミリタリズムを呪ふやうな氣分はなかつた。全く時代は變つて來たものだ。

◇

落馬！、隨分種々な落馬の現場も見たし落馬の話も聞いたが、習志野の練兵場には某旅團長が落馬して其凹地に綽名が出來てゐた。「恐らく今日でもあるだろう。數年前某軍司令官が龍山驛前で着任の第一歩に睹列兵の前で落馬した事があつた。京畿道の田中君も咸南での落馬以來、私が落馬警察部長のニックネームを奉つたが最近は非常な進歩、馬上颯爽たる勇姿を見て落馬部長の異名は打切らねば濟むまい。鏗北財務部長の多賀君が未だ京畿道學務課長時代、ヒッカケられて危く木柵に衝突、鮮血に塗れる處であつた。其他大官や名士の落馬譚もあるが名譽毀損で訴へられると困るから止めやう。」

◇

朝鮮の競馬も盛んになつて新設里の馬場などは中々立派だが、最う十年も前、訓練院や漢江江畔でやつた最初のものは貧弱此上もない。出場馬匹は馬車馬二三十頭、漸く騎兵聯隊から應援の騎馬ぐらいで御茶を濁してゐた。僅々十年間の發達としては速かである。第一回か第二回あたりに已惚から私が競馬に出場して大に笑はれた思出なぞ最う昔話になる。馬年を迎へて馬の漫談斯の如くに御座候。

【二四】

◈鴨となる話

北漢山人

○元町小學校の片岡校長が、二十年住み馴れた教育界を『おさらば』して、せち辛い我々の世界へお引越をして來た。

○第一、家も早速三阪通五八といふへ、新しい巣を構えたが、來る人も〳〵、『ソコで、いくら退職金を……』と、尾籠なところを御質問。校長『ウーンその儀は』

○それはマダいゝ。中には、その退職金を狙つて、『エー校長、三ヶ月で、一萬圓儲かるボロ口があるが、どうです』、『エー校長コ、に斯ういふ百圓札で、横ッ面をハタクやうな珍事業があるが、どうです』、『エー校長……』、校長喟然として、『今の世の景氣が、これでよく判りますな。我々のやうなものさへ、これでいつぱし鴨らしいからナ』

遠慮をする。同じ競爭スデージに立つ者同士と雖も拳を振り上げる姿は見られまいとする。表裡縱横の秘策も好意の外皮に包まれて穩

火事幻想

火事幻想

山口信正
（群山法院）

木枯吹きそめて火の用心の季節に入る。自ら其厄に遭つては堪らぬもの、高見の見物としては又堪らぬもの、悲慘と愉快を兩面に燃え立たす炎こそ性の悪いいたづら者である。

幼少の頃よく二三里も先の火事場に驅け付けて笑はれたことを想ひ起す。救護でも同情でも何でもない。只の興味からに過ぎなかつた。折から風でも強からうものなら有望とか何とか歡呼をあげ快哉を叫んで驅け出すといふ殊勝さは正に沙汰の限りであつた。あの大勢の野次馬と名のつく連中も同じ量見で他の禍に歡樂を恣にせんとする罪びと達であるとすれば洵に以て始末が悪い世情と謂はねばならぬ。

學生時分のこと暑中休暇で鄉里に歸つた。其夏の或る夕方近所に火事があつた。やがて鎭火したころ平素出入りの一老婆が泣きジャクリながら驅け込んで來た。隣の某さんの家が燒けた。可哀相でならぬとヒタ泣きに泣く。しかし之を何う見て居ても悲しんで居るとは見えない。頗る彈力に富んだ元氣のよい泣き方であるから嫌な氣がして居ると忽ち出火顚末の物語から餘談に及んで笑ひ興ずるといふ豹變のし方である。恐らく異常な光景に魅せられた衝動と自家が難を免かれたといふ滿足とから溢出した涙を以て差當り燒かれた某さんに寄する同情の涙を裝ふたものであらう。

しかし此老婆のこんな心理を詮索して見た處が一概に之を嗤笑し得るものか何うかが疑問である。人皆惻隱の心あるは固より自然であり、他人の禍を見て歡喜するやうなそんな鬼の樣な殘忍性は無い筈である。しかし他人の禍と對照し自分の安全なことに先づ愉悅と滿足を感ずる樣に出來て居るものならば同情心といふものは案外不純なことになる。商賣敵でもあつたとする。隣の繁昌よりは破産でもして貰つたほうが有難い。反對黨は與黨の瓦壞を喜ぶ。試驗でも受けたら多數の落第者があつて自分丈及第したほうが優越感にひたり得る。死んだ某は可哀相だが自分が生きてることは先以て御目出度い。いや何うも御氣の毒千萬と世辭人情の表現があつても裏面に一方ならぬ滿足を滿へられては迷惑至極である。大臣の椅子を狙ふ者は閣員にコレラの流行を夢み汽車の顚覆でも待ち受けなければならぬ。これが若し露骨に行はれたら世間は正に修羅の巷を實演することになるであらう。しかし人間本然の德性に基くものか經驗から敎へられたものか夫れは知らないが互に他の血を啜つても始まらないこと丈は知つて居るから露骨な爭鬪は差控へて居る。そこに表面の平靜は保たれ爭鬪は暗鬪位に遠慮をする。同じ競爭スデージに立つ者同士と雖も拳を振り上げる姿は見られまいとする。表裡縱橫の秘策も好意の外皮に包まれて穩かに交換を續けられて居る。若し社會の橫斷面を檢するならば必ずしもひねくれたレンズを透すまでもなく此不可思議な實體をまともに見出す事が出來るに違ひない。

他人の幸福を眞に慶び其禍を眞に憂うる心と自分の慾望を滿たす心とがもつと素朴に自然に結び着け得ないものであらうか。微塵だも自分の脚元を考へない純美な同情を求められないものだらうか。他人の爲にする事が水の低きに流るる如く麟の甘きに集まる如く自然なものならば望ましいが義務を知つて自らを強いる形のものならば人間交渉の不純は永久に止まぬであらう。

先輩某氏年齡五十、敎養あり資産あり家に在つて父母に孝。兄弟に友に篤く子女を愛しみ而も多くの公職に與はり鄉黨を裨益指導し溫厚篤實無比、一鄉の模範たる人がある。其人最近の述懷に自分は永く家鄉に在つて誠心誠意內外の事に盡したつもりではあるが眞に自分の內心を顧みる時は實に恥かしい。何の僞りもなく爲し得た事柄は自分の子供を愛撫したこと只一つである。實を申せば父母に仕へる心持の中にも色々な不純があつたと言ふて居る。對世間のことなどは固より名譽や術策や利害關係などと緣のないものは無いといふ意味らしい。夫れでも賞められて來たから恥入るといふのであらう。如何にも全く掛引のない眞實味は子供に對して發露する位のものかも知れぬ。夫れでは餘りにコタワリの多い人と世の中である。

京城雜筆

火事の壯觀はいつも變りはない此コダワリを燒き盡し世間を淨化する炎があれば更に痛快であらう古來の聖者は仁と愛との敎を垂れたものか、何れにしても嘘と眞の歷史は長いものである。

（昭和四年十一月十五日）

喜美子

辻董重

（京城女子實業學校）

上海齊々哈路四號精版印刷會社內喜美子として保險信函『一銀伍拾圓整』の書留が四日の朝私の卓子の上に置かれてあつた。喜美子は私の敎へ子で女學校三年の時に兩親を失つた一人ボッチの薄命な子である。その後私の內から通はせて女學校を卒業し、間もなく良緣あつて幸福な家庭生活に入り、夫婦連れ立つて上海に赴いて眞劍に共稼ぎしてゐた。

夫がチブスに罹つて生命危篤との通知のあつたのは去る九月の初旬であつた。其後九死に一生を得たので全く神佛の加護であるから元氣になつたら夫婦共に力强い感謝奉仕の生活に入るとの健康な便りのあつたのも束の間、九月中頃三度目（母の遺骨は京城から持ち歸り父は京城から歸る途中、熊本驛で死去）の遺骨を抱へて只今上海を立つ所です。何といふ呪はしい運命でせう。との音信であつた彼女は夫の入院に三百餘圓の借金を背負つた。鄕里の舅姑は鏹一厘も其後始末をして呉れなかつた。彼女は溫故知友に對して人としての義理を果す爲め再び單身上海に赴いた。五十圓の金は彼女の切なる願ひに應じて電報爲替で私から香奠の積りで送つて遣つた金であつた。僅かに半ケ月の後に次の手紙を添へて送り返して來たものである。

おば樣の御親切なお手紙、先生よりの勇氣附けられたお便り、私は有り難さに涙がこぼれます本當に泣いて感謝いたしましたこちらの借金を返して一日も早く上海を引揚げます。父からは借金は一錢も出せないとおつしやるので、私は何事も云はず語らず默つて總てを引請けやうと決心致し、三度上海を訪れました。夫への最後の務、金故に人格を傷けめ樣淸く美しく太く短く人世を終りたい希望の下に親族をなだめ默々として渡つて參りました。これからは只佛の供養を怠りなく、たとひ肉體は離れても靈魂は矢張り永久に二人です。靜かに讀書或は音樂に或は創作に勉强にそれで淸く美しく人生を終らうと思ひます』

喜美子は悲痛な人生の岐路に何回となく立たされた。而も常に正しく淸く力强く生きて呉れることを師として感謝してゐます。

（本誌一月號が出來ましたなら早速送附してせめてもの彼女への慰安とし激勵の資に供したいと思ひます）

◈警八風の話

北漢山人

○今村輔氏の本町署長時代には隨分料理屋の臨檢といふことを、」やつたさうです。

○しかも、著名の粹署長だけ、」その遺口が振つてゐます。

○今晩臨檢といふ時には、第一に、『イマユク本町署』といふ電報を、料理屋に打ちます。その配達夫の行く前に、署員は門前に、張込んでゐます。電報々々——戶が開く——パッとおどり込む——といふ寸法。

○おどり込んでも、〈タに騷いでは、いかん。先づ下駄箱の、男下駄の有無を調べる。萬一それがなければ、旗を卷いて、スゴ〳〵退却のこと。

○但しあつたら、一同勇躍……指定の部屋に突進のこと。そのために、署長は、花月なら花月の、客座敷全部の、見取圖を作製し、その中此所と此所とを狙ふべしと一人々々圖面を渡してゐる。」

○ザットまア斯ういふ段取。それがいち〳〵圖に當り、署員大恐悅。『署長！、吉良邸打入りは、また格別で……〈〈』

ジョン・ワナメーカ

の間に往訪して具さに普通小賣商の强敵であるこの組合運動の方法と精神とを視察した。而も彼は之

ジョン・ワナメーカ

澁谷禮治
（朝鮮銀行）

『ジョン・ワナメーカの人物及事業』の著者有川氏から『いゝ秋です、御壯の健事と信ず、俗書を出しました、別便にて送付御一讀下さい』との案内を受けたのは十月末であつた。其頃から出版元の改造社が方々の新聞に廣告を出してゐる。著者は俗書と謙遜されてゐるがソンナ御粗末なものではなく、又改造社が例の宣傳上手から最近その廣告に『經濟恐慌何ぞ！秘鍵はこれだ！忽ち六〇版突破』といふ式に呼びかけてゐるが、是又キワモノでない事は或る評者が『有川君の著を手にして甚しく引付けられた、そして眞摯な信念あり品位ある文章を通して幾多の啓示と幾多の活力を與へられた。有川君は病弱日々原稿三枚の進行速度を嘆じられつゝあるが、然し氏以外到底入手し難き資料、數多い參考文獻を通してあれ迄にワナメーカの眞骨頭を傳へたことは氏の著作責任感の人並ならぬことをよく知るに足るものである。評者は硬直せる商工業界に對しては現狀打開の福音書として、青少年に對しては氣魄ある好讀物として、老成の先輩には百の療法よりも唯一の若返り的讀物として、是非に一讀をすゝめる』と推賞してゐるので證明される。又或る評者の如きは『有川君は前にヘンリー・フォードを著して、かなりに讀まれたが、今回のジョン、ワナメーカに於て行文一層流麗、我國現下バイオグラフイストとして第一人者といふも過褒ではない。兩著共バイオグラフイとして生命の躍動してゐるのを感ずる。そして何ものか與へられずには濟まぬ』と評してゐる。僕は著者とは十餘年の知己で數年間は卓を並べ僚友として最も親しかつたが、今その近著を味讀して以上の紹介が一々肯綮に當つてゐるのを感じ快心に耐へなかつた。

『ワナメーカ』の商業經營家としての功績については同店五十年記念の祝宴に臨席した當時の大統領タフトが次のやうに述べてゐる

『ワナメーカ君の商店經營の鐵則として創めた賣價の一定——顧客に對し商品をその品質のまゝ的確に見せる方法——不滿足の品に屬する代金返却の便益——買上品の無料配達及び遠距離の場合は最低の配達賃を以てする制度——買はんと商品を調べる上に最も勞力を少くする商品の陳列法——經費の節約と能率の增進とを圖る爲め各種の商業を集中せること——此等の創案は實に世界にその類を見ぬ所である』と。以てワナメーカが如何に商業家として卓拔な手腕を有し且つ不斷の努力を續けたかゞ窺はれる。

ワナメーカは彼の世界最初の消費組合として有名なロチデールの消費組合を一八七一年から七五年の間に往訪して具さに普通小賣商の强敵であるこの組合運動の方法と精神とを觀察した。而も彼は之が脅威を感じなかつたといふのは彼の精神も又消費組合發生の根本的理由即ち消費者の生活費低減にあつたからで、彼は小賣商ながら消費組合運動の精神には贊成であつた。問題は唯だその賣買價格に於て競爭し得るや否やである。之に就ては當時彼が組合の實狀を研究し、その競爭上にも相當の成算があつたらしいといはれてゐる。今之を滿洲に於ける邦商が一意滿鐵の消費組合の撤廢を望んでゐるのや、朝鮮でも某々購買組合の存在を氣にしてゐる商店などあるのに對照して其處に甚しい懸隔を發見する。

ワナメーカは多數の店員を自ら指導し訓練したのはいふ迄もないが、彼は常に店員をいましめて、『不似合なものを賣つて客が歸宅後その妻や家族の者に冷評されるやうなことがあつては、それこそその客は二度と買ひには來ぬ、取引といふものは品物を賣つた丈けで濟むものではない、それを實際に用ゐて客に滿足させるのでなければ眞の商賣が出來たとは云はれぬ、と。社員の云ふことを鵜呑にして持ち歸つた品が一向役にもたゝぬものでツかまされたかと嘆聲を洩す經驗は僕等にも度々ある。

ワナメーカの店には一萬五千人以上の從事員がゐた。開業以來こゝに働いた者の數は二十五萬と註せらる。しかも未だ嘗て勞働爭議が起つた事がないといはれる。彼は店員の就業方法や又その待遇上に細心の意を注いだからである。

ワナメーカは店員を採用する初にも大事をとつた事は勿論で彼の

新店員は多くは知人よりの紹介か店員の家族の者を採用する事にしてゐた。彼の最初の社員は多くは彼の日曜學校の生徒か若くはその關係者であつた。これは彼の成功を齎らした最も有力な道德的原因であつた。彼は日曜學校に於て彼の理想を子供達に注入し、商賣は單なる金儲けではなくて社會に對する奉仕であることを敎へた。

一八三八年七月十一日フイラデルフイアの郊外の煉瓦燒の長男として生れたワナメーカは洋服屋のセールズマンから身を起し、遂に『商王』と迄呼ばれ、曾ては遞信大臣の榮位にも昇り、一九二二年八月、八十二歲で世を去るまで始終敎虔な淸敎徒であつたといふ。

◈江湖風聞記

北漢山人

○府議に當選した中村都一氏、明日は、いよ〳〵投票日といふ十一月十九日。某町の某薪炭屋を訪ふた。

○主人は、不在で、細君に御挨拶したが、フイと傍を見ると、小さい机があつて、その上に新聞紙五六枚。その五六枚に、隙間もなく『中村都一』と手習の大文字。

○おぼへず『ホー、これは？』

【二八】

と覗き込むと、細君『ウチのは、アナタに一心不亂、御覽の通りで御座います』、中村氏感涙滂沱、『私は、落選しても悔ゐません。この一票は、千萬票に勝ります』

× ×

○渡邊商議會頭に依ると『京城で、鰻といふと、まア松金ぢや東京にも、一寸類があるまいナ』大將大の松金黨です。

○ところが、京南鐵道の秋本氏も、實は、それ以上の松金黨で、これは大分念入り……。といふのは、天安から電報を打つて、鰻を注文し、列車便で受取つて、その滋味に陶醉してゐます。

八ツ當り

浦田多喜人

（三巴酒造合名）

○緊縮が祟り不景氣風に怯へて聊か精神に異狀を呈したる氣味あり警戒を要す

（小生）

何もかも溫突に入れて冬籠り

○追々寒くなり新田さんの奧樣の御銘句に共鳴するもの我家の山の神のみならんや。賛成々々の聲、拍手喝采！。

○博覽會の敎育館に鮮鶴と云ふ酒を陳列したるは酒の實物敎示なりしや……。

○曰く、

尊き貴下の御一票を○○○○君へ

有權者有志と云ふ端書あり。

運命を決する日が參りました

貴下の御同情に御縋り致します

立候補　○○○○

有權者から有權者に勸めるのと候補者が自ら悲鳴を揚げて賴むのと何れか有權者の感じを動すか。兎に角我々の代表として金を費し時間を費し出馬せられたる以上絕體責任を負ふて府民の意志を飽迄主張せなければならぬ其人が、有權者に低頭平身して賴むとは何事ぞ、主客顚倒も甚しい哉。

何事ぞ武士は喰はねど高楊子

と云ふ意氣は無いものか。目覺めよ有權者。目覺めよ立候補者。

○十一月廿日の選擧場入口の光景、候補者が赤襷に何の某……。恰も張店の花魁の如くづらりと顔を並べて居られたのには流石の狂氣の小生でも御氣の毒と思ひ馬鹿らしくなりました。

○皆人の代りに出で行くのに斯くまでして御辭儀をして居るとは主客顚倒も甚しい哉であらずして何ぞや。

○議論は止めた。何でも彼でも緊縮せにやならぬ世じや。鰯の頭も滋養分Aビイタミンあり。空世辭に勝る。穴かしこ

緊縮は膳の上にも影響し

鰯の頭さてもたうとし

○　杏　造

しはらくはくるしきふしも忍ふへ

しやかて花さく春をまちつつ

やまと歌

國風會京城支部

落葉深

○ 今村 雲嶺
朝まだきふみてのぼりぬ裏山の小みちうづめしあかき落葉を

○ 清水 正德
けさ見れば庭の落葉にうずもれぬ昨夜の嵐や烈しかりけむ

○ 工藤 武城
吾庭ははきもとらで積むまゝにおち葉のふかくなりまさるかな

○ 松寺 竹雄
老の手はつかれはてけり絶間なくつもる落葉をはきよせむとて

○ 松田 甲
むちうてど駒はすゝまず峠道落ちし木葉のいとふかくして

○ 安東貞一郎
神無月時雨とともにもみじ葉のふりしく上に降り重ねつゝ

○ 淺井佐一郎
吹きさそふ嵐につれてもみじ葉のいつしかつもる杜の下道

○ 中島 貞信
梢みなはらひつくして垣根には風そ落葉の塚をきつける

○ 濱野鍾太郎
踏みなれし道もそれとはわかぬまでおち葉ぞ深くちりつもりける

○ 足立丈次郎
かさゝきの聲はかりして古寺の庭は落葉に埋もれてけり

○ 同 人
庭石も芝生も今朝はみえぬまで落葉深くも散りしきてけり

○ 田中秀一郎
うづもれて庭の飛石わかぬまで落葉の上におち葉してけり

○ 佐々木杏造
かきよせてたく人もなし古寺の庭うつたかく木葉つもれと

○ 西田 明松
山風の吹くたひことにちりしきてつもる落葉そ深くなりける

○ 安東都天子
とう人のまれなる庵は散りつもる落葉に道もわがすなりにき

○ 同 人
ちりつもる落葉に道のうもれつゝふむに音ある森の下かけ

折にふれて

○ 都天子
いつ見ても松のみどりは變らねどかはりはてたる我姿かな

○ 明松
荒海の風は凪くとも人の世はなみたつことの絶ゆる時なし

○ 杏造
しはらくはくるしきふしも忍ふへしやかて花さく春をまちつつ

○ 秀一郎
みなもとのにこらはなとか川水の流れの末のすみわたるへき

○ 同 人
まもるへき人の道をもふみ迷ふ心すべきは黄金なりけり

○ 丈次郎
よろづたみひとつ心にはけみてそ國の榮えはまつべかりける

○ 鍾太郎
うき草のさためなき身そあはれなる何れの國に骨や埋めむ

○ 貞信
すさみゆく人の心の關守とたのむは國のおきてなりけり

○ 同 人
みくにふりわすれはてたる醜草のとつ國風になびくうたてさ

○ 貞一郎
越方をおもひかへせば我身世にふみ違へたる事そ多かる

○ 甲
何ともわすれがちなる老の身も君と國とはいかでわすれむ

○ 竹雄
見るたひになき友たちをしのぶかなふはこに殘る水くきのあと

○ 武城
えびすより傳はる種子の生ひしげるしこくさかりて燒かむとぞおもふ

○ 同 人
世のさまのうきことおほくなるまゝに夢まどかにもぬる夜すくなき

○ 正德
國をおもふ眞心あらば君が代をたゝほきてのみ居らるへしやは

○ 雲嶺
いくそたひよみかへせとも知れぬなり言葉の道はわけかたくして

對話「川柳点」

横山巷頭子（南山吟社）

時　正月。松がとれて間もなき頃。

所　淺草龍寶寺門前、柄井八右衛門の家。

人　柄井川柳、娘おあさ、花屋久治郎

◇

川柳　おあさ、今戻つたぞ戻つたぞ、いや正月早々からとんだ目にあつたものだ。

おあさ　あゝ、とつさまお歸へんなさいまし、して北町の首尾はどうでござんしたえ。

久治郎　おゝ宗匠、御無事で結構でございました、御案じ申して居りましよ。

川柳　これは〳〵花屋さんもお出でゞしたか、御心配をかけて相すみません。私の口から申上げるのも何んですが依田和泉守さまは道理の判つたお奉行さまで御ざいました。

おあさ　とつさま、それぢやあ何んのおとがめも無かつたのでござんすかえ。

川柳　町内五人組の衆とも話した事であるが、輕くて手錠位ひは覺悟して居りましたが、別段の御叱りもなく、これ此の通りの無事そくさい、花屋さんも喜んで下さい、かへつて川柳點、前句付の名譽、過分の御褒めにあづかりました。

久治郎　それは〳〵それで柳樽の版元花屋久治郎も先づ安心致しました。したが彼の『さむらひの子はにぎ〳〵をよくおぼえ』の句についての申開らきは、何んとなされましたな。

川柳　これも御時世、田沼樣御存生の頃であれば、まひない袖の下は天下晴れての大威張り、御役廻りから祿高は申すに及ばずお勝手元から忍ばせた金目の高により出世するもの、しない者とんと情けない有樣でございましたが、御改革になつた此頃では、そうした悪錢で懷ろを肥した人達は、ことごとく御改易になり……。

久治郎　其のことは去年冬からも數へきれない程承つて居ります百姓町人をいぢめて絞りとつた天罰がてきめんだと、今朝も錢湯で戲作者の春水と溜飲を下げました。

川柳　只今では潔白な御役人樣ばかりが揃つていらつしやるのですから、あんた方も案じられた『にぎ〳〵』を袖の下と解釋して、お侍を嘲つた句とはお採りになりませんでした。

おあさ　元締の吳陵軒さんや、前句付社中のみな樣が心配なされました、江戸中に評判の高いあの句を、お奉行さまは何んとお解きになつたのですえ。

川柳　さもしい心持の人達から見れば『にぎ〳〵』は、それ歸に持つ傷の痛みで、まひない袖の下と、とれもするが。アハ、、竹刀の握りやうを早くおぼえると申上げた、私の申開きを受け入れて下すつた、お奉行さまはよく下々の事を御承知で誠に有りがたい、お方で御ざいます。

久治郎　いつも乍ら宗匠の御發明には感心いたしました。

川柳　いや花屋さん、世の中は變りました。前句付も人の悪口や皮肉ばかりでは捨てられる時代が遠からず參りますよ、昨年來からの御儉約の御ふれで人の心も引締り、すべてに眞劍味が溢れて來ました。今日も今日とて北町で、事の序でにお奉行樣へ前句付の御説明を申上げ、はからずも其方に會ひ、前句付を敎えられ、依田和泉守、北町奉行として存外の學問を致した、過分に思ふぞよ。との有りがたいお言葉、これからの川柳點は久治郎さん、今迄出した柳樽とはチト行きかたを變えなけりやあなりますまい。

久治郎　御もつともで。

おあさ　とつさま、何時の間にやら日も暮れて、チラ〳〵雪が降つて參りました。

川柳　おゝ雪か、それもよからう『正月もだん〳〵寒く二十日なり』だ。花屋さん丁度時分どきでもあるから飯でもたべながらゆつくり話すとしませうかな。

（完）

易
小唄
阪岡
石村介

野口博士の印象

【三〇】

たが、然し野口博士の天才と努力と研究業績は追々認められ、遂に世界の醫學界に斷然頭角を顯はし後年ロツクフエラー醫學研究所病理部長としての名譽ある位置に

野口博士の印象

森　哲　朗
（京城齒科醫專）

米國の詩人ロングフエローの詩を敎はつたのは私が中學五年の頃であつた。あれから隨分年數がたつてゐるので淡い記憶しか浮ばぬが、"Psalm of Life" とか題したものがあつて眞面目たるべき人生を歌ひ人間として爲すべき又は行くべき方針を示した立派な詩であつた。彼の詩の中でこれが大變好きでこれを愛誦する毎にいつも異常な感激に若い胸をうたれてゐた。『心臟の鼓動はあだかも墓場に向ふ葬列の行進曲の大鼓のごとく、その一つ一つの鳴りは我々を死に近づかしめつゝあり』と云ひ又『人生と云ふ砂上に何かはつきりと足跡を遺さねばならぬ』と示してゐるあたり、人生への尊き貢獻を泌々と敎えられたのであつた未だ人生への何物も遺すべきものを持たぬことを唯だ愧ぢるのみである。

それにつけても思出すのは野口英世博士の事である。博士の業蹟は正しくロングフエローの示した人間の理想を實現されたといつてもよい。更に自己を犧牲にして遂に萬里の異境西アフリカ、アクラの地に自分が研究せる黃熱病のために斃れられたのであつた。學界のためには勿論人間の幸福のためにも永久に忘るべからざる人である。實に博士の人類への貢獻は國境を超越して何人も讃嘆と尊敬を惜まぬ。世界の醫學史上に皎々として輝き、我が日本民族のために萬丈の氣を發揚せられたのである。

野口博士の一生も仲々變つて居る。未だ野口清作と云つた十八九才の頃、會津のある町の醫院に書生として住込んでゐた際、偶々東京齒科醫專の校長血脇守之助氏が會津に旅行して此の天才兒の將來に深く囑望して東京に呼び寄せ、容易ならぬ世話をされたが、これは本統の親も及ばない位であつた野口博士も血脇氏の恩は遂に終生忘れなかつたのである。野口清作氏が上京數年ならずして醫師試驗にも合格し、一面大なる努力をなす反面、隨分思ひ切つた放逸な生活をもされ、そのためか或は偶然かは知らぬが、當時の坪內逍遙氏の書生氣質と云ふ小說には其の中に野口清作なる人物が書かれて、初めは勉學に熱心にして將來に望をかけられたが、後に酒色に耽り遂に墮落すると云ふ筋が書かれたのを當の清作氏が見て甚だ氣持ちを惡くして遂に英世と改名したと云ふ面白い逸話が殘つてゐる。

野口氏の炎々たる研學心は抑へんとして到底抑へがたく、當時傳染病研究所在勤中に知り得た一面識のシモン、フレキスナー敎授を賴りて廿五歲の暮に渡米し、ペンシルヴエニア大學病理學敎室主任たる同敎授を訪れて、小使に等しい立場に置かれて働いたのであつたが、然し野口博士の天才と努力と研究業績は追々認められ、遂に世界の醫學界に斷然頭角を顯はし後年ロックフエラー醫學研究所病理部長としての名譽ある位置につかれて最後迄不眠不休の驚異的研究を續けられたのである。

先年血脇氏が歐米を漫遊されし際のこと、野口博士はすつかり血脇氏の米國に於ける日程をつくつて待つてゐられた、私も偶々當時米國に遊び、ペンシルヴエニア大學に在學して居た關係上、恩師血脇先生や野口博士にも會ふ機會が多かつたが、博士が血脇氏を世話したり案內せられる爲めには、氏にとつても最も貴重な時間を割かれ恰も子供が其の親を劬はるが如き態度で始終せられたのであつた。そして至る處で熱誠な歡迎を受けられた。平素は訪客に面會するに多大の考慮をされて居た博士が、殆んど二ヶ月に近き間の心盡しは容易のものではあるまい。其の間研究所からは刻々研究の結果を電報で通知し來たり、博士はこれに對してそれ〳〵次の方針を示してゐられたとの事である。

私として最も印象の深いのは、やはり費府に於けるカーク氏の主催にかゝる血脇氏の歡迎會で、當夜吾々數名の者も御招伴にあづかり、野口博士も幸ひ見えており、相當知名の學者も出席されてゐた然し極めて打ちとけた會で、野口博士が初めてペン大學に來た當時の有樣をよく知つてゐる衞生學のアボット敎授は當時の追懷談をせられてゐた。血脇さんの挨拶は野口さんが英譯されつゝ『どうもむつかしい』などと言はれたりした事が今でも眼に見える樣である。其夜來られた人々にそれ〴〵名を

句付の名譽、過分の御褒めにあづかりました。

久治郎　それは〳〵それで柳樽の句を、お奉行さまは何んとお解きになつたのですえ。

川柳　さもしい心持の人達から見

書いて貰つて好記念としたが、野口博士の亡くなられた今日は Hideyo Noguchi の筆蹟が何よりの思出深い紀念となつた。

野口博士の記事は死去された當時新聞などにより已によく知られてゐるが未だ我が國に纏つた傳記はない。ところが茲に甚だ愉快に堪へない事は目下米國で詳しい傳記の發行計畫がある事である。著者は現シンシナチ大學生理學教授たるエックスタイン氏で、同氏は一層詳細なる資料を蒐集する爲に先頃日本に來遊し、博士の鄕里にも赴いて舊知舊友に會つて少青年時代の樣をきゝ、滿足な材料を抱いて歸米したのである。既に二千頁に餘る原稿を脫し、更にこれに追加さるれば相當詳しいものとなるであらう。殊に氏は米國に於て文才を認められてゐる人だから。……そして愈完成の曉は洛陽ならぬ遠き北米の紙價を高からしめる事であらう。來年早々出版されるとの事、私共も是非一本を求めたいものである。

人間野口氏にも學ぶべき美點を多數見出す、博士は千九百十五年メリー、ダーヂス孃と結婚され、一子も無く、夫人は今や未亡人として淋しく有りし日を追想されてゐる事であらう。

發明王エヂソン翁は『天才とは一歩の靈感と九歩の發汗だ』と喝破した。賴山陽も『我を才子と云ふものは未だ我を知らざる者也、努力すと云ふ者こそ眞に我を知れり』と敎へたのである。我が野口博士も氏の天才を發揮せしめたものは絕大の努力であつた。世には幾多の天才を抱いて空しく埋れてゐるものもあらう。天才も努力をせざれば瓦礫に等しい。最後の勝利はうまざる努力である。野口博士の場合は此の兩者が完全に調和發揮されたのである。人類のために今後と雖も第二第三の野口英世博士の如き人の出でむことを望んでやまない。（十二月四日）

海邊巖

木本滴翠（朝鮮銀行）

○
先獸瑞氣鬱雲烟。　二見靈頭春色鮮。
來拜歲朝紅旭上。　雙巖屹立水連天。

○
海門波靜古巖高。　立見鯨來船幾艘。
儘解風流漁父在。　夕陽罷釣聽松濤。

○
點塵不到古松邊。　水色連天一碧鮮。
傳說福神垂釣跡。　巨巖浮海幾千年。

○
無山無水不奇觀。　雄壯風光天下冠。
萬二千峰皆骨立。　巖々映海海漫々。

◇名府尹物語

北漢山人

○平壤府尹の松井信助さんが罷めた。

○退官になりさうだと聞くと、平壤ぢうの人間が『それア困る』とあつて、躍氣の留任運動。

○それも間に合はぬとなると、慰勞金一萬圓の決議。

○口々に、『困つたことになつた』と、痛惜してゐる。

○アノ難治の平壤で、これまでに人心を收攬した信助さん、またエライといはねばならぬ。

× ×

○官界生活三十年、初めは、月給四圓五十錢の巡査敎習生から、スタートを切つたさうな。

○前任の大邱でも、空前の名府尹といはれてゐた。

○度胸と、愛嬌とが、都合よく調和して、まア一寸『達人』といふ風格。

○猥談家としても、廟南松井翁と五分の勝負の出來るところに、我信助さんの、唯だの鼠でないことが判らう。

幾多の天才を拾いて空しく埋れてゐるものもあらう。天才も努力をせざれば瓦礫に等しい。最後の勝

○それも間に合はぬとなると、慰勞金一萬圓の決議。

我信助さんの、唯だの鼠でないことが判らう。

ふぐ料理
お座敷金婦羅
川長
旭町一丁目

茶いろ〳〵
茶器いろ〳〵
青々園茶舗
京城本町二丁目
（電話本局一一一一番）

お二人で一つの保険にはいれる然も保険料は普通の一人分餘ですむ
二人保険
東洋生命京城支店
一萬圓契約で八千五百圓の現金定期配當の外に普通配當がつきます
不老保険

外科
皮膚科
瀬戸醫院
院長 瀬戸潔
京城旭町二ノ八
電話本局二四九八番

M式卷上日覆
ホロ形日覆
各種テント
諸車用雨覆
非常袋
フトン袋
其他帆布製品
製作販賣
京城驛前
中西テント商會
電本二八四八

内科
小兒科
中島病院
明治町二ノ七七
（電話本局三七八番）

京城永樂町二

酒井婦人病院

院長 酒井一郎

（電話本局一八番）

京城本町二丁目

一番瀬醫院

院長 一番瀬慶次郎

（電話本四〇〇五番）

内科
小兒科

木村醫院

院長 木村文三郎

京城府吉野町九一

（電話本局七二五番）

金物類

近藤商店

京城本町三ノ三三

電話本局一五六二番

明治町二ノ七五

利根川齒科

院長 利根川清治郎

（電話本局一八六七番）

西洋料理
泰明軒
日比谷公園に近く
議院には殊に近し

温陽溫泉
神井舘
京城に最も近く
閑靜にして清潔

高級化粧品
金ばこ
三越丁子屋など
一流店舗にあり

謹賀新年
昭和五年一月一日
鎭南浦電氣
株式會社

二十年来
おなじみの
最上醤油
京ク カ
最上醤油

香味
佳絶
ホシ大ソース
永登塚大
浦醸

お上品な
料理には
淡口醤油
京ク カ
淡口醤油

初釜

安東貞一郎
（安東醫院）

祝松祝

大君の惠みの露に枝たれて千代も經なゝむ
松そ芽出度

初釜

去年の塵拂ひて釜の管聞けはわか心まで新
たなりけり
浪花江のよしやあし屋の釜かけて浦の松風
聞くぞ樂しき

早梅

消え殘る雪かとばかり立ちよれは香に立つ
梅の花の一本

梅

折々は雪に埋もれて山里の垣根の梅のめつ
らしきかな

霞中鳥

八重霞立重なれと古里の空は迷はす歸る雁
金

閑居竹

世の塵もかゝらぬ庵に見竹の葉ことの風の
何騒くらむ

鶏

子を思ふ親の情けの見ゆるかな餌に呼ふ鶏
の心盡しに

雨中柳

春雨のけふるが如くふる中にしたれて長し
青柳の絲

河水清

五十鈴川神代なからにすむ水の流や御代の
姿なるらん

神代より流れ絶へせぬ皇の御國の川は千代
も濁らし

河

鴨綠江の河は氷のとさせとも下行水は千世
も濁らじ

海上風靜

四方の海かよふ舟路の安らけく岸によせく
る波風もなし

殘雪

春風のそよく谷間に來て見れは梅かと見え
て殘る白雪

故郷の友の文を見て

水茎の跡もにほひぬふる里の梅咲き初むる
春の便りに

春立ちける日

春來ぬと人はいへども名のみにて冬にもま
さる庭の雪かな
梅もなく櫻も生らぬ此國の春は千年の松と
契らむ

春の頃よめる

去年のまゝ雪は軒端に消へすして寒くも結
ふ故郷の夢

思ふ事ありて

風折の枝はありても梁となる大幹の頼もし
きかな
眼をは廣く見張りて世の中を太く小さく映
しても見よ

教育勅語を拜讀し奉りて

我國の大和心を忘れすは世に恐るへきわさ
はあるまし

元旦

ことさらに家のおきてを守るべしけふは今
年の始めなりせは

雪中松

老ぬれは松を心の友としてふり積む雪をう
らみやはする
おれもせす靡きもやらでふる雪に力くらふ
る千代の松哉

京城雜筆

手澤本の趣味

名越那珂次郎
（城大豫科）

私は獨立自尊を主張された福澤先生を欽慕すると共に此書を大事にしてゐるのである。又此書は父のかたみでもある。

◇

第三は古今書院發行の三浦周行先生著『現代史觀』である。先生は私の忘れ難き恩師であつて、此書には『大正十一年十月二十四日ロンドンよりケンブリッヂに赴き名越學士の寓居を訪ひし記念として著者』と記入されてある。之を見ると霧で空の暗かつた日、グランタ河に沿ふ森を眺めた私の下宿に先生の御出で下さつた日の事を思ひ起すのである。而して先生は私の下宿に着かれても、直ぐに大學の教授を訪はるゝといふやうな風で大活動を爲され、先生の精にまことに敬服したのである。此書には又三浦文庫の藏書印のあるのも懷しいのである。

◇

その四は劍橋の古本屋で買つたのであるが、一八五六年版のキングスレイの『ザ、ヒーロース』である。一八五六年は我國の安政三年で英國ではヴイクトリア女皇のパルマーストン內閣のクリミヤ戰役を終つた年である。キングスレイは詩人でもあり小說家でもあり多くの著作を爲したが、後にはケムブリッヂ大學の近世史の教授にもなつた人である。書もよくしたと見えて此書の銅版の插畫はキングスレイ自ら描いたものである。しかもそれが中々いゝのである。さすがに詩人の畫だけあつて神韻縹渺たるところがある。殊に表裝が光澤のある皮表紙で金色美しい裝飾があり實に貴族的の裝幀である。而して表紙の裏にウイリアムキングなる少年に算術の賞品としつたものであるが、絹紙表和裝小型の『武家必讀泰平年表』である其表紙裏のタイトル、ページに『頒限三百部禁市鬻』『忍屋隱士謹輯藏版』とあり、其の初頁の右中央に『大槻文庫』の朱印が捺してある。此の印が金澤文庫形の長方形の印で書體が謹愼にして又文雅なところがありまことに好きなのである。而して此の書の終りに次の書入がしてあるのである。

此書ハ雷幕府小十人組大野權之丞ガ著ナリ、天保十二年正月出版セシ所、同二月十日御咎アリテ改易ノ上九鬼式部少輔ヘ御預ケ其在處丹波綾部ニ於テ是年九月歿セリ、此年表ノ外ニ殿居囊青標紙ノ著アリ、其中ニ刑ノ百箇條ヲ擧ケシニ因リテ深キ罪科ヲ蒙リシ者ナリトゾ

明治甲申八月二十六日　大槻修二（印）

謹呈探古柏木先生

とあり、印文には如電とある。明治甲申は明治十七年である。

◇

第二は明治三十二年に時事新報社から發行された福澤先生著『女大學評論、新女大學』である。此書は親から讓られたのであるが、扉の白紙に時事新報名譽主筆石河幹明翁の筆で、『次頁諭吉の二字は福澤先生の自署に係る』とあつて、その裏に『諭吉』の二字が毛筆にて大書されてあるのである。

山中共古翁記念文集趣味と嗜好の中に、德富蘇峰翁が手澤本に就て書かれ、書物の道樂に就て五の德を擧げられてゐる。それを簡單に摘約すれば、第一書物の道樂は相手が入らず、一人で自由に樂むことが出來る。第二書物の道樂は身分相應に樂む事が出來る。第三に書物の道樂は比較的健全である第四書物の道樂は本務に妨げとならず、反りて利益になることもある。第五書物の道樂は樂みと云ふばかりでなく智德の修養にもなると。誠に同感である。次に手澤本とは西洋のアッソシエーション、ブックスであつて、其の定義を下せば、手澤本とは有名又は知名の人に依つて所有された特種の本であつて、其書は書物として價値が有ることもあり、無いこともあるが、その本には有名なる人物の藏書印若くは書入れ、批點、引線等のあるものでなければならぬ。詮ずる所は書物そのものではなくて其書に伴ふ歷史、履歷によるものであると云はれてゐる。私は今此の定義に嚴密に適ふ手澤本を持つてゐないけれど、記入れ其他自分との履歷によつて廣義に解すれば手澤本と云ひ得やうと思ふ愛書を所藏してゐる。今その內より少しばかりを擧げてみやう。

◇

その第一は學生の時に神田で買て僧正ストートフォールドから與へられた紙片がはりつけてあるが小供の賞品として勿体ない裝幀である。北陵頓記[illegible]

太平洋問題の先驅者には稻垣氏を推すべきであらう。而して此書のタイトル、ページの上に稻垣氏の

◈おもひ出草

漢江漁郎

て僧正ストートフオールドから與へられた紙片がはりつけてあるが小供の賞品として勿体ない裝幀である。此裝幀を見てもヴイクトリア朝の時代趣味が窺はるゝ。

◇

第五も劍橋で買つたのであるがたしか最後は西班牙公使として亡くなられたと思ふ稻垣滿次郎氏の一八九〇年にロンドンで發行された『ジヤパン、エンド、ザ、パシフイック』である。私は此書が稻垣公使の劍橋大學のキース、カレーヂに居られ、此の大學で此論文を仕上げられたものであることを知つたのである。今日太平洋問題が喧しくなつて來たが、明治二十三年に於て太平洋を論ぜられた卓見には敬服したのである。我國の太平洋問題の先驅者には稻垣氏を推すべきであらう。而して此書のタイトル、ページの上に稻垣氏のペンでレイド博士及夫人に贈呈する旨が記されてあり、又贈呈の手紙もあつたので、之を表紙裏にはりつけて置く事にしたのである。

◇

以上のやうな手澤本はさう誇るほどのものでもなく、此の程度なら誰しも得やすいものであらう、然しそれが又書物の樂みの一の德でもあるのであつて、此等の書物は內容を讀んでも益を亨けるし、又時々出して見ても無限の樂みを覺え、又修養努力の刺戟ともなるのである。私は凡て書物を愛するものであるが殊に手澤本の一層趣味があるのを思ふのである。

ばかりを擧げてみやう。

◇

その第一は學生の時に神田で買は福澤先生の自署に係る』とあつて、その裏に『諭吉』の二字が毛筆にて大書されてあるのである。裝飾があり實に貴族的の裝幀である。而して表紙の裏にウイリアムキングなる少年に算術の賞品として

◈おもひ出草

漢江漁郎

○藤田嗣章氏が、總督府醫院長を罷めて、東京に歸つたのは、もう大分古いことであるが、話は、その當時のことである。

○藤田氏は、東京に家を持たぬので、或人に相談すると、『ウンそれなら至極恰好な家がある』といふ。段々詳しいことを聞いて見ると、この人は、或る舊幕臣に、家を抵當にして、金を貸した。ところが、それが拂へないで、質流れとなり、今もその幕臣先生が住んでゐるものゝ、いつでもあけるといふことになつてゐる。それを君に讓らうといふ話。

○スルト幕臣先生、『恐れ入るが、どうか三日間御猶豫が願ひたい』といふ。『ウ、いゝとも』と快諾して、待つてゐる、四日目に『さアどうぞ御引越下さい』といふ。心得たと藤田氏行つて見ると、庭など見違へる程清掃し、襖障子も悉く張り替へられ。床には應擧の一幅、何とかいふ名帳物に載つてゐる香爐、それに重代の鎧兜——『失禮ながら家と共に進上したい』とある。『イヤ、それはどうも……』と當惑すると、『何卒是非〳〵御受納下さい。斯く相成るも、淺からぬ御因緣。それに私共は、どれほど落魄する身やら判らず。却つて九尺二間の裏店に重代ものなど持込むは、祖先に對しても恥ぢ入る次第。どうか家と共に、可愛がつて頂きたい。のう藤田氏とやら、御願ひでござる』——熱誠罩めて口說かれたには、流石の藤田氏も潸然として涙をこぼしたさうだ。

初春

植村孝子（永樂町二丁目）

御題を拜して

初日の出金剛巖の高きかな
波靜かなる海のおもてに

初春

鈴に明け先づ初鴉や聲太し
雪降りつ明けて靜けき初鴉
我が庵を祝ふて來しか初鴉
初買に手を引き登る神の前
初買や一尾下げたる法被かな
初賣の松葉負ふ牛霞より
福袋買初む人を押分けて

京城雜筆

小鳥の嫁さん

片岡喜三郎（三阪通り）

去年の春ある人から珍らしい小鳥を一四貫つた。實によく囀る。朝から晩まで引切りなしに妙音をころがして荒んだ人間の心を慰めてくれる。併し彼が囀るのは人間にお愛想をする爲ではなくてよき異性を求めんとしての努力である飼ひ主となつた自分もそこに氣がついた以上何とかしてやらねば義理がすまぬと思つた。そこでよき配偶もがなと鳥屋をそちこち歩いてみたがその雌は中々見當らなかつた。その内とある小さな小鳥やに主人がこれがその雌だといふのがゐた。容貌や教育の程度を云々する暇もなく云ひ價といふ可なり高い代價を拂つて引き取ることにした。

家に歸つて媒酌大然として一籠に一所にしてみると始めはきまりわるそうに互にピン〳〵飛び廻つてゐたが二三日するとすつかり馴れてよき夫婦らしくなつた。夜など相並んで止り木にづくんでゐるところは人間の夫婦以上の趣がある。

主人は喜んだ。やがて卵を產んで小さい雛が三四羽も出來ることを期待して巣を作つてやつたり巣草を入れてやつたりした。さうされると嫁入りした雌は義理にもそんな態度を見せねばならぬと思つたのか、時々巣の中へ這入つて思はせぶりをやる。が一向卵は出來なかつた。

とかくする内盛夏となつて籠の鳥には恐るべき羽替期が來た。雄は囀りを止めて悶々の情で暮してゐたがある朝彼は冷いむくろとなつて籠の底に仰向けになつてゐたその後嫁入りした雌は未亡人といふ格式で淋しく暮さねばならなかつたがその内秋風が吹いてきて彼女は元氣づいた。チエー〳〵と始めは雌らしく鳴いてゐたが不思議なことにはとう〳〵囀り出してしまつた。小鳥の雌が囀るといふのは以ての外の事である。飼ひ主はさても〳〵妙なことがあるもの哉と思つてゐるのに遠慮會釋もなく囀る。してみるとこのお嫁さんは女裝をした男性であつたのであるわい。それにしても專門家である小鳥屋たるものが雌雄の見わけのつかぬ筈はあるまい。知つてゐて知らぬ風をして高い値で賣りつけたものか、その邊の消息はわからぬが今日までのこのお嫁さんの態度からみると賣り主の意志を尊重して雌の假面をかぶつてゐたものがいよ〳〵化けの皮がはがれたやうに思はれてならぬ。小鳥やなどゝいふものは油斷のならぬものだと思はざるを得ない。

それはともかくとしてお嫁さんがかう囀り出していよ〳〵雄と極つた以上また〳〵嫁の世話をせねばならぬことが苦の種である。うづかりするとまたしてやられるかも知れぬから。

鰻丼 五拾錢
お壽司 定評あり 先づ御試 食願上候
本町五丁目 阿波文（電本一八三七）

◈合財ふくろ

漢江漁郎

○民間實業家の中で、鼻息の荒いこと、何といつても朝鮮水電の野口氏に及ぶものはあるまい。

○何所に財源があつて、一年どれ位儲けてゐるか。人のふところ詳しいことは、判らぬが、何んでもその宮崎縣延岡でやつてる日本窒素肥料は、資本金一千五百萬圓で、その純益一年一千萬圓を越えるといはれてゐる。

○話半分にしても、これぢや太閤サンのやうな氣持になるだらう

○この人、割合におべッカは嫌いで、停車場などに送迎すると、『オイ、馬鹿おやぢ、何所をほうづいて來た。さア土產を出せ』、その荒ッぽいこと遙に元祖を凌駕す。

○この豪傑も、第二世にかゝつちや、全く目も鼻もない。タマに廣嶋に歸ると、『ヤイ、馬鹿おやぢ、何所をほうづいて來た。さア土產を出せ』、その荒ッぽいこと遙に元祖を凌駕す。

クヲスノシチョコフといふシベリヤで一旗擧げた男、幣制混亂時代に、紙幣などを發行もした。そ

ある日の新聞から

ある日の新聞から

笠神志都延
（京城日報社）

けふ新聞を見るとこんな記事があつた。舊幣が解禁に伴ふ必然の結果しかぐ〜と。どうしたつて意味が分リッこない。實は舊平價解禁云々なのだからである。またこんなのもあつた。勞力費下層事業費の三割以上と。これは勞力費が總事業費の三割以上云々の誤譯である。

×

ハルカハは春川である。ノブカハは信川である。トミニシキは？何でも露支國境に近いのだからトミンシキーだらう、いやシキーといふこともあるまいからトミンスキーだらう、トミンスキーといふ人名かナ。何ぞはからん『富錦』（支那晉フーチン）といふ地名だ

×

Denikin。反革命後北滿からシベリヤにかけて活躍したデニキンを指すのか。いはく然らず當時北方の雄『田維鈞』

×

『浦賀煙管』ッて一たい何だい？分らん。分らぬも道理、『裏書せる』である。

×

朝鮮水電のインクラインで多數の負傷者を出した。負傷者の身は分何だらう？、電文には『ミナカイシャイン』、新聞には『三中井社員』、眞實は『皆、會社員』

×

內務局長は感興を出發、水田視察のため津江に赴いた。感興には大きな水利組合が出來た。長津江といふ河もある事はある。しかしこの記事はまちがひ。水電視察のため新興に赴いたのだからである

×

ロシヤ革命直前に怪僧ラスプーチンあり。ある記者これをあやまりて、レスピラチンいはくと肺病の藥にしてしまつた。

×

三越の本店建築が出來上つた頃の話。新聞を見ると、三越ではこのたび米國ワナメーカー氏の紹介によるデパートメントストア氏を聘して云々。

×

次もその頃の話。近くオーケストラ氏來朝、近く竣工の帝國劇場に於て云々。

×

歐洲戰亂當時、英國の宗教家プロパガンダ氏の語るところによれば云々。ちなみにプロパガンダは初め普傳と譯された。宣傳が定譯となつたのは末期の頃である。プロパガンダではまだ面白い話があつたけれども忘れた。

×

ドイツから新歸朝のあるドクトルの談中に『フランクフルト按摩院を訪問し』とあつた。もちろん『フランクフルト・アム・マイン』といふドイツの有名な都市の名。

×

クラスノシチョコフといふシベリヤで一旗擧げた男、幣制混亂時代に、紙幣などを發行もした。それをコンニヤク版（某省の秘密文書）にするとクラスノ市廳公布の紙幣。

×

世界新聞界の名士マタン紙の記者ソーエルワイン氏、と書くべきところを『問題のソーエル葡萄酒は三月シベリヤ經由東京到着のはず』、新聞記者も葡萄酒にまでまちがはれれば世話はない。

×

支那公使館參事官オーマリー氏が、支那外交當局と折衝した時の支那電報に、オーマリー氏『三時間』協議するとあつたといふ。

×

宇垣一成大將、總督代理を辭して京城を去らんとしての告別記事に『近く富士裾野演習場移管のため歸京いたします』とあつた『富士裾野演習陪觀』のあやまりだつたのだそうだ。

×

『芳澤公使の共產黨代表說は事實無根』これは『召還と外相說』のあやまり、田中內閣出現當時のこと。

×

ゼネバ會議直前大朝特派員の發電に『會議は午後三時比率問題で議論沸騰すべく、大波瀾を豫想せらるとあつた。何の午後三時どころか、五、五、三だつたのである

×

齋藤總督神戸行仰付らる（後備役）、福岡縣詐僞賭博事件（西戸崎）市電疑獄救濟（試驗地獄）

×

『白襯中尉北極探險中止』を探險中死すと讀み計をもたらして仙

たのが時代遲れ。時代遲れ。ぶりをやる。が一向卵は出來ませぬ。なかつた。

つかりするとまたしてやられるかも知れぬから。

土產を出せ』、その荒ッぽいこと遙に元祖を凌駕す。

京城雜筆

臺の留守宅まで訪問し、母堂をして健氣なる覺悟を語らしめたる新聞記者があつたとある。

×

ランニング選手日本一周競走休止が急死となり『死體は長岡に持ちかへり』とヨタッたのがあつたといふから笑はせる。

×

『モチヅキシハシス』を飜譯して『望月圭介氏は死す』ソコで寫眞を載せて……おお、大ぶ書きすぎた。まア今度はこれ位でいいでせう（一一、二〇）

◈垂綸風聞記

三木一彦

○釣好きの池田院長と、棉引博士は、この頃でも、日曜といふと仁川へ。

○船の中から、悠然と綸を垂れる。メバルが一つ懸ると、池田院長『ムー、殘念』、ハゼが一つ懸ると、棉引博士『ムー、殘念』

○魚を釣つて、何が殘念なのかサッパリ判らん。

○そこで、或る人『兩先生、釣れるたびに、殘念々々といはれるが、アレは、何かのおマジナイですか』、兩先生『馬ッ、馬鹿をいひ玉へ。この鮮かな手並を、京城の人間に見せられぬ、ソコが殘念なのぢや』、『ブッ、なる程、殘念にもいろ〳〵御座います』

緊縮は家庭から

平山政榮子

（東小門外平山牧場）

緊縮、緊縮と各方面で大分問題にされて來ました。節約といふ言葉は何も今の世にのみ騷がれねばならぬ事ではなく、いつでも人間の生活になくてならぬものであります。ですから別に事新らしい事でも何でもありませんが、それならなぜ、此の頃まるで自分の家の火事でもあるかの樣に騷がねばならぬか？、消費節約から緊縮生活と目下經濟界の大問題になる金の輸出解禁にまで潰ぎつける爲めには、どうしてもこれを履行して貯蓄をふやし、帝國の經濟信用と、物價の下落とを圖らねばなりません。ともかく此の金解禁さへ斷行すれば財界も再び活路を開き、吾々の生活も豊かに救はれるのであります。その準備として必要な緊縮は果して如何にして實行すべきか？。

徒らに節約、節約で必要な事を惜しむ樣な吝坊であるのはほんとの節約では勿論ありません。一文惜しみの物失ひと昔から言ひならはされてゐる通りで、そんな人に限つて、不經濟な事を知らずにやりがちなものです。

では此の節約を具體的にどんな風に行へばいゝかと言ひますと、先づ家庭から初めるのが第一であります。どこの家でも一家の經濟を立てゝ行くのは主婦でありますから、主婦たるものは特にこれらに就て留意すべきものでありまして、一家の會計をしつかとくゝりしめて、ともすれば放漫になり易い夫の蟇口の方にも常に心がけて強い牽制力を働かせねばなりません。夫の氣持は一寸の主婦の心つかひでどうでもなるものでありまして、家庭に於きましては矢張り中心は主婦にあるものと言へませう。何事につけても此の心持で冗費を省き、奢侈を根絶し、全く無用の娯樂には金を使はず、すべての慰安を精神的方面から求める事にして、家庭の平和と圓滿とを計つて行くならば、どんなに幸福でせう。正しい理想は始めてこゝから生れて來るのであります。そこで夫も、妻も、子供も、それ〴〵その日を感謝して送る事が出來ます。

而して又一方精神的方面の慰安としては修養書を買つて讀んだり宗教の本をひもとく事は最も必要な事でありまして、こんな方面の費用までも省かうとするのは善いことでは有りません。必要にして有益なる事だけはどうしてもせねばなりません。

そうして又冗費を省き貯蓄をする一方社會教化事業や、慈善事業や、宗教事業のためには、どしどしと吝しみなく應分の寄附を行ふ事が即ち眞の節約の精神である事を忘れてはなりません。

ヘボ將棋の感

味なりの方面で——此妙境に達し得たいものと考へて居る。

○

ります。その準備として必要な緊縮は果して如何にして實行すべき事か即ち國の節約の精神を忘れてはなりません。

ヘボ將棋の感

長郷衛二

（總督府內務局）

○

私の將棋は自分ながら愛想が盡きる程ヘタである、唯一度矢野七段から貴方は上手に大變強いと賞められに事があるので、爾來上手に強いが下手には弱い性の好い將棋だと自ら慰めて居るが、豈はからんや私には上手ばかりで下手がないのであるから大笑ひである。

宅の老母に言はせると、私の父も兄も其通りで、祖父の如きは、誰に向つても萬年井目の圍碁だつたそうである。此意味では私は先祖を恥かしめない孝行者である。

第一家族の後援がない、近頃は私の下手な事を皆が知つて仕舞つて、將棋の日には必ず倶樂部へ電話をかけて來て、『敗けてばかり居ないで早く歸つて夕飯をおあがり』と來る。

○

從つて皆樣の鴨である事勿論で野口、本間、鈴木氏なぞは少々敗け込むと、口直しに長郷とでもやらうかと言ふ具合である。先づ鴨が榮葉をせおつてウロウロして居るのが將棋會に於ける私の姿である。

橋本老棋兄なぞは洋服姿でキチンと盤面に向ひ、腹をへつこましたり、ふくらましたりしながら王手飛車取で四苦八苦して居る私を愉快そうに眺めてニヤニヤ笑つて居られるのが常である。

本間、横井の大家になると到底私の相手ではない、いはんや辻先生に向つては何枚おろされても負ける事に變りはない。あの細々した先生の體から、目に見えぬ偉大なる壓迫力がグングン押し寄せて來る樣に思はれて、手も足も泣きの音さえ出なくなる。

雜筆の松本氏には時々御目にかかる。だが一面願ひませうと云ふ元氣もない。

○

學生時代に長らく庭球の選手をやつて居たので、今でも庭球となれば技は下手でも、相手を呑んでかかる度胸と落付だけはある。それが將棋となると丸きり人が變つた樣に落付がなくなつて盛んに負ける。

何事によらず自信の無い事、稽古を積まない事には落付と度胸がなくなるといふ事を、將棋を始めてから殊更深く感ずる樣になつた

辻先生の盤面に向はれての落付振とあせられぬ態度や、又一種言ふべからざる氣品とを拜見して居ると、大臣でも總督でも樂にやつてのけられ得る方の樣に思へる。

將棋と言はず劍、禪、茶に於ても、此妙境に達せられた方に接すると常に此感を深くする。將棋では到底此樣な妙境を自得する事は出來ないであろうが、否一生榮葉をせおつた鴨に終るだろうが、何か一つ位は——自分の仕事なり趣味なりの方面で——此妙境に達し得たいものと考へて居る。

○

御正月號には鴨然たるヘボ將棋の話も一興と御笑草までに書きなぐつた。

◈米倉町閑話

北漢山人

○北米倉町の大浦貫道師の宅には、よく地方の役人などが來て泊まる。

○この連中、夜になると、散歩と號して、プラッと大浦邸を出る

○さて、何處をウロづくものか歸るのは、大抵深更一時二時。

○これは、ツイこの間あつた事實談。……大浦師いつもの如く、未明に起きて、お定まりの朝の勤經を、朗々とやつてると、隣りの客室の、夜ふかし先生、ビックリ挑ね起きて、兩手をついて、『ウハッ、ウハッ、恐れ入つて御座ります。ウハッ〳〵』、頻りに平伏してゐる。

○大浦師動行終つて、『オイ君どうした〳〵』と肩を叩けど、まだ『ウハッ、ウハッ』とやつてゐる。やつと目を覺まさせて、『一體どうしたといふんだ』と、ワケを聞くと、『なんとタッタ今、俺の枕元に、國のおやぢが頑張つて大きい聲で、キッウ竄見しよる。昨夜のことが、もう露現したらしい。おやぢには敵はんから、もつぱら我輩平伏したよ……』、大浦師瞑を抱えて、『ブッ……さては觀音經の功力だな、どうだ、骨身にしみたかネ』、本人悄然『イヤ今夜から夜の散のは緊縮ぢや』

寒雲

角田不案
（北米倉町）

硝子戸の硝子をうちて風にまじりしぐれの雨の流れ來にけり

風あらみ寒ぐも鬚ぎ朝鮮の空のまほらより時雨きにけり

教會の庭の黄葉も吹きて來し烈しき風のしぐれの雨なり

大根ほす椽に吹き入りて降りきたるしぐれに暗らく戸をささせけり

寒ざむとしぐれの雨のふる椽に戸をさして妻のひそかなりけり

◇

子の部屋に豈はからむや勅語よむ聲たかだかとおこりたるなり

虔ましきその聲なれや子の部屋に大御言葉を高らかに讀み出づ

ひたぶるに心きはまりでわが子供勅語よめるか心おのづから

あなかしこしおほみことばよむわが子供あやまり無れとせちに願へり

畏れ多しとひたに思ひしが誠こめておほみことば讀む子供ただに叱り難し

わが子供大御言葉を讀み居れりかしこき心我に堪えざらむとす

一筆啓上

水谷九二吉
（尼崎伸銅會社）

雜筆誌毎月御惠送に預り難有拜讀。去るものは日々に疎しとか、兎もすれば忘れかゝらうとする朝鮮の感興なり印象なりを、貴誌によつて甦がへし其都度我が心を京城の空に浮遊させます。我が心を浮遊させる計りでなく、私は本誌を手にすると家へ歸へる電車の中で讀み、家へ歸れば應接室に備へて、會ふ人語る人に朝鮮氣分を吹聽して居ますが、面白いもので、本誌寄稿家の誰々は僕の友人だ、イヤ之で誰々の消息が解つたと云ふ人も出て來て、重寶此上なしです。

もう冬が來たので、朝鮮の溫突やスケートが偲ばれます。此地は未だ雪も氷もなく紅葉の見頃ですが、春以來やれ汐干狩だの苺狩だの螢狩だの松茸狩だの無花果狩りだのと、年が年中、客集めの宣傳を續けて居た郊外電鐵も、今の紅葉狩や密柑狩が恐らく最後のものであつて跡は氣味の悪い私鐵疑獄狩が殘つて居る計り、冬の内地は先つ狩物の催も種切れだらうと思ひます。

私は商賣で平日狩出され、電鐵で日曜日は狩出され、緩くり休む暇もないですが、近頃漸く將棋は泉二段に長唄は杵屋喜美師にゴルフは時々寶塚リンクスに通ふだけの餘裕が出來ました。多は狩出の催がないのを幸ひ此趣味の道に狩入らうと思つて居ますが、その色々の感想は何れ又申上ぐる機會がありませう。時節柄御健康を祈ります。

（十二月四日）

旅から旅
尤も自働車のドライブなれば奇巖怪石も轉瞬一過といふ譯なりしや

旅から旅

福田有造（木浦新聞社）

京城雜筆

一

廿二日朝まだ薄暗い中に木浦をたつ、湖南線は雪の降つてゐる所もあり寒さは可なり強く閉口致し候。大田驛で御承知の藤田嗣治畫伯一行と同車して京城に夜七時に入り候。

京城二日間の滯在は誠に慌たゞしきものにて如何にあはたゞしかりしか、中にも雪のそぼ降る郊外にて『泣き女』を見聞したるは秀逸にて候。通り一遍の歡迎とか何よりも面白く畫家の眼に映じ、マダムユキさんも寒さに震えつゝも奇妙な風態を見入り候。聞けばフランスにもそれに類したる者あるやにてフランスのものはやゝ技巧をこらしあるやにて候。顔に化粧して涙の痕の分明する樣にしあるとマダムユキさんの話にて候。講演會とか其他のことは新聞にあれば書くこともなからんと存じ候。

廿四日夜京城發、廿五日朝六時半大邱驛下車、少憩の後自動車を走らせて慶州に向ふ。博物館にて說明を聞き佛國寺の前景の如何にすばらしきものか初めて見物せし爲め小生も三嘆之を久しう致し候。婦人四人は『カゴ』にて嗣治君と小生は徒步にて石窟庵に向ひ候。峠にて日本海の壯大なる景を見、快哉を叫び候。活動寫眞を撮影すと也も巴里土產の種子に候。朝鮮文化の粹を集めたる慶州界隈、千古を隔てゝ尙燦然たる石窟の石像を見候。往復二時間佛國寺を三時半に發し釜山へ六時半に着く。途上自動車上より田舍の町々の有樣はうれしく映じたるならんか。小生は一旦釜山にて別れる筈なりしも又々別府まで同伴することゝ相成り旅をつづけ居り候。福岡へ一泊の上福岡より明廿七日自動車にて耶馬溪をドラブイして別府へ向ふ豫定に候。九州線の車中にて走り書きにて失禮仕候（一一、二六）

二

忙しい旅は亦つゞき候、嗣治畫伯との旅も亦面白く捨て難きものあり候。思ひ出と相成るべく候。福岡を正午に發し百哩を自動車にて突破して七時半に湯の鄕別府に入り候。

道中水鄕日田に少憩、水月の欄干にて河を隔てゝ明麗なる景、洋々として流るゝ峽水、並に秀麗な峰巒に圍まれ、一寸變つた水鄕と思ひました。維新當時勤王家長三州先生がこの旗亭より舟底に隱れて逃がれたることなど聞き及び志士苦心の跡を忍び申候。

この界隈は直入、竹田、五岳、淡窓、梅莊の文人志士の出でし所亦遊びし所にて山是山、水是水にて候。賴山陽が激賞せし耶馬溪はその名ほどのものではなく候。石のトンネルがあとで聞けば耶馬溪なりとあつて、ヤ、驚きし程に候尤も自働車のドライブなれば奇巖怪石も轉瞬一過といふ譯なりしやも知れず。

中津を過ぎ宇佐に六時着す。日はとつぷりと暮れ神宮の森の蒼然たるを拜す。それより一時間半にて別府龜井ホテルに入り候。一行七人がつかりして湯に入りて自働車のほこりをふり落し申候。（一一、二八朝）

三

三十日夜九時別府埠頭に『すみれ丸』に乘船まで別府に滯在溫泉氣分に侵り候。

地獄廻りに一日を消し候、亦由布嶽に由布院に雄大なる高原の氣分を味ひ申し候。

由布院は山水美の變つた景色のある所にて捨て難き思を殘し候。別府の奧の院とも稱すべき所にて一度は見て置きたい所にて候。同行五人龜樂莊に憩ひ短册をかゝされる光榮を得候も旅の一興に候。大家揃ひの中に小生などあるも座興と觀じ候。

眞夏の候に遊びたき氣持を呼び起し候。碧潭あり周圍の風物はさながら繪の如くに候。

由布院の山と水とのなつかしや
直入の繪大雅堂の繪

と書き殘し候、藤田畫伯も面白い繪入りの歌を書き候。

二十八日日本にて最後の講演を別府高女にてする。自叙傳を語りて多大の感動を與ふ。小生も日本にて最後の講演なれば聞く。講演を好まざる嗣治畫伯も次第に板について來り候と冷かせば、自らも大分うまくなつたろうと答へ、折角うまくなつたのにもう日本滯在も短時日になつたと笑ひ居り候。

別府の三日間は夢の如くに過ぎ

京城雜筆

ゆき申し候。亦神戸まで同行をすゝめられ　更に東京へもなど申し候へども、歸鮮の用件ありて一日朝別府出立、同夕釜山の別業に少憩、直に木浦へと向ひ候。畵伯も今月中旬頃には横濱出立、アメリカ經由にて巴里へ歸り候へば東京での送別を約しつゝ相別れ候。

同行十日足らずの旅なりしもフランス物語、畵家物語、女の物語など數々面白き材料あれども、これは稿を別に致し候。

フランスへ歸りゆきます君なれば瀬戸内海を飽かず望めと

九州と朝鮮の旅つゞきけり活動をとりし畵家の眼と腕

マダムユキ片言交りの内地語と身振りのうまさ我に興あり

我が妹はマダムの友となりにけりテープの別れとケビンの別れと（四、十一、六木浦にて）

◈表戸を叩く

北漢山人

○畵家の今村雲嶺氏が、一杯きこし召して、自宅へ歸り、『オイお歸りだよ』と、表戸を叩けど、何のいらえもなし。『さては、不都合至極』とあつて、拳固を堅めて、『こん畜生！、これでもか々々々』

○見物大勢集まり來り、『これア面白い。しつかり〳〵』

○雲嶺さん愈々以つて軟化出來ぬことになり、トウ〳〵下駄を脱いで、表の硝子戸を、コツン……チャン、バラ々々々。すると、そのうしろから、お湯歸りの奥さん風の婦人、『あら〳〵、今村さんぢやなくて、そんなに亂暴したら、私達は寢るとこも、何もなくなつてしまふワ』、いはれてその顔を見ると、隣りの奥さん。もーツ、よく〳〵見ると、それア自分の家でなく、全く隣りの家であつた。『ウワーツ、これア……修繕料が……ウーン』

東京から

中島司

昭和四年十一月三十日朝鮮博覽會京城協賛會長松井房治郎氏が東京會舘に午餐會を備ほして、朝鮮關係の主なる官民有力者を招待した。中央朝鮮協會の阪谷會長が當日は松井氏の介添役といつた調子で何くれとなく世話をされ、食卓で松井氏から協賛會に對する諸氏の同情と援助とを感謝の挨拶があり、それを承けて阪谷男が先づ自から所感を述べて列席の松田拓相水野錬太郎氏、清浦伯の順に指名し、テーブルスピーチを囑望された。

× ×

三氏交々起つて夫々感想を述べられたが、水野氏と清浦伯の演說は時節柄列席者の耳聽を聳だてしむるものがあつた。水野氏は十月中旬京城に行つて詳かに博覽會を見、合邦以來二十年の間に朝鮮の物質的進歩が眞に顯著なるを痛感したが、親しく會つた朝鮮人の忌憚なき意見に徵しても、今日の朝鮮は精神的方面の開發に於遺て憾少からず、依て今後の朝鮮開發は物質的方面のそれも急務ながら、精神的方面のそれは一層緊要であると云ふ意味を述べ、終りに松田拓相の方を向いて『我れ我れは其の立場の如何に拘らず朝鮮の事は相共に心配して行きたい』と言はれた。

× ×

清浦伯も水野氏の意見に同感を表し、自分も博覽會を見て後金剛山探勝旁々江原道方面の田舍を歩いたが、地方民の生活狀態はまことに氣の毒なものであつた。合併茲に廿年、しかも　明治大帝の宏謨たる一視同仁といふ事が、やゝもすると近來疎略にされるのは遺憾に堪へない。殊に朝鮮總督といふものは　陛下の御名代たる重い地位である。それが政黨内閣の更迭毎に動搖し更迭するのは、二千萬民心に及ぼす影響から考へても面白くない。況んや如何がはしい人物が此の重要なる總督の地位に据えられた如きは遺憾至極だとまで喝破された。あの溫厚な八十の老翁清浦伯の口から此の言を聽くのはよくよくの事であらう。丁度其の席には松田拓相も在り、よい參考となつたであらう。

× ×

主人役松井府尹の如きは意外の『收穫』に且つ喜び且つ驚ろき、『僕としてこんな盛んなお歴々を揃へた會を、又と開くことができるかしらん』と、頗る感激の態であつた。

別天地小景

異名同質の病症である事を茲に確かめて同日午後十時發列車にて鄉里に向ひました。

別天地小景

横山藤三郎
（西大門刑務所）

……結核性の疾患らしかつた……餘程健康を害して居た樣に思ふ、デモ思想的には餘程の變化を現はし居つたテ……そふダ滿期の時の感想錄には……航海者にホームスピードがあり吾等にホーメンスピードがあるつてな事を書いて居たツケ……ソレデ居て放免の時には……別に嬉しくも思はぬとか……歸鄕することは寧ろ甚しく不安を感ずるとか言つて居たものダ……マー讀んで見ることにしよふ……思想の方面まで觸れてるのか知らん（手紙は原文のまゝ）

拜啓

凉氣日增に高い晩秋の候となりました。釋免既に三旬となりましたが御無沙汰に打過ぎまして誠に恥かしう御座います。先生には御尊體愈御淸穆御健勝で御座いますか。

所內の近況殊の外に變つた事も御坐いませぬか、乍不及御祈りの心持ちで思を北の方へ走らせて居ります。

先月〇日久し振りで獄外の顏を自由に振り上げながら迎へに來た者等の案內に依つて市內〇〇洞のサル旅館に立ち寄りました當日午前中城大附屬病院の〇〇博士の診斷を受けました處肺浸潤、氣管支カタールであると言ひ渡され一枚の處方箋を手にして宿へ戻り同夜一泊、翌日漢方醫師を尋ね診斷を受けましたが異名同質の病症である事を茲に確かめて同日午後十時發列車にて鄕里に向ひました。

實に五箇星霜といふ時間は生にとつて長くも短くもありました沿道の山色を眺める氣力も無く呆然として何を爲す者かを知らぬうちに東天凉紅と明けて來た際、着いた驛は大邱でありました。汽車旅行も今更不馴になつて來たかの感じが致しました。

街頭の樣子も隔世の感が致します內に、古巢の戶口へと歩みを運びました時、私は罪人である……と云ふショックが殆ど全く否な本能的に私の胸を電擊致しました。獄中に呻吟する人の子ほど幸ひなるものは御座いませぬでしやう。獄中に子孫の呻吟するのを惱み居る親ほど不幸なる者が世に何處にあり得ましやふか。見るからに氣の毒な、イヤどう申したら此の心持ちを充分に表白致しましやうか。母の樣子は、面影は、一大命令、絕對至上の命令を直感的に此のナラズ漢の胸に吹込みました。

數刻にして親類近隣の來到、皆な顏を合せました。惡魔の樣な强情を容色に現はして悲絕な此の場面をどうかして避けやうと私はキバツテは咽び、盜み泣いては又泰然たる顏付きを無理に强ひました。けれども如何にしましても泣かされざるを得なかつたのです。入所當初の生の容色と今のそれとは無論變りがありましやうが、自分の眼に映る母や兄弟の異樣なことには一種の恐怖を感じないことは出來ぬのでありました。

數日後、服役中の家の經過を父より承りましたら、母は每夜嚴

京城雜筆

△九月の初めに滿期になつた辛昔周（假名）からコンナ手紙を寄越して來ました……。

〇ハア……大邱から寄越して居ますネ……隨分手數をかけた男でしたが……ドンナことを書いて居ますか……其の後病氣はドンナですかネ——……。

△……手紙の模樣では病氣も全快はして居ない樣です……が大して惡くも無い樣です。隨分長く書いて居ますから後で御ユックリ御覽を願ひます……私は返事を出して遣り度いと思ひますが……。

〇……後とで讀んで見ませふ。ソレカラ御相談致しませふ……。

△所長さんからも極く簡單に御返事を出して戴いたらと思ひますが……何んなら私の返事と一緒に封入しても良いと思ひますが…。

〇そうですか……兎に角讀んで見ませふ……後とで私の方から御相談致します……。

△ソレデはどふぞ……。

× ×

〇……アッ……しまつたことをした……此の手紙を讀んでソシテ敎務主任と相談せねばならぬところだつた……スッカリ失念してたんだ……マテ〳〵……大分長く書いたもんだ……コーツと此の男は三年の刑期だつたかナ……思想犯の仲間の中でも隨分尖端を走つて居た方だ……長いこと病舍にも居つて醫務係でも手古摺つたもんだ

× ×

三氏交々起つて夫々感想を述べたが、地方民の生活狀態はまことに氣の毒なものであつた。合併山擧勝男氏は『地方民の生活狀態はまるかしらん』と、頗る感激の態であつた。

京城雜筆

冬酷寒の慘ましい中をも齊戒沐浴天に祈禱を捧げたり、老衰白髮その身を自由に持ち運ぶ力なきを顧みないで此のナラズ漢の命を天に祈つたり不飲絶食數日煩惱焦慮、年また年、月また月涙無しに暮れた日が無かつたとのことでありました。

獄中に呻吟する人の子は幸ひでありました、幾度か危ない病機に接しました、それは死線でありました。自身も獄中の鬼になると思ひましたのも二三回ではありません。世間でも斯く噂されて居たと聞きました。それは百人の中九十人までがそうでした。況んや親の心中如何程の苦しみでありましたことでしやう。

在獄苦勞の諸君にして斯かる親を持たぬ者は無いことでありましやうが、何卒悴の命丈けはと祈り自分は凍えて居りながら乞人、病老、貧乏者等に何分の着古しを與へました。自分も朝夕の薪水の獸に苦しみながら饑えた者に與へることを止めませんでした。それは供養の心理であります。實行であります。求めぬ哀れな者に與へました。私はも一つの事に達着します。すべての殺生禁斷を實行して居ります。母も父も。ネズミが群をなして家中を飛び歩きます。今も晝も、夜も。

それは佛敎も基督敎も哲學も眞理も敎へたことではありませんまた現代科學の理論に合致しやうがしまいが、それはどうでも宜しいのであります。セガレの命を延ばさんが爲めの殺生禁斷……親で無ければ憶測だに出來ぬ事績でありましやう。

しやう、親を養ひそれに忠實にして大自然を樂しみ藝術を玩弄しつゝ餘裕あれば畜へと備へとする。此の隷の理想を一人で實

秋風賦

浅井佐一郎（岡崎町）

窓の月

さ夜ふけてさやにさしくる窓の月も物思ふ身にはさびしかりける

月前菊

秋の夜のさやけき月にてらされて眞垣の雪と見ゆる白菊

秋時雨

秋を惜しむ岡邊の紅葉もかつちりてひとむら雪の松にしくるゝ

秋祝

白露のおくての稻もみのりして豐年祝ふ高麗の民草

紅葉

もみぢ葉のから紅は中々に春の錦に色まさりけり

擣衣

小夜ふけてさびしさひゝく草枕砧の音に夢も結ばず

時事吟

移り行く世のさまあはれ何故に恥知る人の斯くも少なき

母は裸足で庭を往來しました、憐れな老婆に脫いで與へたと聞きました。奇しくも命を續けて……否な延ばしたのは……ゲニ如上の報ひであつたのでありましやう……。

犯しました法罪は（假令特殊人間として異端者として輕視されますることは當然とは申しながら）自已の策戰、行爲の如何に依りまして樂しく淨く拭ひ去ることの出來るものであると思ひます。是れ限り拭ひ去ることの出來ぬ親への罪は誰樣に相談して宜しいのでありますか。私も罪人であります、然しどうした

ら善いやら、胸が晴れない許りで御座います。

隨分身分不相應な贅澤も敢へてやりました、隨分身分を辨まへざる勝手を、而も囹圄の身で要望もしました、それは夢であつたのでした。虛榮心と、名譽心を盛んに頭から出しながら沒頭出頭して居つたのでした、苦笑に堪へませぬ。

××××の事實の定義を刑務所で覺へました、私は××××を××ません、そうして所謂世人の××××の××××××日までは自然を享樂し、藝術を享樂する內に努めて金を蓄めま

機を運命の神が此のナラズ漢に與へたことと存じます。

羈放前日所長殿の御訓示難有く存じます、敎務室の先生方誠々

先は歸鄉後の御一報まで　頓首

再拜

大邱府〇〇町〇十〇番地

岸書記

宜しいのであります。セガレの命を延ばさんが爲めの殺生禁斷……親で無ければ憎測だに出來ぬ事續でありましやう。

京城雜筆

しやう、親を養ひそれに忠實にして大自然を樂しみ藝術を玩弄しつゝ餘裕あれば畜へと備へとする。此の樣の理想を一人で實行しつゝ悠然として人生の最大未決の死後如何の問題に鎖暇の韻律を見出すと云ふ、是れが××××に負傷した私の出獄後の目論みであります。

先生樣には此樣な書生にも光訓明敎を惜まないで下さい。山色も入獄前と雲壤の變りでありますす、人心も雲壤の差があります生の人生觀も充實へ、充實へと進まうとモガキます、忠實な指導者、懷かしい程の指導者、相談處が何處に御座りましやう。父は酒飲みを止めました、庶弟等も二十前後の者が二人も居りますが、前科者と云ふことだけ世間の噂さから恕して貰へますなら寧ろ入獄は幸ひへの一大轉機を運命の神が此のナラズ漢に與へたことと存じます。

羈放前日所長殿の御訓示難有く存じます、敎務室の先生方益々御健勝の程遠く居ながら御祈り致します。

當地の保護團體○○會へも參りませんでしたが、何しろ療病が思はしく行かぬ爲め一切の外出を致さぬ樣にと醫師の指令がある程で控へて居ります。近日中病勢を見計らひ御アイサツに參上仕るべく考へて居ります。今後の進退居止すべて會の相談指導を煩はし度い心算に御座います。ついては先生樣にも同會の先生方へ宜しく御意見下されば尙ほ幸ひと存じます。

餘りのくど〳〵しき手紙、誠に御迷惑樣で御座いました、では天候不順の折柄御尊體御大切に益々御健勝を御祈り申上ます、

先は歸鄕後の御一報まで　頓首再拜

大邱府○○町○十○番地

辛昔周拜

平塚龍馴敎務主任殿

○……フムー……成る程ナー……あすは早速敎務主任に相談して返事をやることにせねばならぬ……彼の病氣は中々癒らぬダロー……頭の良い奴が思想的に傾斜する……父兄が駄目だ……敎育が駄目だ……學校の先生が駄目だ……靑年に對して權威ある指導者が居ない……政治家が駄目だ……文學がいけない……智識が邪魔だ……生活の不安が良くない……社會が……オツト待て〳〵、矢ッ張り輕躁過激の個性がいけない。

× ×

○……辛昔周からの手紙は念入に讀みましたヨ……。

△ハア……御覽になりましたか……。

○あなたの御考へ通り一ッ返事を出してやつて下さい……御返事が出來ましたら、發送前に一度私に見せて下さい……ソレカラ私もチョツトした手紙を書き度いと思ひます。

△私は起案を濟まして居ますから御覽を願ひます。ソシテ所長さんのが出來ましたら一緒に私の方で發送致しませふ……。

○……デハ見せて貰ひますか……あなたのを見てから私も書くことにしませふ……

× ×

○……彼は五年振り古巢に歸つたやふなことを書いてたが……三年の刑が二年半足らずに減刑されてるじやないか……イヤ〳〵未決の時代からなら足かけ五年位にはなるかも知れない……。

近詠

○　新田如氷

一つ家の瓠色づき色づかぬ
その中の一つは黃なる長瓠
屋根の端にいましめられて大瓠
門前に擴ごる闇や遠砧
高粱の風になびけばそばの花

○　新田時子

地をすつて菊よごれなき風雨かな
白菊に結ひ手紙を添へにけり
客を待つ菊の花壇を一めぐり
白菊にたゆることなき泊り客
耳遠き女あろじや菊の宿

京城雜筆

○……ハハア……教務主任の返事か大いに書いたナー……先づこれを讀んで見たら……自分のも要領善く書けるかも知れん……エーット……。

復啓　日增しに寒氣相加はり候頃と相成候。お別れしてより早や二タ月と相成候が其後の君の御健康は如何に候や御尋ね申候君の出所當時の模樣、歸鄉途中の感想、さては慈々着鄉して久方振に父母を始め親戚故舊の人々に對面せられたる場面等、眼の前に見るが如く感慨無量の御思念等委細諒解忖察致し居候。已れが老い行くを忘れたる慈母の子に對する遣る瀨無き命がけの祈念、其の眞狀を聞くに及んでは何人も涙無き能はず候。慈母の恩を解せざる在所者にも他日機を見て此點を語り諭へ度存じ居候。

佛敎は夙に殺生を禁斷すれ共多くの人は之を守ること能はざる次第に御座候、總ての生類即衆生は一つとして其の生命を愛せざるは無し（中略）

御母上の誠意は自然に佛心にかない、君の在所中にも家鄉にては美はしき同情犧牲の行ひが現はれ居たるものと存ぜられ申候胸に母上の御慈愛を深く感受せられし君の今後に殘る生涯は、偏へに御兩親の意に叶ふ底の方針を取つて進まるるを最も大切のことと存じ候。

健康御恢復の上は、貴地の保護會に身上御相談に赴かるるも宜しかるべく尙精神的安心立命の件に關しては貴地の東本願寺主任〇〇〇氏を訪問せられて家庭問題、人生問題等につき質疑敎聞せらるゝ樣致し度く若し君にして其意あらは別に同氏に紹介狀發送致し候ても宜しく候、時節柄折角御養生祈り上げ候。

匆々不盡

平塚龍馴

辛昔周殿

×　×

○……結構々々……ところで拙者の返事イヤ手紙……だが……簡單に要領よく……中々困難な事業だ……拜啓とやるか……啓上とやるか……ソンナことはドウでも宜しい……エーッと……。

平塚師宛御手紙は私も熟讀しました。平塚師と共に早やくお返事の筈でしたが多忙の爲め今日迄延引して仕舞ひました。當年七十八歳の老母と七人の兒供を持つて居る私としては、お手紙に書き現はしてあることもまた書き現はし難き人情の悶着も總てよく諒解が出來る樣に思つて居ます。

兎に角精々健康の御回復に留意あらんことを切望致します。

人間と稱する動物の意識の中から野心と稱する一と塊りを取り除くことが出來たならば、今日××××だの××××だのと名乘つて纖細なる感傷的の理論の遊戯に沒頭しつゝある思想の類よりも遙かに强剛の思想が自然に發現し得る譯ではあるまいか。

野心と謂ふものを取り除かんとするの努力……それは宗敎の分野に於て或る程度迄可能ではあるまいかと謂つた樣な氣持のする努力……は人間と言ふものの存續する限り努力せねばならぬ努力では無いでしよふか。

理想が其の儘に人間の社會に行はれた場合を胸中に畫くと共に之を潰すべき又は之を損ふべき何ものも發現せない場合を併せて胸中に畫くことが出來たならば、其の人は其の懷抱する主義が何んであらふとも、之を××××はあるまいと思はれます。

××××の××××××××××××、自然を享樂し、藝術を賞賛しつゝ、努めて金を蓄め、親を養ひ、已れに忠實に、ソシテ餘裕あれば貯へと備へとすることは、私にも亦衷心の冀望であることを申添へて置きます。

平塚師の御手紙を御熟讀あらんことを切望致します。　匆々

昭和四年〇月〇〇日

姓名

辛昔周殿

○……どうもマヅイなー……ダガ忙しくて叶はん……マー是で良いとして置くサ。（了）

◈筆のしづく

三木一彦

○府議の中で、京城府史の編纂を始めてから三四年になり、一個年の費用三萬圓宛を支出してゐる。

○府議の中で、こんな仕事の判るのは、藤村忠助氏唯だ一人。ところで、仕事の經過を見ると、實に漠然、不統一なもので、おまけに、プランの建て方も、頗る面白くない。先生頻に慨嘆して、『どうもお役所の仕事といふものはナー。それに第一、いつ出來るのか方圖が判らない』

の惡かつた時、その日は一日、不愉快で過ごす。

火を焚く趣味

柄澤四郎
（京城新聞社）

『娯樂』と『趣味』は全く壁一重の背中合せであるが、必ずしも同一ではない。

娯樂は一定の形式であり、樣式が備はつてゐる。素より趣味を持たなくては、娯樂を娯樂とすることは出事ぬが、趣味は一定の娯樂にのみ湧く可きものとは限らぬ。

娯樂が相對性ならば、趣味は絶對性だ。

×

閑話休題。

私はその娯樂の持合せの乏しいことに、自分乍ら閉口する。

先づ碁將棋を第一に、バタ臭い處で珠突、最近流行の麻雀なんどは一向に不調法な方だ。運動競技も野球、テニスに至るまで外來スポーツには、妙に反感を持ちたくなる。ましてや特權階級の腹へらしであるゴルフに至つては、憎惡の念の燃ゆる位だ。

と言つても今でこそ自然慶業の態だが、相撲は中學時代に旺んに遣つた。大弓には今尙ほ自信がある。

トランプのツー、テン、ヅヤックには相當の興も乘るが、これとて一年に數へる程しかカードは手にしない。

×

酒を飲むのが、果して娯樂や趣味であるか頗る疑はしいが、酒は飲むことを決してお辭退しない方だ。でも此頃では議論を看に酒を飲むのも馬鹿らしくなつて、生なかの相手より獨りで盃に親しんでゐた方が興が湧く。

煙草は先づ煙の澤山出るのが面白くてプカ〳〵機械的に、ふかしてゐさえすれば得心のゆく方だから、一向に氣の利いた娯樂らしいものを持合せぬ。

×

處が妙に火を燃やし、物を焚くことに興味がある。强ひて言へば火焚き趣味（?）だ。

少し早目に歸宅でもして、而も風呂がちやんと沸いてゐると、輕い失望を感じ、今這入つてゐる家に引越してから二多を過すが、女中のゐる時でも、これは僕の好きで遣るんだから……と溫突焚きは人手を煩はしたことがない。

宴會歸りで目許、足許の少々、怪しくなつた時、溫突焚口で松薪の燃ゆる音をうつつに居眠りの藝當を遣つたことも一再でない。

×

同じ火を燃くのでも、風呂と溫突では調子も趣きも違ふ。

酒で言へば、風呂焚きは熱燗を而もコップで一氣に遣るようなもので、溫突焚きはチビ〳〵遣る淺酌低唱の趣味に一致する。

あり合せの燃料を而も自分で考へた方法で溫突を焚き、程よい火廻りになつた時なんぞは、言ふ可からざる快感を覺ゆるが、自分の工夫の失敗した時、火廻りの調子の惡かつた時、その日は一日、不愉快で過ごす。

夕方、溫突を焚く時、その日、何か氣に喰はぬことにでもぶつかつて氣がイラ〳〵でもしてゐると妙に氣に適つた溫突焚きが出來ぬ

×

焚く可き工夫が物理の燃燒の理に一致し、而も無念無想の心境になつた時が、何と言つても一番心持よく火の焚ける時だ。

一面から言ふと、風呂焚きや溫突焚きは、隨分非科學的な物の焚き方であり、台所の瓦斯コンロ……殊に自分の家では獨逸のユンケル會社で拵へた最新科學的な瓦斯コンロを使つてゐる……なんかは科學的な火の扱ひ方ではあるが、火の扱い方を趣味的に看ると同じことである。

話は些さか餘談に亘るが、そのユンケル瓦斯コンロは、燃燒する時に空氣の混合作用で隨分音がするので、どうしたら音を無くし、而も空氣の混合を調節し、燃燒を完全にすることが出來るかと、狹い台所に一日頑張つて成功した時の悦しさは、今尙ほ忘れることが出來ぬ。

×

よく人が、一口に風焚呂きか！と卑下し、誰れにでも出來る仕事のように言ふが、風呂焚きは斷じて湯を沸かし、水を熱湯にする丈が究極の目的でないだけに却々、工夫のいる仕事だ。

種々と風呂釜の構造にもよるが先づ普通の五衞門風呂に、最初七分通りの水を張り、石炭なり薪なりを焚いて、一度も風呂の中に手を入れて湯加減をみずに、焚いた燃料の加減、火の落ちる調子だけで、もう宜からうと水を一杯にし

京城雜筆

て『風呂が沸いたぞ！』と言つて誰れにでも這入り得る湯加減にし得る自信のある者は澤山はゐまい

×

火を焚くことに興味を持つ以上どうしても風呂にせよストーブにせよ燃燒器具と、石炭にせよ薪にせよ燃燒に對する研究に、興味を持つことになつた。

火を焚くことに就ての專門家である內藤博士（游）から自分が、直接に聞いた話しにヒントを得て物置の隅に雨に打れた儘で積重ねてあつた炭俵を、小さく手頃に切つたのに水を打つて、溫突の火の盛んに燃えてゐる時に炎を被ふように乘せて、焚き口の上ばかり熱し易くなり勝な溫突の隅々まで程よく火氣を廻らせ、而も火持ちを長くすることに成功した時の如き世界的大發明でもしたように得意になつて、家內に冷かされたりしたこともある。

だが時によると、ストーブの傍に居て火焚き趣味の突發的に昂じた揚句、いじり廻はして却つて火を消し、部屋中を灰だらけにして小言を頂戴するような家庭笑話劇も演ずる。

可消幻業長道心

山本吉久（南大門小學校）

諸慾に狂奔し功名利達の奴隷となつて其日を過してゐるのが一般の生活樣相ではあるまいか。近來の新聞記事を見ると日々此種の事實で滿載され、思に餘る樣な事も隨分多い樣である。實に世の實相は將に幻業の展覽會であるといひたい氣がする。大臣宰相となる事は勿論、代議士となつて議政壇上政策を論ずるのも男子の本懷に相違はないが代議士になるにも相當の金がいる。況んや一黨の領袖となるには幾多の乾兒が居なくちやなれぬ。乾兒を有つには先づ選擧費を提供せねばならぬ。多くの金を用いて多くの乾兒を有つものが幅のきく領袖であつて大臣のお株を奪ち得るものゝ樣である。金のなる木を有たぬ彼人達には、又何とかカラクリの必要が起り政商と結托して贈收賄の大疑獄を生むのである。檢事の起訴を俟たずとも世の嚴肅なる批判を受け、政治家の生命を絶たるゝに至つて始めて索然たるものあるも造惡の業報として致し方はないのである。殊に物質を以て購ひ難き崇高なる○○を賣つて其の一部たりとも靑樓に費消したと云ふに至つてはその罪科將に死に値ゐすべく沙汰の限りである。

之等の問題は現時の社會的、政治的事實で天下公知の事實であるから茲に引例したに過ぎないが、一生造惡の吾人の生活は凡そ斯の如きものではあるまいか。口に人を詈り身に惡事を働き心に邪念存するあり、之又幻業の連鎖劇であると云つても過言ではあるまい。

借問す汝は自己を欺いた事はないか、妻は……人は……神は……。然りと答へ得るものが、幾人ゐるだらふか。誰にも正邪善惡を判斷する道心の持合せはあるが、その道心の命ずるが儘の言行が出來ない所に幻業生活の凡夫に惰在するのである。世に論語讀みの論語知らずといふのがある。蓮如上人の言葉には八萬の法藏を知るといふも後世を知らざるを愚者とすといつてゐる。何事も知る事は易いが知つただけでは價値はない。知つた事實によつて權威ある道心を啓培して幻業を轉回指導せしむることが大切である。そして眞人の生活が生れ向上の一途に光明を認むるに至るのである。

◈南山町閑話

漢江漁郎

○京城の何券といふのか知らんが、マダ若い藝妓で、染葉といふのがある。

○『君は、何といふ名だネ』と聞くと、『ハイ、猥談博士と人が申します』

○『フーン、どの位造詣があるのかネ』と問ふと、『さうネ、一タワタイが猥論を演述すると、矢鍋さん……アノ殖銀の矢鍋さんがウーン、參つた〳〵、もう澤山といつて遁げやはるし、若しそれ東拓の澤田はんに至つては、ボロッとお盃を落しやはつて、アラ〳〵ほんまやワ』

そして暮れの三十日頃奈良の町の床屋へも行き風呂へも入つて大晦

年の暮

梶村正義
（城大醫學部）

春を迎えるといふことは物心附いた子供の日から何日になつても嬉しい事である。『もう幾つ寢たらお正月だ』と敎えられて毎夜毎夜眠つては翌日起き出る事がどれ程樂しみだつたか。二三日分一緒に寢て早くお正月が來ればよい位思つた事もあつた。

子供の時殊に嬉れしかつたのは餅搗である。餅屋は時に夜半に來る事がある。

今夜は來そうだといふ宵『餅屋が來れば直ぐに起してよ』と幾度も幾度もお母樣に賴んで置いて寢床に入つたものだ。

さあ來たとなると着物を厚く着込んでお勝手の間で待つて居る。大きな釜に湯を沸かして餅米をふかし、それを目の前で大きな臼に搗くのである。ホコ〳〵とした大きな餅が搗ける。それを切りちぎつて丸め小餅にするのである。此んな事が一段落濟むと夜は白々と明けかける。それは小供心にも實に愉快であつた。

私は中學時代から今より三年前迄は神戸に住んだ。餅搗のうれしさにはさまで興味は引かなくも歳暮は何となく氣が引きしまつて快い。クリスマスには敎會でよく友達と遊んだものだ。廿四日頃より廿六日頃迄は毎日何處かにクリスマス祝會に出る。之が終ると愈々暮れである。賀狀の表紙を二百枚許り書かされて困たものだつた。

大晦日の夜は靜かで殊に愉快だつた。

家の內の用事を皆濟ませて九時頃から湊川新開地や元町通へブラリと散歩に出るのも面白い。大きな商店等は早や門戸を鎖し幕等を準備して居る。辻の軒下に〆繩や門松を賣つて居る露店は淋しそうである。往來の人々は皆忙しそうである。自轉車を馳せて收金に廻る小僧、春の支度物を買ひ集めて行く安月給の夫婦連、此等の世相を見物しながらブラックのは實に愉快だ。本屋の棚は何日に變らず明るい。店を覗くと新年の繪端書や賀詞刷の賣殘りが並んで居る。手頃な當用日記を買求めて、ブラブラ山手の宅に歸つて行く。家では晦日そばが出來て居る。此れから十二時までが最も靜かな時である。こんな時はたいてい一年回顧の日記をつける。

いろんな追想に耽つてゐると除夜の鐘が鳴り出す。

森然たる夜空に響く鐘の音は古い年を葬つて了ふ樣なあはれに涙ぐましくなる。今暫くで新しい年を迎えるかと思ふと去り逝く古い年の思ひ出の數々が走馬燈の樣に寫中を過ぎて行く。さてはその內へ出て來る彼の顏や彼女の姿等がなつかしく浮んで來る。快い詩的なのは除夜の靜間である。

友人が奈良の高畑に居て年の暮れになると私は奈良へ出かけた。

そして暮れの三十日頃奈良の町の床屋へも行き風呂へも入つて大晦日の宵に間に合ふ樣に神戸の宅へ歸つた。

奈良の冬、殊に高畑邊より安達が原の谷間へかけて散歩するのはほんとに好きである。

深い空の色が春日山の上に冴え切つて居る。時々雲の行來のせわしい空に變る。その空の反映を受けた枯草の丘、葉端を脫いだ濡木雜木、殊に奈良朝時代の公家さんの屋敷跡だといふ崩れかけた土塀にもたれてジッと冬枯れの立樹を眺めて居る。諸ては何とも云えない詩である。こんな時群を離れた春日の鹿が、ヒョッコリ顏でも出したなら私はどんなに親しく思つたか。

私は年の暮れになると奈良の空を想ふ。奈良の冬は私の追想の裡にあつて詩の國である。

何日か又行つて枯草の奈良を獨り歩いて見たい。胸一杯にあこがれを包み切つて。詩の國を夢見る青春のあふるる心を抱いて。

私は歳毎に待ち望むであらう。此の俗事多端なる歳暮を奈良に避けていと靜かにいと嚴肅に送る日の早からん事を。

謹みて新年を
賀し奉る
昭和五年一月元旦
京城雜筆社
社員一同

品川雜記

中島司

（中央朝鮮協會）

昭和五年の時勢を思ふ

神武紀元二千五百九十年、西暦千九百三十年、と半端なしのかつぎりした數字だ。昭和五年は何となくきまりのよい年のやうで、五といふ數も緣起がよい。日本もそろそろ芽が吹いてよい頃だ。

× ×

やれ政治國難だ、やれ經濟國難だ、やれ思想國難だと、何時まで理屈を捏ねて居ても始まらない。あきらめて、思ひ切て、決心して覺悟して、さうして斷然勇往邁進するが本筋だ。

× ×

暗いのが何より惡い。どんよりなのが一とういけない。明るくすることだ、判きりさせることだ、それはすべての社會に於てだ。さうしてそれが何よりの急務だ。陰暗だから病菌が跋扈する。曖昧だから擅蔓があり躊躇がある。明るく正しく平らかにし、さうして照明を強くする、これが昭和五年のモットーたらねばならぬ。

× ×

富者は少數で大衆は貧しい。富者の數を殖やすことよりも貧困者を少なからしめ、食ふに困らぬ大衆を作り成すことが勿論の急務だ有閑階級をなくして、すべてが働らく、働らく者に飢なからしめよそれが社會の病患を去り健全ならしむる第一義だ。

× ×

不勞所得で悠々閑々と贅澤三昧に日を送る者のある一方には、働いても稼いでも追つつかぬ者がある。緊縮と謂ひ節約と謂ふ。それも宜しい。だが併し、緊縮も節約も此上仕樣のない生活者が溢れて居るではないか。それでも尙且つ緊縮せよ節約せよと言ふのは、つまり生命の緊縮節約を强要するに外ならぬ。

× ×

必要な物資は滿足するだけ消費し、樂しく愉快に人生を過ごすのが、文化生活の目的だ。大臣だらうが、金持ちだらうが、重役だらうか、月給取だらうが、勞働者だらうか、お百姓だらうが、大道商人だらうが、地位に高下の差なく職に貴賤の別なく、各々其の分に應じて生活を享樂するのが人間社會の常道でなければ嘘だ。

× ×

經濟界の立て直しのために、貧しい人が血と汗で貯めたものを惜しげもなく『國』へ獻金する。吾人は其の純情に泣かされる一方には、指導的立場に在るべき政治家等が國を賣つて不正の金を懷ろにねぢ込むを見る。こんな世相のうちに思想の善導醇化など出來るものではない。源濁りて末清きはなし。我が國に於て先づ矯正すべきは所謂上層階級者の根性だ。其日暮らしの人間には殆ど明日を慮るの餘裕すらないのだ。寸前尺歩の先きしか考ふることはできないのだ。高遠の理想といふが如きは、物質的に精神的に餘裕ある者にし抱き得べきであらう。

× ×

今日の時勢は政治家の自覺と政治界の淨化より急なるはなし。金を持たない政治家でも、金を持つてるが如くに金を使はねば羽振りがきかないといふ所に政治家の墮落と政界の腐敗が醱酵するのだ。政界が腐敗して居るから、自づと實業界なども毒素をもつやうになるのだ。故に先づ政界の淨化が急務となつて來る。かく觀察するのは間違ひであらうか、否か。

× ×

新年勿々議論も聊か野暮だらうから餘り多く理屈は申すまい。兎にも角にも、明るくて正しい世相を打開すべく、如何なる苦痛をも忍んで、我等は銘々に努むると同時に、お互に協力しなければならぬ。それが昭和五年の急務であると信ずる。

◈俳壇風聞記

三木一彦

○覆審法院の根本判事は、青洞と號し、俳諧をやる。

○聊か舊派なれども、その道では、明星の樣に、仰がれてゐる。

○夜中などは、求道者踵を接し師を圍んで、淸談刻の移るを覺えず。宛然當年の芭蕉庵その儘。

○門弟の一人曰く、『アノ人は生れながらの俳人、ソモ〳〵裁判官とは、無念で御座る』

トルストイ原著

だんだん谷合にはいり込んだ。が霧は增々濃く低くなつた。星の外には何も見えなかつた。ユリアス

トルストイ原著 高架索の囚人（その一節）

瀬野馬熊譯
（朝鮮史編修會）

十一

ユリアヌは段々穴を堀り擴げてコスチルヌがそれを通りぬけ得る程の大さにした。それから彼は村中の人々が全く眠りに就いてしまう迄其の儘坐つて待つて居た。段々夜が靜かになつて何の物音も聞えなくなるや否や、ユリアヌが先づ其穴を拔け出て小屋を出てしまつた。續いてコスチルヌも這い出た。所が其の折彼は壁から拔けかゝつて居る石にぶつつかつたので石は大きな音をして墜落した。とアブダルの飼犬が之を聞き付けて直に合圖をしたので、村中の外の犬共も一齊に吠え出した。ユリアヌはこんなことが起るかも知れんと豫想して居たので、彼は其の用心をして居た。彼は一寸した親切をこの犬共に示して親しくなつて居た。それで彼は犬共の騷ぎ立つのを見るや直ぐに低い口笛を吹いて菓子の數片を彼に投げ與へた。此の技巧は忽ち彼等を鎭めてしまつた。

アブダルは犬の吠へるのを聞いたが寢床に横はつた儘起きあがりもしなかつた。ユリアヌは犬の耳を靜に撫でゝやつたが、そうすると犬共は其友達の脚に體をこ摺り付けて其の尾を掉つた。逃走者等は其處に座つて一二分間靜まるのを待つて居た。其のうちに段々世間は靜かになつて羊の群が小屋の中で鼻をならすのと、はるか向ふの石の上を流るゝ小川のせゝらぎの外は何も聞えなくなつた。其の夜は大そう暗い晩で、空に躍く星も非常に高く見えた。新月は山の後の方へ沈みかゝり、霧はミルクの樣に白く谷あいを覆うてゐた。ユリアヌは立ち上つてコスチルヌに云つた。『さあ出かけやう』、彼等は愈々出かけた。未だ二三歩も踏み出さぬ前に附近の寺院（回々敎の）から僧侶達の叫ぶ聲が聞えた。それは村の人々が何れも直ぐに寺院に赴かねばならぬと云ふ事であつた。逃走者等は又留まつて壁の根元の方へ座つた。永い間彼等は此の位置に隱れて信徒共が其處を通り過ぎるりを待つてゐた其の内に村落はまた靜かに靜かになつた。

彼等は考へた。さあもう一度やつて見やう、神樣が吾々を助けて下さるに相違ない。彼等は又出かけた。そして百姓家の庭と思はれる所を通り拔けて小川の方へ行つてそれを渡つた。そしてそれからだんだん谷合にはいり込んだ。が霧は增々濃く低くなつた。星の外には何も見えなかつた。ユリアヌは此の星を案内者として彼の進行を續けた。空氣は新鮮で歩くに都合がよかつたが、逃走者は彼等の古い長靴に惱まされた。ユリアヌはこれを脫ぎすてゝ跣足のまゝで旅を續けた彼は石から石へ飛び渡つたが、其の間も決して星を見つめる事を忘れなかつた。コスチルヌは惱まし相に彼について來たがとう〳〵堪え兼ねて、ユリアヌに『そう早く歩くな、この破れた長靴が俺の足の皮をすつかりむいて痛くツて堪らぬ』、ユリアヌはこれに答へて言つた。『その靴を脫いでしまへ、靴は無い方が歩きよいぞ』、それでコスチルヌも長靴を脫ぎ棄てゝ跣足で歩き出した。けれども彼は以前より一層苦しくなつた。彼は石に躓づいては其の角で足を切り其の爲に彼の仲間の進行をも阻碍する事が少くなかつた。コスチルヌが不平を訴へる度毎にユリアヌは彼に諭した。『足を切つた位何んでもないぞ。若し我々が捕へられたら、どんな事が起るか推測がつく筈だ』、コスチルヌはこれに返答しなかつた。が歩くのが如何にも苦しそうだつた永い間彼等はそう言ふ具合で進んで行つたが、突然彼等は其の右手に當つて犬の吠へるのを聞いた。

ユリアヌは立止つて附近の小山に登り、あたりを見廻したが、俄に叫び出した『やあ道を違へたぞ俺達は餘り右の方へ來過ぎた。此處に他の部落がある。俺達は引返して左の方に見えるあの山を目あてに進まねばならぬ。そしたら其處に俺が目印にして置いた森があるに相違ない』

溫泉の話

棉引朝光
（城大醫學部）

溫泉に對しては東洋でも西洋でも隨分古くから神秘的に考へられて居ます。しかしその効果に就いては未だ純粹の科學的研究が完成してゐるとは言へません。唯だ多くは傳說的に言ひ傳へられて參りました。

或る溫泉の話に、片輪の犬や鳥が溫泉場に來て、數日の後には傷ついた足がのび、手がのびて建康になつて歸つた。又或人は關節の强直、或はリウマチス、乃至皮膚病等が全く全治して歸つた等々。

これらは總て奇蹟的に云はれて參りました。此の樣な事實は有つたでありませうが、今日の科學的進步に於てこれを分析し、或は其成分を研究し、又は溫度乃至理學的作用等の色々な意味をつけやうと考へられて居ますけれど、眞に其の効力の偉大なるを說明するには未だ不十分であります。

爲に溫泉に對しては昔から靈泉とか神泉等と云はれて東洋でも西洋でも同じ樣に思はれて居ます。

現今の科學に於て說明し得るだけ說明しようと思ひます。大體に於て分つたならば色々種類がありますけれど、一般に

局所作用　全身作用
副作用　後作用

の四つに分ち得ると思ひます。

局所作用

溫泉地の成分（鑛泉）が局部に作用するのは可なりに有効であります。ことに漫性炎症に對しては組織の緊張力を回復し、又は白血球の增加、局所の新陳代謝を高める作用あり、毎に皮膚を適度に刺戟し血行を盛んにする等、色々の効果が顯はれます。即ち結核性の關節炎、慢性のリウマチス、乃至關節硬直や、慢性炎症の爲に關節運動不能の場合等に對しては、隨分著しい効果の顯はれる事がある又神經痛、神經炎等でも其の急性の炎症が去つてしまうし、又外傷的打撲には常に其の効果が顯はれてまいります。皮膚病には隨分と効果の表はれる場合があつて特に黃硫を含む黃硫泉等が最も効果がある。其の選び方は醫師に相談するに於て初めて効果が著しいのである。

全身作用

全身作用としての溫泉療法は全身の生理的作用に大なる變化がないけれど、各臟器の間に一定の調和を得ず順調に行かない場合、これを正しくしやうとする妙味があります。で初め溫泉にはいつた時倦怠一時急病の如き事が起りますこれは所謂溫泉反應なるものである。だがこれを適度に繼續致しますと、精神爽快、食慾增進、安眠大小便利通の順調、血液の循環等が正しくなり、殊に一種の力なる內分泌を高めるが如き効果が現れる樣に思はれます。

副作用

溫泉にはいりまして所謂副作用なるものは目的以外に起る作用、俗に謂ふ溫泉に醉ふ事、これは一種不快なる興奮狀態で物事に醉つた心持によく似てゐます。これは第一浴に起る現象でこの病狀は速に無くなつて次には無害なる醉の狀態になる。殊に此の狀態は神經質の者に多く殊に炭酸水等の入つた場合起るものであります。

又屢々目眩ひ等を起す者があります。これは所謂興奮狀態で適度に用ひるべきである。而してこの興奮狀態に害ある病癲癇等には嚴重に禁ずべきであります。

後作用

溫泉に入浴して居る場合其の作用は滯在中大抵現はれますが必ずしもそうでない場合があります。爲に溫泉の効果を疑ふ場合もあります。溫泉療法を合理的に行つた場合數週間或は數ヶ月後に表はれて來る場合がある。又溫泉で直に効果が表はれず却つて數ヶ月後に表はれる事もあります。挫骨神經痛には入浴中左程効果がなくとも家に歸つた後段々良くなり半年後に健康になつた例もありました。

以上は大體溫泉のきゝめの話でありますが溫泉には種類の有る事は云ふ迄も無く溫度の關係、溫泉環境、周圍の狀況等は勿論、病に適應した溫泉の種類は先づ最初醫師に相談すべきものであります。外國等は熟練した溫泉醫なるものがあり指導して居ります。內地朝鮮なども漫然と浴客が經驗的に選ぶと謂ふ事よりも、もつと選擇したいものであります。

新羅榮華史觀
使を各道に派し遍く好配偶をお捜し申し、漸くにして牟婁部々相公の

新羅榮華史觀

廣江澤次郎
（大和町）

詩的光景

朝鮮民族の世界的誇であり、半嶋文化の淵源をなし、又精華であつた新羅の絢爛たる美術工藝及興味多き史蹟に憧憬する事多年！。併し昨秋十一月八日私は慶州に遊び、此欲求を滿足させた。此日天氣晴朗秋空一碧、實に申分なき、なごやかな秋景色であつた。

果樹の天國たる大邱や東村附近の林檎畑には、小枝が折れそうに豊熟した赤い可愛いリンゴが鈴のように成り下つて居る。四方の山々樹々は晩秋の彩り濃く、錦繡を裝いたるが如く、また野邊の彼所此所に、堆く積まれた稻束の黄ろい穗先きの蔭よりは、汽車の響に驚いて鶉が飛出すなど、總てが詩的であつた。古都遊覽にはお誂向で、モウ觀光氣分に醉ふた。汽車中では幻想と史觀が交錯し、新羅千年の興亡盛衰が繪卷物の如く眼前に展開し感興盡きぬ。

大祖禮讃

新羅とは新は德業日に新たに、羅は四方を網羅するの義にして、第二十二代智證王之れを國號とした。一說には廿三代法興王とも云ふ。夫れ迄は斯羅又は斯盧と稱した。

元來新羅は出雲族の殖民地であつた。而して其出雲族は太古の朝鮮民族であつたのだ。兩國の交通は迎日灣より鬱陵嶋を目標とし、隱岐を望みて出雲の松江灣に入つた。黑潮の關係を見るも成程と首肯される。

英邁なる新羅の始祖朴氏赫世居は、出雲族名門の遺裔と稱される五鳳元年甲子年十三月にして即位し、在位實に六十年。建國の鴻業燦々たるものあつた。隣邦邊境を窺ひしも赫世居の神德あるを聞いて還り、特に樂浪軍は新羅の民家が夜雨戸も閉めず、家財穀類も屋外に置いて平然たるを見て嘆賞し

『民相盜まざるは有道の國なり吾儕之れを襲へば盜に異るなし愧ぢざるを得ん哉』

と旗を卷いて退却した。

新羅千年の礎はこの太祖の德化に依つて、ゆるぎなく定まつた。高句麗の始祖朱蒙は、此燦世居治世第二十一年に崛起し、能く七百年榮えたるも遂に新羅に亡ぼされた。

御代萬歲

昔の王樣には神話傳說多く、頗る奇々怪々のもあるが、其邊はボーッとぼかして詮議の限に非ずだ併し體軀は隨分偉大であつたようだ。第四代脫解王は身長九尺七寸二十六代眞平王は治世五十三年に二十二代の智證王の身長は不詳なるが、御〇〇は壹尺五寸と云ふ古今未曾有の御方で嘉綱が無い。特使を各道に派し遍く好配偶をお搜し申し、漸くにして牟梁部々相公の娘七尺五寸と云ふ大女を發見し早速宮殿に迎へ王妃とした處が、王のご滿足は申す迄もなく群臣百官欣喜雀躍して御代萬歲を高唱祝福した。

王は頗る聰明英智の方であつて治蹟大に擧り、新羅統一の基礎は此時代になつたと云ふも過言で無い。國王の稱は從來居世干、次々雄、尼師今、麻立干の名を用いて居たが、智證王の御宇第四年新羅の國號を定め、新羅國王と稱し、法度を制し州郡縣を定め、國法を以て殉死も禁じた。

朝鮮には由來地震が無いと謂はれて居るが、智證王の十九年に大震があつて、家屋倒壞し、人畜の被害莫大と記錄に殘されて居る。

國威宣耀

廿三代法興王の時代となり官制益々備はり綱紀愈整ひ、治世二十六年間國威を顯耀する非常なものであつた。王治世第十五年に始まめて佛法が新羅に傳はつた。皇朝繼體天皇の御宇二十二年にして、神武紀元一一八八年、丁度昭和四年を距る千四百〇一年の昔である王の治世二十二年又大地震があり疫病も流行した。王は佛法を信仰する事篤く、末年剃髮し僧衣を着て法雲と號された。王妃も亦佛門に歸依し尼となられた。王室斯の如しであるから佛敎は益々振興し民衆も信仰に燃えた。

次の眞興王は十五歲で即位されたが、新羅中興の英傑であつた、國運益々暢達、內政愈々整備し、領土も擴大された。眞興王が國境巡視を紀念するため、其當時建設した巡視紀念碑が千三百年を經過

局所作用

溫泉地の成分（鑛泉）が局部に大小便利通の順調、血液の循環等が正しくなり、殊に一種の力なる內分泌を高めるが如き効果が現れ

鮑なども海鹽を海鹽を海鹽

ぶと謂ふ事よりも、もつと選擇したいものであります。

京城雜筆

した最近に發見された。楊州北漢山、慶南昌寧、咸南利原郡麟天嶺の連峰萬德山の頂上で、新羅、高句麗、百濟の三國鼎立時代にも、新羅の國威隆々たるものであつた事が想像される。

佛教も益々熾んとなり大伽藍が各所に建築された。眞興王の時代我欽明天皇の御宇十三年、百濟より佛像及經典を日本に送つたのである。

蛟龍雲雨

廿五代の智眞王は國を治むる事四年なりしが、淫蕩亂行にして絶世の美人桃花娘が人妻なるにも拘らず、熱烈なるモーションを懸けたが、貞淑なる桃花娘は肱鐵を喰はす等、民心漸やく王を離れんとしたが、禪讓に依つて事なきを得た。

第廿六代には身長十一尺の眞平王即位し、五十三年の治世に國政は全く恢復し、治蹟見るべきものがあつた。其次は神通力を有する智慧の化神とも云ふべき善德女王が即位された。女王は治世十六年にして眞德女王に讓位した。眞德女王の次が新羅統一の爀々たる偉業を後世に貽し給ひし大宗武烈王であつた。歴史家は武烈王と大忠臣金庾信を朝鮮千古の英傑として嘆賞措かない。

金庾信の妹は武烈王妃となり、武烈王の女は金庾信に嫁し、兩雄肝膽相照し、英智相應じ、神謀奇策克く三韓統一の大業を成し遂げた。武烈王と金庾信は車の双輪であり蛟龍雲雨であつた。

武烈王は金春秋と稱したが、若冠百濟や高句麗にも行き、具さに艱難を嘗め、日本にも渡殿して淹留數ヶ月、政治及社會狀態を研究し、更に唐にも行き、高宗皇帝にも謁して大陸政策を高唱する等、内外の形勢に通曉し、金庾信と協力一致、劃策奔走、遂に百濟を亡ぼし高句麗を平定した。

通商貿易

三韓統一の鴻業を翼賛せし忠誠無比の金庾信は武烈王と文武王の二代に仕へ、七十九歳にして昇天した。病篤しとの報に王は親から病床に見舞ひ、泣いて宣はく

『もし不諱の事あらば人民社稷を奈何せん?』

忠烈無双の重臣を失はれた王の胸中を察し涙數行!。興德王の時代金庾信に興武大王の諡號を追贈された。

三韓統一時代が國運の頂點であつた。航海貿易も大いに發達し、日本や唐と通商したるは勿論、遠く波斯、天竺、亞剌比亞等とも熾んに交易し、諸外國の珍器が慶州に雲集し、文化は益々燦然として工藝美術の發達驚嘆すべきものあつた。

新羅中世迄は瓦屋は宮殿・寺院官衙等なりしが、洛中洛外續々民家瓦葺に變じ、民衆も驕奢となつた。全盛時代には京洛の戸數拾七萬八千九百三十六に上り、此内大富豪の邸宅が三十五もあつた。各坊數は千三百六十に達し、其延長實に五十五里に亘つた。

文化爛熟

第四十九代憲康王の時代は殷富を極め、五穀も亦豊穰にして新羅黄金時代を現出した。王宮も豪奢を極め、如何なる山間僻地の民家も殆んど瓦葺になつた。官民とも享樂氣分に陶醉し、笙歌舞樂の聲晝夜の別なく王都に滿ちた。文化は爛熟し人心は極度に弛緩し始め國運は著しく傾きかけたのである此時代に明君か忠臣が現はるれば社稷は安泰であつたが駄目であつた。

第五十一代眞聖女王の亂行言語に絶し、嬖人魏弘を寵愛し、親から綱紀を紊亂し、年少美丈夫を王宮に招き入れて晝夜亂行、而も彼等を大官に任用する等、朝憲の紊亂風紀の頽廢極度に達し、盜賊四方に蜂起し、州郡の貢賦は納めず隨て財政益々窮乏し、新羅の衰兆歴々たるものがあつた。

高麗の太祖即位十九年に新羅五十六代の敬順王は治世僅かに九年人の和を得、且つ其冠絶したる富力の賜と今一つは新羅民族が唐、

本塲銘仙
毛糸各種
ちゝぶや
本町二丁目
(電話五〇五番)

兆歴々たるものがあつた。

高麗の太祖即位十九年に新羅五十六代の敬順王は治世僅かに九年にして太子の極諫も聽かず新興の高麗に降つた。併し流石は千年の榮華を誇りし新羅だ。其終焉の幕が如何にも花やかで頗る振つて居る。實に堂々たるものであつた。

新羅終焉

敬順王が國都を出でゝ高麗に朝するや、三十餘里の間播蓋を擁し行く々々管樂隊をして華やかな音律を吹奏せしめ、美童を隨へ香車に乘じ、寶馬陸續として連り、其行列の華麗人目を眩惑せしめ、觀衆堵の如く路傍に充塞した。實に豪奢なる最後の幕であつた。

高麗太祖も厚く遇し、長女樂浪公主を敬順王妃とした。

嗚呼盛者必滅會者定離乎、百濟は六百八十一年にして亡び、高句麗は七百〇五年にして末路靡條！新羅は五十六王九百九十二年にて堂々終焉を告げた。

新羅が比較的小國寡衆を以て起り、獨り永く其繁榮を誇り、其絢爛たる文化の産物は、科學の進歩したる今日よりも實に世界の驚異であるのは、新羅が地の利を占め人の和を得、且つ其冠絶したる富力の賜と今一つは新羅民族が唐、波斯、天竺、亞剌比亞等の文化の精髄を體得し一種の新羅文明を創造した結果である。

高麗は四百七十五年續いたが、李朝の爲に倒れた。李朝は五百年榮えたが日本と合併した。

治亂興亡の跡を繹ぬるも、新羅時代程燦然たる文化を後世に貽したものは無い。私は新羅文明に憧憬し朝鮮を熱愛する（四、一一、二四日、釜山ステーションホテルにて）

冠百濟や高句麗にも行き、具さに艱難を嘗め、日本にも渡殿して淹留數ヶ月、政治及社會狀態を研究

新羅中世迄は瓦屋は宮殿、寺院官衙等なりしが、洛中洛外續々民

問答

橋本豐太郎

（鮮滿開拓株式會社）

貴紙十二月號に『マネキン』の疑議が出てゐましたが、私も其の意味が分らないので、先日佛國領事館茶話會席上にて京城の博言學士と呼ばるゝ佛國人マーテル先生にお尋ねして見ました處が即座に左の解答を得ました。

英語のmanekinは多分佛語のmannequin（マヌキャン）から轉じたものだらふと思ふが、それは佛語で『案山子』の意味です。あの案山子が畑の中に突立つて、鳥や雀を脅威して居るのは、ちやうど先達て鮮銀前の廣場に集つた大勢の人々を驚かして居たのと同じでしやう。然し此の方は反對に人を澤山集めたのは少とおかしいですネ。

アハ、、、。

此の話し序でに、私はまた卓上に在つた『サンドウキッチ』を指してその語原を尋ねました處が、之は歐米各國の共通語で、其の語原は分らないとの事であつた偶々座にあつた某紳士の說明によれば、

曾て狩獵好きの某伊太利貴族が常に山野を跋渉して晝食を攝る暇のないのを遺憾とし、最も携帶に便利なる食糧を工夫したのが其れで、『サンドウキッチ』は即ち同貴族の領地の名であるといふことであつた。

一同はナル程と首肯した。併し『マーテル』サンは其處に一言を挿んで言はるゝには、『サンドウキッチの語源はドウしても以太利語ではないやうだ。露國には『ミハイロヴキッチ』太公等の名稱があるから多分露西亞語かも知れん』との解釋は或は當つて居るのかも知れない。

此の『サンドウキッチ』を二十年前に歐州各國では廣告に利用したのを見受けた。即ち假裝せる異人を前後より板挾みにし、それに面白い廣告文を記載して街頭を徘徊せしめてゐた。官撰の府尹が民間の府政を處理して兩方の板挾みになる場合は、宛も『サンドウキッチ』に良く似て居るやうだ。

明盲亂談

高橋昇

（三菱載寧鐵山）

牡蠣食ふ稽古

福岡の箱崎に居ると、秋から寒い間、牡蠣が澤山ある、澤山あるから安い。下宿などで三度々々の食膳に、何か牡蠣の料理が、ついて居らぬ事が無い位である。

福岡へ行く迄、牡蠣は殆んど食べた事は無かつたし、特にアノ酸の物の、咽を通る時の氣持ち惡るさ。シカシ牡蠣を食べぬと、料理が一品減ずる事になる。それも食事毎にとなつてはたまらぬ。又今迄食物で嫌ひなものは一つも無かつたのに、是丈は……と言ふのも癪である。それやこれやで努めて食べる樣にした。其頃

カキクうケいコは食道樂の一年生

と狂句つた位である。

其後、牡蠣ならば、どの料理でも食べ、却つて大好物になつた。其お蔭で先年牡蠣の酸の物を食べて居ると、何か丸いものが齒に觸れる、雉などには散彈が殘つて居る事もあるが、牡蠣に散彈でもあるまい、兎に角出して見ると眞珠である……珍らしい眞の眞珠だ。

話はそれるが、市販のものは通常媒養眞珠と言ひ、人工媒介により貝に造らせたもので、自然に出來たのと成分其他の內容は全く同じである。又摸造眞珠と正直に名乘れば良いが、中々良く出來て居て、買ひかぶるやつもある。

サテ、口から出た眞珠を良く見ると市販のものより光澤が劣る。石灰質を酸味に入れた譯だから、幾分表面は溶解したものと見える又磨いても無いのだから。達磨形をなし、其大きな方で直徑三ミリ位に過ぎぬ、市販のものに比較しては、三文の價値も無いのであるが、自分の口から取り出したと言ふ所で……ネクタイピンに作り今も愛用して居る。

朝鮮宣傳

朝鮮の事情が內地に餘り否殆んど理解せられて居らず、今も昔と同じく朝鮮全道は虎伏す野邊で、加藤淸正の樣な鎗か鐵砲でも用意せねば歩く事も出來ない、と迄は一般に思はれて居らぬにしても、兎に角まだ〳〵朝鮮の事情が理解せられて居らぬ。

昨年の朝鮮博覽會につき、驛から會場迄何里あるか、其間の交通機關はどうか、宿屋はあるかと言ふ樣な事を、中國のある縣廳所在地の一公共團体から問合せて來たのに呆れたといふ、新聞記事があつた、是は全く極端で、遺憾な次第である。近來內地から修學旅行團の渡鮮が、逐次增加して來るのは、誠に喜ばしい事である。一人でも多く、素通りでも良いから、朝鮮を見て貰ひ度いと思ふ。

それには內地に宣傳しなくてはと思ふが、宣傳も容易ぢやあるまい。先日會つた人で、始めて大連から滿鐵沿線を經て朝鮮に入り、鴨綠江岸を中江鎭の上流まで行つて來たさうで、內地に歸つたら、大に朝鮮事情の宣傳をし樣と思ふ朝鮮事情は國境地方を見ねば解らぬと言ふ樣な話をするので

『朝鮮事情の宣傳は大にやつて貰ひ度い、たゞそれには、國境方面だけで無く、更に中鮮南鮮地方をも視察した上で、大にやつて貰ひ度い。で無いと朝鮮全體が皆國境地方の樣な情態だと、內地の人々に誤解せらるゝ恐れがある。新義州も釜山も朝鮮であるが、一は國境であり、一は內地と餘り變らぬのに、それを混同され易い。內地の人々を朝鮮に引付けるには、却つて南鮮の開けた地方の事情を宣傳する必要がありはせぬか。カノ國境警備の歌は、內地至る所人口に膾炙せられ、朝鮮事情の宣傳に多大の効果は有つたに相違無いが、シカシ此歌で朝鮮を知つた……と言つては少しヒドイかも知れぬが……人々は、朝鮮と言へばすべて『酷寒零下三十餘度』で『妻も銃取り應戰す』る、ドエライ所と思ふものも、多々あると思ふ、國境警備の歌と明かに言ふてあつてさへそうだ。其邊の事を考へて宣傳をせぬと、眉の半面を傳へて居るに過ぎず、勞して効無し、どころが却つて害有りになりはせまいか』と話してやつた。

旗幟幕
龜屋旗店
京城黃金町五丁目
電話本一五八五番

乘れば良いが、中々良く出來て居て、買ひかぶるやつもある。

それには內地に宣傳しなくては、と思ふが、宣傳も容易ぢやあるま

京城雜筆

獨語

永樂町人

正月

私達の少年時代には、マダ〳〵面白い人間がゐた。節季、師走といふても、コンナには、理づめでなく、日本獨特の、樂天的氣風が横溢して、ソコにも、コヽにも、話の種子の、こぼれ咲いたものである。

金錢の貸し借りの話でも、そんなにネチ〳〵したものでなく、双方二口、三口押問答すれば、スグ埒が明き。あとは、債債權務兩者が、何はともあれ。先づ一杯……しまいには、双方ベロ〳〵となり往來の眞ン中、雪の中などで、大の男が、抱き合つて、ころがり。よく見ると、お互にベロ〳〵頬ッペタを、甜め合つてゐるといふやうな圖。決して珍らしいものではなかつた。

お正月となると、猶更らのことである。四海同風、どこの家へでも押し上つて、眠くなれば、ところ嫌はず、大の字の高鼾……。それだからとて、近い中、免職の辭令を握らせられるやうなことは、萬々なかつた。

第一、人の懷がひろかつた。寛容の氣風が、すべての人の胸にあつた。今の世の形相を見ると、日本あり來りの、天下泰平面、現世滿悅面、乃至は、お目出度面、ひやうきん面、とぼけ面などは、見やうたつて、見られぬ。

善し惡しの理論は、別として、世の中は、確かに寂しくなつた。

そして、日本國民は、昔ほどに、仕合せでなくなつたといへやう。

手紙

小學時代の友達が、全南の咸平郡に住んでゐる。百姓としては、先驅者で、今はもう、數十萬の資產を作つてゐるのである。

この友人は、マダ京城を見たことがない。博覽會當時、『一度出て來てはどうか』と、勸めてやると、『御厚意は、難有いが、我々百姓が、そんなものを見たところで、どうなるものか』といふやうな返事を寄越した。

ナルホド、博覽會を見たところで、財布の輕うなる意味はあれ、手土產に、白米一俵でも、持つて返れといふものはあるまい。彼の性格として、來ない方がホントウだと思つた。

同じ時代の友人が、咸北の雄基に住んでゐる。これは、自分のためには一事もせず。營々として、他人の世話燒きに、一生を送らういふ筋の人間だ。資產無一物、しかし雄基の名物で、委員とか、代表とかいふて、年中總督府などへ出かけてゐる。

全南は、咸北の浮いた生活を、脚下の固まらない生活を、『あれも困つたものだ』と心配する。反對に、咸北は、『迷土まで持つて行ける財產ぢやあるまいし、爪に火を點してどうする』、宗旨違ひは、互に鼻の先で、セヽラ笑つてゐました。

極最近咸北が、どうしても纏まつた金の必要を生じて來た。流石の樂天家?も、スッカリ參つてしまつた。所詮我々の仲間で、どうなるものでもない。心當りといふと、全南一つだ。だが、これは、なか〳〵容易でない。私は、彼に代つて、毎日のやうに、手紙を書いて見るが、どうも全南を、ホロリとさせる自信はない。

涅槃鄉

昔から人間の世界を改造して、理想境を作らうとしたものは、頗る多いのである。

今後も、この種の理想家は、續々出ることであらう。

しかし、この地上に、天國や、極樂や、涅槃の境地が、果して示現することありや。まことに、心細いと思ふのである。

我々が、巍々たる大ビルヂングを見ると、その形觀、その機構に驚嘆するのであるが、しかし人間箇々の魂は、決して煉瓦でもない石片でもない。プラトンの設計圖を持つて來ても、レニッの建築樣式を持つて來ても、『よろしい、私は、永遠にその踏石とならう』といふものはあるまい。

實をいふと、人間が、理想境を思ふことが、既に一つの『叛相』であつて、これあることが、永遠に、人の世の不安定を指示するものではあるまいか。

昭和四年十二月廿五日印刷
昭和五年一月一日發行
本誌定價
一ケ月（一部）四十五錢
半年分　二圓六十錢
一年分　五圓
京城府和泉町一七〇
發行兼編輯人　松本武正
印刷人　石川利夫
印刷所　京城日報社
京城府和泉町一七〇
發行所　京城雜筆社
電話光化門三〇六番

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には
鮮内産品使用御奬勵の
御思召を以て
三和高麗燒
漢陽高麗編
三和燒
製造元
富田商會へ
御下命願上げます
京城南大門通三丁目
電本三三〇九
同本町二丁目
電本五五四

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實 塩炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式 松の實菓子）
金剛おこし
金剛しるこ

金剛煎餅　金剛山
金剛羊羹　金剛饅頭

京城本町二丁目
亀屋商店
電話二十七番
本局四七五番

生氣嶺炭

鮮內有煙炭中、その品質發熱量第一なること
今回の朝博發表の分析表に依りて證明せらる

價格 京城市內配達賃共 一噸一五圓八〇
同 半噸 八圓〇〇

朝鮮中央總發賣元
小林藤商店石炭部
京城明治町一ノ一〇

ストーブ

協和型 各種ストーブにつき比較研究をなすこと多年、最も優秀なるを『センター型』及『協和型』なりと確信し博く江湖にお勸め致します
センター型

價格

センター型	一號	六疊用 一八圓五〇
	二號	十疊用 二五圓〇〇
	三號	十八疊用 三四圓五〇
協和型	一號	廿疊用 四〇圓〇〇
	二號	十疊用 二五圓〇〇
	三號	六疊用 二〇圓〇〇

京城明治町一ノ五四
櫻井秀專商店
電話本三〇〇二

新地各種

仕立鄭寧

既製品も
いろ〳〵とり
そろえ居候

京城府鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

冬來る！

溫泉(いでゆ)をたづねて

○東萊　釜山驛より自動車三十分
○信川　沙里院驛より私鐵一時間
○儒城　大田驛より自動車四十分
○龍岡　鎭南浦驛自動車一時間半
○溫陽　天安驛より私鐵三十分　京城驛からは直通あり
○朱乙　朱乙驛より自動車三十分
○平山　南川驛より自動車一時間半
○溫井里　歙谷驛より自動車四時間

溫泉行汽車賃割引

主要驛及溫泉附近各驛から溫泉まで三割引（通用十四日間）
又は四割引の往復乘車券を發賣して居ります

朝鮮總督府鐵道局

東城雜筆（第百三十一號）　大正十三年一月二十九日　昭和四年一月一日發行　（第三種郵便物認可）（毎月一回一日發行）